

---

# 悲しみの果てに

十六夜 彩太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悲しみの果てに

### 【Nコード】

N9991S

### 【作者名】

十六夜 彩太

### 【あらすじ】

かつて英雄と言われた特異な能力を持つ者達は現在は異端者として蔑められている。異端者というだけで奴隷として一生を終える事になるこの時代、例外的に許されているゼジムは圧倒的な力を争いに使う事無く、愛する者達と暮らしている。

しかし、ある時を境に彼は変貌せざるをえなくなる……。

2011/09/14 序章追加

## 序章（前書き）

9月14日追加。

まだ悩んでいる為、変更があるかもしれません。

## 序章

ラルクルス大陸には五つの国がある。

各国とも関係は良好だ。それには理由がある。

昔、ラルクルス大陸には魔獣と呼ばれる巨大な魔物がいた。その魔獣は人間では太刀打ちできなかった。

街を襲われ、人は毎日減っていった。殺される者、喰われる者、そしてその残骸。人々の生きる気力を消す光景があちこちで見られていた。

そんな時、救世主となる若者達が現れた。

その若者達は、どこにでもいそうな若者達だったが、魔獣をあつさり倒したのだ。

彼らは次々と各地にいる魔獣を殲滅し、魔獣がいなくなった頃には、大陸の勇者として崇められる程となっていた。

彼らは特異な力を持っていて、それは人間達が作るどの武器よりも勝っていたという。

彼らの様な不思議な力を持つ者達は次第に、ゆつくりとではあるが増えていった。

民や王達はそれを純粹に喜んでいたし、彼らのおかげで長い平和が訪れたのも確かだった。

だが、平和が続き過ぎたせいで、彼らを守る立場であつた特異能力者達が横暴を働くようになってしまった。

普通の人間では相手にならない程の力を持っている彼らは、力に溺れた彼らの行いは正に傍若無人だった。

それでも、彼らの絶対的な力に逆らえない人間達は耐えていた。いざ、魔獣が現れた時に、守ってくれるからだ。

街が、国が滅亡するよりは、我儘な勇者の子孫に従っていた方が良かったのだ。

しかし、ある時人間達は蜂起する。

勇者の子孫達が一同に集い、大陸統一を唱えたのだ。

その頃には、魔獣など滅多に現れる事もなく、外からの恐怖が無くなりつつあったのも幸いし、人間達は勇者の子孫達との決別を決めた。

後に語られる「ケレーヌ川の聖戦」とは、大陸を両断するように流れているケレーヌ川が最終決戦場だった事に由来している。

長年の戦により、数の利で人間達が辛くも勝利し、人間達は勇者の子孫達を残らず処刑。

魔獣の姿も無くなり、人間達はついに真の平和をこの手に掴んだかの様に見えた。

だが、この頃から世界各地で、勇者の様に特異な力を持つ者達が各地に現れ始める。

本当にその時期から現れ始めたのか、ただ勇者や子孫達の影に隠れていただけで、実は昔からいたのかはわからないが、その時から人間達が彼らの存在を知った事だけは事実だ。

各国の王達はかつて聞かされていた特異な存在である彼らに恐怖した。

しかも、その者達は勇者と何の関係もない、国の民達から生まれた者達なのだ。

当時、「勇者の呪い」と言われていたこの現象を解決したのは、ミリタリア国王だった。

「呪いの種を放っておくわけにはいかない」と、特異な能力を持つ者達を次々と処刑した。

行き過ぎた処置ではあったものの、民達はそれに賛同した。

民達の心には、勇者の子孫達がしかした大罪がしっかりと根付いていたのだ。

以来、特異な能力を持つ者を「異端者」とし、異端者であるだけで、罰せられている。

現在では研究が進み、赤子の頃に「異端者」かどうか選別出来る様になった。

さらに、15歳前後　成人する前後　に能力を覚醒する事が分かり、それまでは男は人目につかない場での労働、女は主に貴族の慰み者としてつかわれている。

それにより、以前は手塩にかけて育てた我が子を泣く泣く手放していた親達の心身も楽になったし、労働力の提供という事でいくらかお金も入る様になっていた。

何もかもうまくいっていた。人間達にとっては。

歴史は繰り返す。

人間達は知らない。かつて自分達を感じた思いを、異端者達も感じている事に。

そして、誰もが知らなかった。

この戦の結末がどうなるかを。

## 始まり

商人の言い値が予想以上に高く、カーテンの隙間から射す光にすら苛立ち、男は立ち上がった。

男の名はゼジム。無造作に伸ばした銀髪は後ろに流しており、力強い黒い瞳は苛立ちのせいかな若干細められ、非常に鋭い。長身で筋肉も程良くついている。見る者が見れば騎士か傭兵かと見間違うだろうが彼はそのどちらでもない。最も、彼の剣の腕はそれに匹敵するが。

相当ふっかけてしまったと思ったのか商人は突然立ち上がったゼジムにびっくりと一瞬体を震わせたが、ゼジムはそれを無視し、カーテンを直しに行く。

「彼女を見ればわかる通り結構な上玉なんですよ」

見た目どおりないけすかないダミ声を放つ商人を無視し、ゼジムはカーテンを直した。「それでもマケてる方ですぜ」

その言葉にゼジムはびっくりと眉をひそめ、ソファアに戻る。

「マケてる……ねえ。俺はお前の事を信頼していたんだがなあ」

ゼジムの言葉に商人の表情が厳しくなる。その様子を見て、ゼジムは自分の予想が間違っていない事を確信した。

「なあ、15歳以上の異端者を奴隷として捌いて良かったか？」

予想通り、商人の顔はみるみるうちに青ざめていく。

「そんなことが国にバレたらお前、奴隷商はできなくなるよなあ。最悪、吊るし首だな」

「な……なんで」

こうなってしまうば、ゼジムの勝利は揺るがない。取引とはいかに相手の弱みに付け込み、自分を有利にさせるかで決まるのだ。

「確かに俺はお前に15歳近くの奴隷を手配するようにいつも頼んでいるが、いくら上玉とは言え、15歳以上の奴隷を法外な値段で売りつけようってなら、俺とお前の信頼関係は崩す他ねえな」

「いやっ、あう……」

「幸い俺は国お抱えの石破師だ。通報は簡単にできる」

「ま、待ってくれ！」

勝った。ゼジムは勝利を確信した。後は安く買いたたくだけである。

「まあ、お前がどうしても買ってほしいと言うなら買ってやらない事もない。まあ、言い値の十分の一の値段になるがな」

「そっ、それはいくらなんでも」

「お前に選択権があるとでも？ お前ができる事は俺にあの奴隷を十分の一の値段で売るか、その汚い首を国にさらすかのどちらかだけだぜ？」

商人は黙るしかなかった。あまりに安く買いたたかれた事により怒りをどこにも発散できずに、ただ震えていた。

「じゃあ、これが金だ。またよろしく頼むよ兄弟」

ゼジムは商人の言い値の十分の一の金貨を商人に渡した。商人は悔しそうに受け取ると、今まで一言も発さず、石の様に立ちつくしていたみすばらしい格好の少女を睨み、そそくさと退室していった。  
「ふう……」

ゼジムは溜息を一つ吐き、肩を揉んだ。商人が何か隠しているのはすぐにわかったが、それが何なのかを探り当てるのはさすがに疲れていた。

ゼジムはその疲労の対価と言える新たな奴隷となった少女を見た。何の感情も持たないのか、商談が成立し、商人が姿を消した今でも動く事はない。

「おい」

しかし、意識を失っているわけではないようで、ゼジムが声をかけると、ぴくりと体を反応させ、死んだ様な眼でゼジムを見つめる。

「名前は？」

「……レイサン」

「能力は？」



「開花した……」

「そうか。はつきり言うが、お前には俺を愛してもらう。いや、そういう関係になりたいと言った方が良いかな」

「愛して……？」

ゼジムの言葉があまりにも予想外だったのだろう。レイサンと名乗った少女が初めて感情を露わにした。

「そう、ここにはお前と同じ境遇だった……まあ奴隷だった女が沢山いる。俺は石破師だ。知っているか？」

ゼジムの問いにレイサンは首を横に振った。

「能力を使うと性欲で補おうとするのさ」

「つまり、あなたの慰み者になれと？」

吹き返した感情が、瞬く間に消え去った。また死んだ様な眼に変わったのだ。どうやら、勘違いをしているらしい。

「違うな。愛し合うんだ。俺もお前を愛するからお前も俺を愛するんだ。それまでお前は抱かない」

だから、ゼジムがそう言うのと、またレイサンの表情に生気が宿った。

「なんで、愛し合う？」

「その方が幸せになれるだろ？ 石破師の習性とはいえ、手当たりしだいに女を襲うんじゃ芸がねえ」

ゼジムは力を使いだした頃からそう考えるようになっていた。力を使えば、女を抱く事に不便はない。脅せばいいだけなのだ。忌み嫌われている異端者とはいえ、ゼジムの地位は国に認められている。生まれたばかりの赤子が死なない程度の気を当て、異端者かどうか選別する。その細かな調整ができる石破師は数少ない。異端者を生まれてすぐに見分け、奴隷として教育させる今の国のシステムではゼジムは貴重な存在なのだ。

だが、ゼジムはその地位に溺れる事なく、本当に愛し合った女性だけを抱いている。しかも、その女性は皆が皆異端者であり、奴隷として買ったのである。

これについてはゼジムは相手を哀れんでいるからではない。奴隷  
選んでとても重要視している事があるのだ。

目の前に連れてこられる奴隷は皆死んだ様な眼をしている。その  
中でも本当に死んでいる者と、まだ心の奥底が生きている者に別れ  
る。まだ、少しでも人生を恨んでいない女性を見分け、買っている  
のだ。

根底から人を憎み、人生に絶望している奴隷を救いだす事はでき  
ない。ゼジムはその事をよくわかっている。最初の頃はお金が許す  
限り手当たり次第に奴隷を買ったが、いずれも自殺してしまった。  
いくらこちらが優しくしても、愛を与えても、そういう者達を救  
う事はできないというのがゼジムの結論だった。

今回のレイサンも死んだ様な眼で人生に嫌気がさしているように  
見えたが、その根底にある物は腐っていないと判断した。その予想  
が当たっていたと言う事は生気が宿った目の前の少女を見れば明ら  
かである。

「まずはその服をどうにかしないと。 ロンド！」

ゼジムが大きな声で部屋の外に向かって叫ぶと、一つの足音が遠  
くから聞こえ、それが徐々に近づいてきた。その音はこの部屋の前  
で止まり、その瞬間ドアが開く。

「お呼びですか？」

「おお、ロンド、今日から仲間のレイサンだ」

ゼジムはロンドと呼んだ女性にレイサンを紹介した。ロンドはに  
っこりとレイサンに微笑んだ。レイサンはというと、まだ心を許せ  
ていないわけではないらしく、ぎこちなく会釈をする程度だった。

奴隷として何年も教育させられていたのだから仕方が無い。逆に  
その教育を受けて今だに心を保っていられた事の方が奇跡に近いの  
だ。

心さえ失っていないければ、いずれはロンドのように裏表ない笑顔  
を浮かべられるようになる。ゼジムはそう信じている。

「じゃあ、レイサン。ロンドに着替えさせてもらえ。その後、これ

からについて話し合う」

ゼジムはそう言い残し、部屋を後にした。

？

レイサンは目の前にいる年が自分とそれ程変わらないであろう女性が次々と取り出してくる服に呆氣にとられていた。自分が今何をされているのかもわからない程の動揺を感じている。

ここに連れてこられるまでは奴隷としての教育を強制され、厳しく鞭を振う大人に心をずたぼろにされた。一緒に教育されてきた仲間達は日に日に言葉少なになっていき、ついには喋る者はいなくなつた。

それでもレイサンは人としての心を失わずに生きてきた。いつか、いつか人間としてまっとうに生きていけるようになる事を夢見て。

しかし、それは突然きた。大体12歳を過ぎたあたりから商品として売りだされる。レイサンは自覚していなかったが、自分はとても美しいらしく、良い値で売れると商人は喜んでいた。

が、顔だけではどうしようもない問題もあるらしい。胸の発育が悪く、男を悦ばす技が拙いせいで、買い手が中々現れなかったのだ。さらに他の奴隷達よりも少々高値が付いていたのも原因だった。貴族達は自身の欲望を満たすことが第一だ。レイサンの美貌はとても魅力的だったのだろうが、ただそれだけである。それならば、レイサンより美しくなくても、胸があり、技があり、安価な奴隷を買おうと思ってしまうのだろう。貴族達はレイサンを見るものの、結局は自分の欲望を満たす事ができる奴隷達を買っていった。

このまま誰の慰み者にもならず殺される運命なのか、と思つていた矢先、急に胸の発育が始まった。日に日に大きくなっていき、顔も体も女性としての魅力に溢れた物になっていた。

しかし、遅すぎた。15歳を超えてしまい、能力を開花してしまつたのだ。これには商人も落胆の色を隠せなかった。折角の上玉が売り物にならないなんて育てた意味もなくなり、金の無駄になったからだ。

だが商人は諦めなかった。ミリタリア一番の変人と言われる男の下に売りにだしたのだ。その変人も異端者であるが故、能力を開花させている事がいずればバレても大丈夫と踏んだのだ。

（ゼジム……といったかな）

レイサンは先程の男を思い出していた。商人の企みに気付き、言値の十分の一で自分を買った男。金なんてすべて商人の懐に入ってしまうので、安く叩かれても自分には関係なかった。

ただ、商人が悔しそうに屋敷を出ていったのを見て、レイサンの心の中がいくらか清々しくなった。ざまあみるとさえ思った。

それでも、将来に希望を見出せる事はないと思った。ゼジムが安く買いたたいたのはゼジム自身の為であり、己の欲望を満たすためだけに自分は使われるだけだと思っていたからだ。

しかし、話してみると、ゼジムにその気はないようだった。レイサン達奴隷達は貴族の慰み者としての教育を受けている。男を喜ばし、男の欲を満たす技を習っていた。

男を喜ばせなければ死だけなのだ。そう聞いていた。

だが、今日レイサンの主人となったゼジムは愛し合うと言った。

その言葉は今でも信じられない。

（そんなうまい話なんてあるの？）

もし、あの男が言った事が本当ならば、奴隷として売られたのに、人間としてまっとうに生きていける気がするのだ。だからこそ、男の言葉が信じられなかった。

（ああ言って、私を騙す気かもしれない）

もしかしたら、信頼を得てからその信頼を一気に落とす事で興奮を高める男なのかもしれない。色々な男がいると教育されたが、確かにそういう男もいると聞いていた。

（心だけは許してはだめ。抱かれても、心さえ許さなければ生きていける）

レイサンは日頃から思っている決意をより深めた。好きなようにはさせない。自分の心だけは自分のものなのだから。

「レイサン……だつたわよね？　どの服が良い？」

ようやく服を並べ終わつたのか、目の前の女性が話しかけてきた。確か、名前はロンドと言つたはずだ。

ロンドは両手を広げて様々な服を見せてきた。しかし、レイサンにはどれが良い服なのかはわからないし、自分の様な者が貴族がきている様な服を着る事が許されるのか気になった。

目の前に広がっている服達はどれもシルクで出来ていたり、上質な布でできている。自分が今きている汚い布の服とは素材が違う。

「遠慮しないでどれでも好きな服を着てね。こういつてはなんだけど、ライバルでもあるけど仲間でもあるんだから」

「ライバル……？　仲間？」

レイサンのその言葉に引つ掛かりを感じ、思わず問い返していた。「そう、ゼジム様の愛を奪い合うライバルでもあるけれど、ゼジム様を愛する仲間でもあるのよ」

ロンドは恥ずかしげもなく愛について語った。レイサンは違和感を感じずにはいられずにいた。奴隷に対して蔑むような言葉遣いでもないし、あげくには仲間とまで言ってきている。

色々考えた末に、レイサンの頭の中に一つの考えが浮かんた。

「ロンドさんも……元奴隷？」

失礼に当たる言葉だとは思つたが、意を決してレイサンはきいた。それ以外に考えられないというのもあつたが、彼女はこんな事では怒らない、そんな気がしたのだ。

「奴隷なんて言わないで。私達はゼジム様の愛する人よ。あなたも」レイサンの予想通り怒りはしなかったが、人差し指を口元に当てられ、説教をしてきた。奴隷という言葉にロンドが反応したように思えた。

「私、よくわからないのだけれど」

レイサンは正直に言つた。たつた数度しか会話していないが、目の前の女性が信用できると思つたのだ。

「よくわかるわ。私もそうだったから。けどあなたは何も心配しな

くていいのよ。ここで、普通に生活して、普通の女の子として生活するのよ。そして、ゼジム様に対して愛を芽生えたら、告白するの」  
ロンドは両手を祈るように握り、乙女のように瞳をキラキラとさせていた。レイサンはその様子と、彼女が言った言葉に呆気にとられるしかできなかった。

（普通の生活？）

益々わからなくなった。あの男は奴隷を買ったのでないのだろうか。なぜ、そのような回りくどい事をするのかレイサンは理解に苦しんだ。どうせ、最終的に抱く事に代わりはないはずだ。

「あの人は何なんですか？ そんな面倒くさい事しなくても、お金で買ったのだから私を好きにすればいいのに」

その言葉にロンドは苦笑していた。そんな表情をされる理由もレイサンにはわからなかった。

「あのね、誰もかもを信用しなさいとは言わないわ。だけどね、ゼジム様だけは信用して。彼は愛に満ち溢れた人よ。あの人のそばにいれば、絶対幸せになれるから。私が保証してあげる。あなたと同じ境遇にいた私が言うのよ。だから大丈夫。すこしずつ心を開いてね」

ロンドは優しく微笑んでいた。遠い過去を思い出しているかの様にも見えるし、そう遠くない過去を思い出しているようにも見えた。とても、不思議な表情だった。

ただ、これだけは言えた。もし、彼女も奴隷だったのなら、レイサン自身が夢見た理想の状態が目の前にいるロンドだ。奴隷だったのに、笑顔を忘れず、人にやさしくすることも忘れず、幸せにまっとうに生きている。

もしも、彼女が言っている事が本当ならば、レイサン自身もいつか屈託のない顔で笑える日がくるのかもしれない。警戒していた心は解され、そこから希望が溢れていくのをレイサンは感じていた。

「よし、その笑顔のままね。しかし、中々手ごわそうなライバルが現れたものね。胸は負けているわ」

ロンドに言われて、自分が微笑んでいた事に気づく。いつから笑っていたのだろうかと思えても答えは見つからなかった。

「あつ、そんなことより紹介しなくちゃね。あなたのライバルであり仲間。そうね……」

ロンドは何かを思い出したかのように両手を叩くと、並んでいる服の中から白いシルクのワンピースを手に取り、レイサンに渡した。「今すぐこれに着替えてね。後で髪も梳かしましょう。それじゃとっても綺麗な金髪が台無しだわ」

そう言ってロンドは他の服をしまい始めた。取り残されたレイサンは仕方なく、渡されたシルクのワンピースに着替える事にした。ワンピースはちょうどいい丈だった。若干胸の部分がきつかったが、そんなことより自分がこんな綺麗な服を着ている事が信じられなかった。

（凄く綺麗……）

窓から差し込んでくる光を白いワンピースが反射して、ワンピース自体が光っている様だ。その様子にうっとりと見とれていると、やがてロンドが戻ってきた。後ろに何人かの女性を引きつれて。

「あら、やっぱ美人ね。良く似合っているわ」

ロンドが手放して喜んでいる。が、レイサンは緊張を隠せずにいた。その視線はロンド以外の女性に向けられている。

表情がぎこちないレイサンに気付いたロンドが慌てて説明をした。

「あつ、ごめんね。この人達もライバルであり仲間の子達よ。右からウェディ、カーナ、ティナ、トウレネ、ミルファーよ」

ロンドに言われて、次々と横に並んでいく女性達。その様子をレイサンは呆然と眺めていた。

（こんなにあの男は囲っているの？）

正直な気持ちであった。一夫多妻制ではあるが、これだけ女性を囲っているのが普通なのかはわからない。なにより、皆美人だった。「ウェディよ。よろしく」



ウェディと名乗った女性はとても赤い髪の毛をしていた。長さは肩程までしかなく、レイサンを含めた7人の中で一番髪が短かった。肌に密着したシャツを着ていて、女性らしさが惜しげもなく出されている。大きな瞳はとても力強く、美人ではあるが気の強そうな印象を受けた。

「カーナよ。中々の顔だけど、負けないわよ」

不敵な笑みを浮かべながら会釈したカーナと名乗った女性は妖艶という言葉がよく似合う女性だった。レイサンと同じ金髪だが、若干波がかっている。切れ長の目はどこか挑発的で、柔らかそうな唇も男を振り立たせそうだった。胸元が大きく開いた黒いドレスが女性としての魅力をひきだたせ、そのドレスに負けないぐらいの豊満な胸が半分近く露わになっている。スタイルも良く、彼女に言い寄られて断る男はいるのだろうか、とレイサンは疑問に思った。

「私はティナ！ よろしくね！」

快活に元気な声で挨拶をしたティナと言う女性は、挨拶通りの元気が溢れているのがわかる女性だった。大きくくりつと開かれた瞳はとても綺麗で、動きやすそうなシャツとズボンも彼女に合っている。先の二人に比べたら物足りない大きさの胸ではあるが、それでも十分に女性としての魅力を醸し出している。

「トウレネよ。わからない事はなんでも聞いてね」

トウレネと名乗った女性は良くも悪くも普通だった。いや、美人ではあるし、胸もスタイルも魅力的なのだが、周りにいる女性に個性がありすぎるからか、レイサンの目には彼女が普通に見えたのだ。「ミルフアーよ。よろしく」

ミルフアーと名乗った女性は女性なのに黒いスーツに身を包んでいた。長身ですらつとしていて、腰まである長い黒髪はとても綺麗だが、どこかとっつきにくさを感じる。

「で、あたしがロンド。よろしく」

最後に挨拶してきたロンドは使用人のような格好がとても似合う女性だった。淡い水色の髪の毛は後頭部の辺りで一回結っている。

馬の尻尾を連想させるその髪型はとても似合っていた。大きな瞳は優しさに溢れている気がするのはいくぶんでも彼女の優しさに触れたからだろうか。

全員が挨拶を済ますと、急に沈黙が訪れた。気まづくなりかけたその時、女性達が無言なのは自分の挨拶が終っていないからだと言付く。

「レイサンです。よろしくお願いします」

レイサンは慌てて挨拶をして、頭を下げた。頭を上げた頃には女性達が次々と話しかけてくれていた。女性達に見惚れていたせいで危うく挨拶を忘れる所だった。レイサンはちよつとホツとしていた。「皆、仲間だからだね！ 遠慮なんかしないでいいから」

ウェディが微笑みながらレイサンに言った。彼女もロンドと同じく、屈託のない笑顔だった。

（もしかして……期待していいのかな）

自分が思い描いた輝かしい未来。普通に生まれてきた人間にとつたら当たり前前の生活だが、異端者として生まれた自分からしたら、茨の道だ。

しかし、もしかしたら、この道もそれ程辛くないかもしれない。目の前の女性達と一緒になら。あの男がいれば。

「はい、よろしく願います！」

そう言ったレイサンの顔はぎこちないながらも、笑みをつくっていた。

？

カーテンを開け、外からの日差しを浴びる。ゼジムは上質な布と上質な綿をふんだんに使ったソファアに腰掛け、明日の選別依頼が書いてある書類に目を通していた。通常は2人居れば多いのだが、明日は4人の赤子を選別しなくてはいけない。一人一人に膨大な神経を使わなくてはいけない作業だけに、明日を考えると気が重くなる。レイサンが屋敷の一員となる日と言う事で本来なら非常に喜ばしい日なのだが、今はまだ気を緩める事ができない。

「そういえば、今日はシェイビイの所へ行く日だったな……」

シェイビイは反政府組織フリーゲルのリーダーである。ゼジムとシェイビイは6年前、ゼジムが15歳になった頃からの仲だ。

当時、異端者としての能力を開花したで、力を暴走させていたゼジムの前に現れ、救ってくれた男だ。その後、彼との修行を経て、国に貴重な存在として扱われる程の技量を持つことができた。恩師と言っていていいし、感謝もしている。

しかし、当時から感じていた事だが、彼の思想とは相いれない。シェイビイの目的は人間達を滅ぼし、異端者達が天下を取る。異端者の失われた栄光を取り戻す気なのだ。しかし、過去に受けた恩がある以上、手助けをせざるを得ない。

とはいっても、奴隷の立場からしたら人間達に利用されるよりはシェイビイと共に人間達に復讐する事の方を選ぶだろうと考え、人間に憎しみを持つ奴隷の発掘に関してだけの協力だ。今回も奴隷の要請を受けていたが、商人がここ最近心が死んだ奴隷達しか用意してこなく、成果はない。信頼されている様なので成果無しの報告をするのは、信頼を裏切ったようで少々気が進まないが、レイサンを渡す事はできないので仕方がない。

「しょうがない。気遅れする仲でもないしな。それに早く報告なんて終わらせて、レイサンを祝わなければならぬ」

ソファーから立ちあがり、背伸びをする。本来ならば今日は休暇の日なのだが、奴隷商人との取引や、シェイビーに報告をしにいかなくてはいけないなど、休暇らしい休暇ではなくなっていた。

それでもレイサンの事を考えると幾らか気持ちが悪くなったので、部屋を出ようかと足を動かそうとした時、ドアを叩く音が入る。  
「なんだ？」

この後の予定はなかったはずだが、急用でも入ったのだろうか。シェイビーに報告をして今日の用事も終わり、レイサンを祝う事を考える事で引き締めていたので、新たな予定が入るかもしれないと危惧しただけで、気だるさが若干復活した。

「失礼します」

畏まった声でドアを開けたのはロンドだった。ゼジムと目が合うと頬を赤らめながらにつこりと微笑み、ゆつくりとゼジムに近づいてくる。彼女のすべてを許してくれているような優しい微笑みは相変わらず心地よかった。

「ちょうどよかった。頼みたい事があったのだが……そっちも用事か？」

「ええ。レイサンの事で。ゼジム様のご用件は？」

ゼジムは少し気になったが、ロンドの表情を見て悪い話ではないとふみ、自身の要件を言った。

「畏まりました。すぐ行かれますか？」

「そうだな。早くレイサンを祝ってあげたいからな」

ゼジムは破顔してロンドの頭を撫でた。その行動で、ある事を思い出した。

「ところでお前の話は？ レイサンは祝えるのか？」

ゼジムが危惧しているのはレイサンが来たばかりの段階でどれだけここのもてなしを受け入れてくれるかどうかだった。中には人が大勢いる環境が嫌な者もいる。レイサンは話しかけただけで目を変えたのでゼジムはその点は気にしなかったのだが、ロンドの頭を撫でた事で、過去に頭を撫でられる事を異常に拒否した女性が居た事

を思い出し、心配になったのだ。彼女もレイサンの様にすぐ生きたいという意思を確認できた程の強い女性だったが、多数での日常生活に恐怖を感じ、この屋敷を出ていったのだ。

「大丈夫そうですね。まあすべての事をやらなければわからない事もあります、皆でいる事や、食事をする分には問題は無いかと。笑顔も見れましたので」

ロンドの報告を聞いてゼジムは若干だが安堵できた。笑顔を見せるのは奴隷だった者にとっては大変な事なのだ。奴隷生活中に笑いなどしたら、教官に罰せられてしまう。感情は必要なく、貴族達を満足させられる技を身につける事だけに力をいれているのだ。そんな生活を何年もしていると笑い方すら忘れてしまう奴隷達が後を絶たないのだが、レイサンはその点では大丈夫のようだ。最も、大半がロンドのおかげだろうが。

「そうか。じゃあ行こうか」

ゼジムはそつとロンドを抱き寄せ、背中を優しく撫でた。彼女がその心地よさに身を任せる前に体を離し、ゼジムは部屋を出た。心配の種が一つ消えた事で随分機嫌が良くなった。ロンドはゼジムの気紛れな抱擁に不満があるようで、若干顔を膨らませながらゼジムの後についてくる。そんなロンドの様子をおかしく思いながらも、ゼジムは屋敷の地下に向かった。

屋敷の地下には部屋が一つだけある。正確には二つも三つもあるのだが、屋敷から降りてきて確認できるのはこの部屋だけだった。後は隠し部屋になっているので、この屋敷に住んでいる者以外にはわからない事だった。

ゼジムも含め、この屋敷には異端者しかない。異端者の立場は常に危ういのが現状だ。何かのきっかけで命を狙われる可能性は0ではないのだ。そうは言っても見た目で只の人間か異端者を見極める事はできない。ロンドは異端能力のせいで髪の毛の色が違っているので異端者だと簡単にわかってしまうが、この国の平民は黒髪、貴族の

血を少しでも引いていれば金髪と言う事は異端者でも例外ではないのだ。

ロンドの様に力を使って行くうちに髪の毛の色が変わる事はあるのだが、人間に紛れて生活する分には異端能力を使う事など無い。只の人間のフリをして生活をしている異端者がいたとしても不思議は無いのだ。だからこそ、国もそこには力を入れている。貴族達の家には抜き打ちで訪問し、15歳を超える奴隷、もしくは能力を開花している奴隷がいる貴族には厳しい罰を与えている。貴族ではないが、ゼジムが奴隷を良く買っている事は知られてるので、よく国の役人が来るのだ。ロンド以外は見た目で異端者だとわからないので、貴族が着ている様な高級な服を着せる事で只の人間だと思われている。奴隷は死んだと言う事にすれば役人も深く追求しないのだ。

それでも、念には念を押すと言う事で隠し部屋を作った。

それに、隠し部屋はただ隠れるだけの場所ではない。貴重な交通手段を隠す場所にもなっている。

「それでは忘れ物等は本当にありませんか？」

ロンドが確認してくる。ゼジムは小さく頷き、隠し部屋を開いた。そして入り口のすぐ横に掛けられている燭台に火を灯す。その部屋には幾つもの水たまりがあった。

その水たまりは、でこぼこした石の畳みの上にあるにもかかわらず、綺麗な円を描いている。なにより、普通の水と違って、どこまでも深い気がするほどの深蒼色をしている。

その水たまりにロンドは触れて気合の声を放ち、手に力を込めた。すると、水たまりが微かに輝きだす。水操師であるロンドの能力である。

「ではその水たまりに入ってください」

「ああ、行ってくるぜ」

ゼジムは笑顔で返し、水たまりに両足を揃えて飛び込んだ。そこは水の池ではなく水たまりだ。それなのに、その水たまりはゼジムの体全てを飲み込んだ。

ゼジムが水たまりの中に消えると、水たまりは役目を果たしたかのように輝きを失った。

すうつと落ちていく感覚が全身を襲う。目の前も下も深蒼の水であるが、濡れる様子は無い。

いつまで続くかわからない程の深蒼の道のりを、ゼジムはぼーっと眺めていた。今、ゼジムはロンドの水操師の能力で水たまり間の移動をしている。

水操師は自身が能力で出した水を行き来できる力を持っている。移動水と言われるそれは、永続的に維持させるには何日も力を使つて作らなくてはいけない。

ロンドが仲間になった時、ゼジムは彼女と色々な街を訪れた。ロンドがゼジムの力になりたいと言うのでした事だが、共に戦つてくれる事とは別の意味で淒く役に立っていた。

なにしろ、移動水さえ作ればどんな離れていようと、外界から閉鎖されていようと数十秒で着いてしまうのだ。30日もかかる道のりですら数十秒である。今向かつているフリーゲルのアジトだって、本来なら何十日もかけなければ着かないのだが、ロンドのおかげで数十秒で済むのだ。異端者しか持ち得ない能力。普通の人間にはできない事である。

ふと、ゼジムは何故普通の人間は異端者を憎むのか考えた。例えば水操師の能力は普通の人間にとっても便利なはずである。しかし、彼らは固くに異端者を拒否している。国の意向と言うものもあるが、それにしたって酷い。

異端者はその昔、英雄として崇められていた。世界各地に存在した魔獣達を次々と倒し、世界を救った。しかし、魔獣がいなくなつてからおかしくなり始めた。国間の戦争では人間兵器として使われ、その辺りの時期から異端能力を悪用する者も増えた。

いつしか、異端者は恐れられ、憎まれ、ついには殲滅させられた。異端者の横暴に我慢ができなくなった人間達が総力を結集させたの

だ。そこまではよかった。自分達の力を過信して人を傷つけた異端者がいた事も事実であり、異端者とはいえ、その罪を償うのは当然である。

しかし、事はそう簡単に終わらない。殲滅させられた異端者だったが、普通の人間同士の間にも生まれた子供から異端者が生まれた事が発端だった。異端者の呪いと言われ、異端者を生んだ両親もろとも処刑された。今でこそ、奴隷として扱う様になったが、当時は悲惨だったと聞く。異端者だから殺され、異端者を生んだから殺される。そんな事を繰り返していくうちに異端者という存在は忌むべき物として作り上げられたのだ。これは当時の国王達が、異端者を恐れ、策を講じたと言われているが、その真偽はいまだにわかっていない。

（なんでだろうな……）

同じ人間のはずだ。しかし、人と違う能力をもっているだけで、その人生は普通とはかけ離れ、中には一度も幸せを感じずに死んでいく。なんとかしたい、と思うが、世界は広すぎる。自分一人が訴えても意味は無いし、そんなことを訴えれば今の職も失い、自分も狙われる事になる。ゼジムはそこまでして異端者を救いたいとは思わなかった。今の異端者への待遇は気に入らないが、異端者の態度も気に入らないのだ。死を覚悟しているとえば聞こえはいいが、要は人生を諦めているのだ。現状は異端者にとっても風当たりが厳しい世の中ではあるが、諦めない気持ちがあれば、なんとかなる事もあるのだ。ゼジム自身がそうだった。15歳になる前日、主人である貴族がゼジムの殺すと話しているのを盗み聞きし、屋敷を逃げ出した。抜け出す際に貴族の子供の服を一着盗んで、普通の少年を演じた。簡単な事だ。異端者と普通の人間の外見的な違いはない。奴隷の服さえ脱ぎ捨てて事ができれば、世界は一転するのだ。生きたいと願ったからこそ、今のゼジムがあるのだ。ただ死んでいく異端者達にはそれが足りないのだ。ゼジムが奴隷の教育を受けていた時も、周りの異端者達は既に生きる事を諦めていた。ゼジムはそれを



生きたいと願う強さの差だと思っている。そして、自分と同じ様に生きる事を諦めていない奴隷を買っている。自分が抱く為もあったが、それだけでは彼女達の人生は変わらない。だからこそ、愛し合う関係が必要なのだった。無論、ゼジムを愛せなかった女性達は屋敷を出て、自分達の力で暮らしている。一人立ちできる援助は惜しまない。生きたいと思っただけでゼジムは嬉しいのだ。

気付くと、深蒼の道に終わりが近づいてきていた。眩い光がゼジムの目を刺激する。数十秒と言うのは何もしていない状態だと結構長く感じるものだが、変な考え事をしていたおかげで一瞬の様に感じられた。

「俺は何を考えていたんだろうな」

ゼジムは苦笑した。人間と異端者の関係なんてゼジム一人が考えた所で何も変わらないのだ。

眩い光はどんどん近付いてくる。もう手が届くぐらいだ。自分が何故こんな事を考えたのか理由はわかっていた。レイサンである。彼女は生きたいと思い続けていた。だから、ゼジムの下に来る事ができたのだ。

運もあるかもしれない。しかし、その運を呼び寄せるのも彼女が諦めなかった結果である。

「フン……早く済ませるか」

無性に彼女と話したくなった。彼女が今何をしたいのか、彼女の好きな食べ物や好きな事を一緒に作り上げていきくなった。

ゼジムの急かす心に呼応されたかのように急速に光に近づいて行き、光はさらに増した。光が収まる頃には周りは深蒼ではなくなっており、闇よりも深い黒色の部屋に出ていた。

？

漆黒。光源は壁に掛けられた蠟燭だけである。その蠟燭も部屋の大きさに比べて明らかに少なく、対して意味を為していない。部屋全体を黒く塗っているからなおさらだ。ゼジムはこの空間にいるだけで、気分が滅入るのだが、この部屋の主はそうではないらしい。

ここはシェイビイの部屋である。ゼジムだけが直通の水たまりを作る事を許されているのだ。数年来の友の証でもある。

「久しいな。ゼジム」

どこから声がした。声の主が誰かはすぐにわかったが、どこにいるかはわからなかった。しかし、そんな事は関係ないようにゼジムもどこかに向かつて話し始めた。

「久しぶりだな、シェイビイ。早速で悪いが、中々生きが良いのがいなくてな。悪いが今日は誰も連れてきていない」

「そうか」

今のシェイビイの言葉はどこから聞こえてきたのかわかった気がした。ゼジムが声の主がいると感じた方向に目を向けると、漆黒の闇の中で気配があった。部屋の隅にあるベッドに腰掛けていたようだった。最も、あまりにも暗いのでベッドを確認できたわけではない。以前も少し明るかった時の家具の位置を思い出してみると、そこにベッドがあった気がしたのだ。

「残念だが、お前の目は確かだからな。世話をかけたな」

この部屋を最後に訪れてから一カ月が過ぎている。その間週に一回は奴隷商人が姿を現す。計四回の奴隷商人の訪問があるにも関わらず、一人も奴隷を変えていない事は今までになかった事なので、シェイビイも何らかの関心を持つかと思っていたが、ゼジムの予想とは反して責められるどころか、労をねぎられてしまった。

「兵が減る可能性もあるから、今のうちに後の戦力を確保しようと思うかと思ったのだが、うまくいかないな」

ゼジムはどう答えていいか悩んでいる所に、シェイビイはさらに話を続けた。とはいっても、ゼジムに言ったというよりは自分の考えが無意識に口に出してしまったように思えた。先程より若干声が小さかったからだ。しかし、会話がないと耳が聞こえなくなってしまうたのではないかと勘違いしてしまいそうな程、音がなにこの部屋の中では少しぐらい声が小さくなってもちゃんと聞こえてしまう。ゼジムは聞こうかどうか迷ったが、意を決して聞いた。聞こえないフリもできたが、話の中身が中身だったので気になってしまったのだ。

「兵が減る可能性ってどういう事だ？」

やはり無意識に言葉が出てしまっただけだった様で、シェイビイから中々返事が来なかった。もしかしたら言いにくい事なのかもしれないが、暗闇の中では彼の表情が読めない。それに、気になったとは言っても、ゼジムは彼がこの後言うであろう言葉の予測はついていてほしい。極僅かな確率だが、それに賭ける気持ちで聞こえないフリをせずに聞いたのだ。

しばらくして、シェイビイは答えた。

「兵達の力も充実してきた。そろそろ戦でも仕掛けようかと思っ  
な」

シェイビイは、世界中を敵に回すと言っても過言では言葉を、まるでつまらない本を朗読しているかの様に抑揚なく答えた。どうやら悩んでいたわけではないようだった。しかし、やはりシェイビイの言葉はゼジムが予想した通りの答えだった。

「本気でやる気なのか？」

愚問だと思っではいても聞かざるを得なかった。思想が合わなくとも数年来の友なのだ。異端者が戦を仕掛けたと広まれば、各国が血眼になって、シュピーゲルを潰しにかかるだろう。そんな危険な事を宣言されては、こちらとしては止める他ない。

「当たり前だ。お前はどうか知らないが、俺達は人間達への恨みは

少しも消えていない」

シェイビーの言葉は先程と変わらず、まったく感情が籠っていない。恨んでいるなら多少なりとも憎しみの感情が出てくるはずなのに、シェイビーにその様子は見られない。それがかえって不気味だった。説得は不可能だと肌で感じる事ができる。しかし、ゼジムは諦めなかった。

「相手は世界中になるわけだぞ？」

ここラルクルス大陸には大国が五か所ある。大陸西を丸々領土にしている、ゼジムが所属している国でもあるミリタリア。大陸中央北にはオーコム、中央南には、ここフリーゲルのアジトがあるザンガ。北東にはブライド、南西にはヘンネル。いずれの国も異端者を忌み嫌う風習があるのは変わらない。隣接国同士多少のいざこざはあるだろうが、異端者が襲撃したとなれば、各国同盟を組み、異端者の殲滅に全力を注ぐであろうことは目に見えてわかる事だ。

「鍛えた異端者ならば、一人で人間100人程の戦力になる。一つ一つの国を潰していけばなんとかなるさ」

ゼジムはシェイビーの見解に一瞬浅はかだと感じたが、この男はとても頭が切れる男だと言う事を思い出す。恐らく、ゼジムには言えない秘策があるのだろう。

「お前がそう言うのなら別に良いが……ミリタリアを攻める時は言ってくれよ。新しい職を探さなきゃいけないからな」

どうせ、聞いてもはぐらかされると思い、ゼジムは話題を変えようとした。が、それは叶わなかった。

「お前も一緒に戦ってほしいのだが」

これにはゼジムも驚いてしまった。今までの付き合いから、例えシェイビーが誘ってきたとしても断るだろうと思わせたつもりだった。彼が思想を語った時も賛同した事はないし、奴隷を買う協力を受けた時もしっかりと戦には参加しないと云ったのだ。

「馬鹿を言うな。俺には幸せな家庭があるんだからな」

ゼジムはシェイビー達はまだ戦ができる程の力はないのかもしれ

ないと思っただが、あえて即座に断りを入れた。もしかしたらゼジムが戦に協力する事で戦を始める算段なのかもしれないと考えたからだ。頭の切れるシェイビーがそんな分の悪い事に賭けるとは思わなかったが、少しでも可能性があるならば、やっておく事に越したことはない。

「そうだな。なら仕方ない」

しかし、シェイビーの反応は驚くほどあっさりしていた。ゼジムが、自分が深く考え過ぎたのかと思ってしまう程、シェイビーからして見たらどうでもいい事だったらしい。若干落胆したが、それも自分の思いあがりのせいなので、外には出さないよう振る舞う。

「すまん。じゃあ、俺の用事はそれだけだからよ」

お互い離したい事は終えたと思い、ゼジムは言葉でしか確認できない友に向けて手を振り、踵を返した。

「襲撃の前にお前と飲んでおきたいんだが」

「飲む!？」

背中に投げかけられた言葉に、ゼジムは振り向いてシェイビーが居るであろう場所を見つめた。驚きを隠せない表情で。

「ああ」

「俺の記憶ではお前は酒が嫌いだったはずだが」

「嫌いというわけではない。好きでもないが。だが、一度ぐらいお前と飲んでみたかったからな。最後になるかもしれないし、悪いが付き合ってくれないか？」

最後になる　その言葉には不退転の決意を感じた。やはりゼジムの加入の有無は関係なかった様だ。もう既にシェイビーの心は決まっている。

ゼジムは完全に諦めざるを得なかった。いや、最初から彼を止める事はできないとは考えていたが、友の言葉なら少しはわかってくれるかもしれないとも考えていた。しかし、ゼジムの言葉は鉄の鎧に矢を放ったが如く弾かれている。彼の心に些かも影響を与えていない。それが寂しかった。

「最後なんて辛気臭い事はきかなかった事にして、そう言う事なら付き合うぜ」

シェイビーの決意を感じ取っても、協力する事はできない。友として何もできない。だが、だからこそ気持ち良く送りだしてあげようと思った。

「ありがとう」

感謝の言葉は相変わらず抑揚のない声音だったが、ほんの僅かだが感謝の気持ちが進められている様に感じた。5年も付き合いがあるにも関わらず、新しい発見だった。

「で、どこで飲むんだ？ 酒場か？」

「いや、絶好の場所があるんだ。三日後の夜にここにきてくれ。ここから移動できるから」

シェイビーが場所を押さえているなんて微塵にも思っていなかった。で、ゼジムはまた驚かされた。てっきり自分が場所を探すとばかり思っていたからだ。これも新しい発見だった。

「わかった。じゃあ三日後な」

再び水たまりまで歩いて行く。今度は呼び止められなかった。

ゼジムは水たまりを靴の裏で優しく触れた。屋敷の移動水の前に居るはずの Rond への合図だ。Rond はすぐに気づいてくれた様で、瞬時に水たまりが再び輝きだした。

「じゃあな」

振り返りもう一度別れの挨拶を告げ、ゼジムは水たまりの中へ入り込んでいった。

？

屋敷に帰ってくると、食欲をくすぐる良い匂いがした。地下でゼジムからの合図をずっと待っていたロンドに感謝の口付けをし、ゼジムは広間へ向かった。

料理を作る者は毎日違う。女性達が順番に作っているのだ。今日の豪華な食事は本来の当番であるカーナの他にティナが手伝ったようだ。

レイサンの祝賀会は愛する女性達のおかげで無事に終わった。レイサンも初めはその食事の量、豪勢さに目を丸くしていたが、徐々に慣れていき、会話はまだ慣れない部分もあるので仕方ないが、女性達の話の聞いているレイサンの表情は他の女性達と相違無かった。そして今、ゼジムは自分の部屋にいる。上質なソファ―に腰掛け、目の前にいる女性を眺める様に見ている。ゼジムの視線の対象であるレイサンは祝賀会の時とは違い、若干緊張している様に見えた。恐らく、男性であるゼジムに対してはまだ心を許せないのだろう。レイサンとしては主人の立場でもある。奴隷時代の教育で男に嫌悪感があるのかもしれない。いずれにしても、ゼジムは彼女の気持ちが痛い程わかっていた。しかし、ゼジムはそれに遠慮する事無く、思った事を口にする。彼女を知るために。

「楽しめたか？」

突然だったので、レイサンの体が若干強張る。思ったより男性に嫌悪感、恐怖感があるのかもしれない、ゼジムは観察するようにレイサンを見つめた。

「はい」

レイサンは目を合わさず、簡潔に答えた。それは会話を拒絶している様にも感じられたが、ゼジムは再度質問を投げかける。

「お前の今の気持ちを話してほしい。色々あるだろ？ 目の前の男は何故あんなに女性を困っているんだ？ とか、目の前の男は変態

なのか？ とか」

ゼジムは冗談のつもりで言ったのだが、レイサンの表情は変わらなかった。しかし、少しは場を和ませる事ができたのか、レイサンは静かに口を開いた。

「私はあなたの奴隷ではないのですか？」

「違う。今はこの屋敷に住む一人の女性だ。いずれ、愛し合う仲になる予定のな」

「私は異端能力を使う事ができます。そんな私を囲っていれば、国の役人に目をつけられるのでは？」

「それは大丈夫だ。この屋敷には異端者しかいないからな。最も、その事実は隠しているが。それにお前が異端能力を使える事は商人も知っているからな。申し訳ないが、屋敷の扉から出る事はできない」

「屋敷の扉からと言う事は、別の方法があると言う事ですか？」

「そうだ。ロンドが水操師という術者なのだが、彼女の能力で、屋敷から出る事なく、別の街、別の国に飛ぶ事ができる」

ゼジムが息をつく間もない程の早さで次々と質問をしてくるレイサンに内心驚きつつ感心していた。頭も相当切れるようだ、それ以上に目を見張ったのは物怖じしていない事だ。知らない者が二人のやりとりを見ても、奴隷として屋敷に来て初日の女性とは到底思えないだろう。

「では外出も自由なのですか？」

この質問にはさすがに苦笑するゼジム。思ったことは何の躊躇いもなく口に出すようだ。もしかしたら、彼女は今までで一番気が強いかもしれない。

「それは自由とは言えない。お前の身の安全のために、俺が同行する」

「では、私がいつまでもあなたを愛する事がなかったら？」

「その時はお前が望む様にするさ。一人で暮らしていききたいなら援助する。まあ、最低一年は居てほしいな。それぐらい居れば、一人



で生きていける術がある程度身に付くはずだからな」 聞きたい事が一区切りついたのか、レイサンは頷きながら考え事を始めた。軽く握った右拳を顎に当て、視線を上に向けているその姿ですら絵になる。

「何か不満でもあるか？」

「いえ……。それより話をまとめると、私はここで屋敷の中では自由に生きられると言う事ですか？ そして、最低一年以上あなたを愛する事ができなかった場合は、ここを離れて自由に暮らす事ができると？」

ここで初めてレイサンの心の内が少し垣間見えた。

「その通りだが、何故お前は自由になりたいと思うんだ？」 ゼジムの言葉は予想外だったようで、レイサンは驚きの表情を見せた。恐らく、何故自分の考えてる事がわかってしまったのかと思っただけだ。相手に興味がある人との会話に慣れていないせいだ、自分の言葉の意味を探られている事に気づいていないのだ。今まで彼女の周りにいた人間達は人生に絶望し、全ての興味を失くしていた人形のような人間しかいなかったのだから無理もないことだった。

「何故、私が考えている事がわかったのですか？」

気の強さ故か、探究心故か、はたまた純粹だからか、あっさりとゼジムの言葉を肯定してしまった。しかし、心を見透かされていると思われたのは誤算だった。初めて、レイサンの顔に不審感がありありと浮かんでしまったのだ。

「それは色々な人と会話していけばいずれわかることだ。それより、答えを聞かせてくれ」

レイサンは納得していない様子だったが、渋々答えを話し始めた。「私は生まれてすぐに奴隷育成所に入れられました。教官から教わる事が正しいのか正しくないのかわからず、ただ言われるがままに生きてきました。けど、ある時奴隷の女の人が言ったのです。なんで異端者として生まれてきてしまったのだろうか、と。そこで私は自分が異端者と言われる人間に忌み嫌われる存在なのだと気付きま

した。その後もその奴隷の女の人に話を聞いて行く内に、私達みたいに厳しい教育を受ける事なく、幸せに生きていける人達が居る事に。捨てられない様に、好きでもない男性に色気を使って。能力が開花したら殺されて。どんなに長くても15年程度しか生きる事ができない私達に比べ、普通の人間達はその何倍も生きる事ができるけど、そこで不思議に思ってたんです。なんでこの女の人以外の世界の事を知っているのだろうか。だから、信じなかった。後から思ったのですが、あれは育成所に雇われた女性か何かだったのではないかと。しかも恐らく、私が他の奴隷に話す事で、奴隷全員に話がいくようにしたかったのだと思っただけです。事実、私が他の人に言わなかったのも、彼女は別の人に話していました。それからしばらくしたら、皆生きる希望を失った様に、顔に生気がなくなっ……

レイサンはその時の事を思い出したのか、苦虫を噛み潰したように表情を浮かべていた。ゼジムは彼女がまた話し始めるまで待つ事にした。しばらくすると、レイサンが溜息交じりに話を再開させた。「本当に……あの時の私は凄く悩んでいました。目の前に居る、生きていくのに死んだ奴隷の人達を見て、私は普通の人間と同じ生活をしてみせる、という気持ちと、この人達みたいに絶望して感情を失い、運命に抗うことなく短い命を終えるか……。生きる事を辞めた人達を見て、楽そうだなって思ってた事もあったんです」

「確かにあそこで自分を保ち続けるのは大変だよな。しかし、今は絶望させるためにそんな姑息な策を講じているのか。俺の時はそういうの無かったのにな」

ゼジムは当時の事を思い出す。確かに、あの時は生きる事を諦めない者は少なくなかった。もしかしたら、当時の奴隷達が貴族の屋敷から逃げ出す事が多くて対策したのかもしれない。

「そういえば、あなたも異端者でしたね」

レイサンは今までその事を忘れていたようだ。余程話に夢中になっっていたのだろう。

「異端者であそこの出身者じゃないやつは田舎で生まれた奴ぐらいたろ。それで？ そんな想いを抱いた事もあつたけど諦めないで今に至る、という感じか？」

ゼジムはなにやら嫌な予感がしたので、自分の話をすぐに止め、話を元に戻した。しかし、レイサンという女性を甘く見ていたらしい。

「あなたが言った通りです。奴隷として売られても、絶対負けない。いつか逃げ出して普通の生活をしてやるって思っていました。だから、現状に戸惑っています。どんな仕打ちを受けても耐えて見せると意気込んできたのですが、今の私は奴隷とはかけ離れた服を着て、主人であるあなたに奉仕もする予定もなく、普通に会話できる環境なのです。だから、まずは自分の気持ちを整理する時間をいただきたいです。恋とか、愛とか今の私では考えられません。ところで、随分唐突に話を終わらせようと思いましたね？ 何かあるんですか？」

レイサンはゼジムの狙いを簡単に見破っていたのだ。それでも質問にちゃんと答えてから追及してくるあたり、彼女はとても真面目な性格なのかもしれない。

そんな事を考えながらも、ゼジムは内心焦っていた。自分の過去の話なんて大して面白くないと思ってるし、楽しい話でもない。しかも、あくまでも予想の範疇であるが、夢中になるほど話が好きなレイサンに短く終わらせようとしても、うまくいくとは思えなかった。僅かな疑問でも質問され、結局全部話をさせられてしまう様な気がしてならないのだ。

「そうか。それはゆっくり、お前のペースで答えを出してくれ。期限は設けないからよ。さあ、今日はもう寝よう」

ゼジムはそう言いながらゆっくりと立ち上がり、背伸びをした。まるで今日の話は終わりだと言う様に。そして、そのまま歩き始めた。横目でレイサンを見たが、一瞬だけ大きな目をさらに大きくした後、伏し目がちにゼジムの動きを追っていたが、何も言ってくる

様子はなかった。ゼジムの言葉に納得してくれたのかは分からなかったが、今日に関してはなんとかかなりそうだった。好感度は下がったかもしれないが、ゼジムは気にしない。他で好感度を上げる自信があるからだ。だから、今回少しばかり好感度を下げたとしても、後に響く事はないと考えていた。

「ゼジム……さん？」

あと少しでドアに辿り着く、と言うところでレイサンはゼジムの名を呼んだ。初めて名前を呼ばれた事に驚き、振り返りレイサンを見た。レイサンは顔を上げ、ゼジムのまっすぐ見つめた。口元にやや笑みがあるのがゼジムの嫌な予感を増幅させる。

「何だ？」

動揺を隠し、何気なく聞く。

「あなたが先に出て行ってしまったら、私はどうやって部屋に帰ればいいのかしら？」

ゼジムはあつ、と声を上げた。まだ彼女に部屋の場所を教えないのだ。ゼジムが出て行ってしまったら、彼女は自分の部屋場所を知る事なく、自力で部屋を探すしかない。それは、ゼジムが日頃心の中で大事にしている愛する女性達への思いやりを足蹴にした行為に他ならない。そんな事すら頭から抜けてしまうとは思っていたより動揺しているらしい。

「そうだったな。悪い」

ゼジムは申し訳なさそうにレイサンに頭を下げた。過ちに気付いた時はプライドや見栄は張らずに素直に謝るのもゼジムが心の中で決めている事だった。下手なプライドや見栄は得になる事はないのだ。

「余程話したくなかったのですね。そんな事を忘れてしまうなんてレイサンは口元の笑みをより深くしていた。凶星だった。

「あなたは私を惚れさせると言っていたけど、私は見た目や言葉では選びませんよ。下手な誤魔化しとか嘘をつく人は嫌いですけど」言葉の終わりと同時に鋭い視線がゼジムに浴びせられた。レイサ

ンとうまく付き合うには些細な事にも注意しなければいけないように感じた一瞬であった。油断もあった。奴隷から解放された一日目、まだこれが真実なのか夢なのか疑っているのが今までの女性達だったが、彼女は違った。冷静に現実を見ていて、ゼジムに対しても一歩も引かない。ゼジムも経験しているが、あれほどの奴隷教育を受けたはずなのに、彼女はそれを微塵にも感じさせない。ただ気が強いわけでもない。何事にも屈しない心の芯が彼女を支えているのだ。彼女は、生きるという事に貪欲であり、だからこそ、自分が愛する可能性がある男に厳しく接している様に見えた。

「あー……わかった。悪かったよ」

ゼジムは観念して再びソファに腰を下ろした。彼女に嘘は駄目だと判断した。今回は言いたくないわけではないが、色々突っ込まれるのを回避するために誤魔化したので、話をするという事については、この後の質問攻めを思うと気は進まないが話しても構わないしかし、本当に彼女に知られたくない、知ってほしくない話の時はどうやって回避すればいいのか考えたが、彼女の真つすぐな瞳を見ていると、答えは出そうになかった。

ゼジムは長い溜息を吐いた後、レイサンに忠告した。

「長くてつまらない話だぞ？」

「どうぞ」

ゼジムが話をしてくれるとわかったからなのか、レイサンは微笑んでいた。興味があるからなのか、話をするのが好きだからか、ゼジムにはわからなかったが、この笑顔が見れるなら今後もレイサンの強いお願いを断る事はできないかもしれないと思ってしまった。しかも、それが大して嫌ではないと感じている。女性にこのような感情を持つ事は初めてだ。

ゼジムは新しく芽生えた感情に戸惑いながらも昔話を始めたのだった。

？

レイサンが屋敷の一員になってから三日が過ぎた。その間ゼジムは仕事に忙しかつたのだが、時間がある時にレイサンと話したり、他の女性からレイサンが一日どう過ごしていたか聞いたりしたり、彼女の情報を着々と得ていた。

ロンドの話によると、レイサンはやはり話が好きなようだ。誰とでも話をするらしく、あの子は本当に奴隷だったのか、とロンドも驚いていた。疲れた様な顔をしている女性達を見ると、その日にレイサンと話していたのが誰かわかるのがおかしかった。

レイサンは話相手が捕まらない時は本を読んでいる様だった。奴隷教育の中で、文字の読み書き、言葉遣いの勉強はゼジムが居た時から変わっていない。貴族によっては、自分の仕事をやらせたりする者もいるので、奴隷教育の中で力を入れているのだ。そのおかげで、逃げ出しても言葉も文字もわからないという事にならずに済んでいる。貴族達が求めている事ではあるが、それは皮肉にも奴隷達が逃げ出した時に、普通の生活をする時に役に立つ事でもあった。

他には、レイサンは傀儡師の能力がある事がわかった。傀儡師はオーラと呼ばれる異端者特有の気を操り、物や人を操る事ができる術師だ。レイサンはまだ、オーラの系を出すのが精いっぱいの様で、物を動かす事はできない。しかし、彼女ならいずれうまく使える様になるだろうと考えている。

お金の知識、値切る術、人との付き合い方はまだ慣れていないが、これも時間が解決してくれるので、ゼジムは大して気にしていない。とはいえ、実際に楽しそうにしているレイサンを見るとほっとしていたゼジムなのであった。

レイサンが問題なくつつがない生活をしているのを見て、ゼジムは安心して夜出かける事ができた。彼女の心配をしていなかったとはいえ、完全に安心しきっていたわけではない。万が一と言う事が

あるのだ。過去につつがなく生活を出来ていたのに、ある特定の行動をする、もしくはされると尋常ではない拒絶をする者もいたのだ。体に触れられるとおぞましく感じるらしく拒否する者、字を書こうとすると見ていてわかるぐらいに手が震えた者。いずれも奴隷教育の時に精神的外傷を受けたようだった。傷に触れる行動をとる時、思い出したくないのに鮮明に頭に思い浮かぶと言っていた。それはこちらが注意すれば良いだけで、ゼジムは彼女達の傷を大して気にしていなかったのだが、普通の生活に支障をきたす恐れがあると感じた女性達は屋敷を出ていった。自分が他の人と違う部分があると、すごい気になるらしく、それが大勢との生活となると、より苦痛になるそうだ。それを言われるとゼジムも強く引きとめる事ができずに見送るだけだったが、今でも彼女達がちゃんと生活できているのか気になっている。

だから、レイサンの事についても油断は出来ない。一見問題もなく、強い気持ちに胸に秘めている。だからと言って、心の闇がないというわけではない。その闇を知るには時間をかけなければいけない。長い間レイサンを見て、長く暮らす事によって彼女の信頼を得て、心をさらけ出す事を待つしかないのだ。彼女のゼジムに対する態度を見るに、遠慮はしていないように思えるが、それもまた偽った姿なのかもしれない。目の前に見える彼女の姿を、ほんの僅かだとしても疑い、そう考えなくてはいけないのがとても嫌だったが、過去に奴隷教育を受けた者としてはその考えを捨てる事ができないのは仕方がない事だった。

「あいつとも、もう少し向かい合わなければいけなかったのかもな……」

ゼジムはこれから会う男の事を思い浮かべた。何年もの付き合いなのに、知らない事だらけだ。つい先日ゼジムが知らない彼の一面を見た。もう少し、彼の事をわかる事ができれば、戦など彼はしなかったのではないだろうか。

「いや、ありえねえな」

即座に否定する。シェイビイもまた、レイサンに勝るとも劣らない心の強さを持っている。ゼジムが何を言っても、彼の行動を止める事はできなかったであろう。ゼジムに出来る事は一つ。

「今日は盛大にやるしかねえよな」

気持ちよく送りだす事だけである。

「本当、友としては失格だな」

何の力にもなれない自らを責める言葉を吐き、ゼジムはロンドが待つ地下へと向かった。

風が心地よく流れている。風にそよぐ草達。ゼジムの銀髪も風に吹かれ、時には舞う様に、時には流れる様に、風の気分に遊ばれていた。時折ゼジムの視界を邪魔してくるので鬱陶しかったが、今その事を気にしている場合ではなかった。

「どこだここは？ それにあいつらは……？」

ゼジムはロンドの力でシュピーゲルのアジトへ向かった。そこで待っていたシェイビイに連れられ、彼の部下の水操師の移動水を使って出た所は、月の明かりに照らされている平原だった。そして、そこには数十人のシェイビイの部下達もいた。見知った顔　ゼジムが連れてきた奴隷もいる。

「あいつらは余興をしてくれる。俺達はゆっくり酒を飲んでいれば良い」

隣に居るシェイビイが手を上げると、数十人の部下達が一齐に動きだす。シェイビイは怪訝な表情で隣に居るシェイビイを見る。シェイビイは無表情で部下達を見ていた。ロンドよりも深い青い髪をしたシェイビイは蒼炎師だ。能力を使っていると、髪の毛の色が徐々に変化していく。能力者でも能力を使わなければ普通の人間と変わらないのだが、能力を使い過ぎると明らかな違いが出てしまう。現にゼジムも力の使い過ぎで、黒髪から銀髪になっている。石破師は国のお抱えの術師であるが故、その事で何も言われないが、ロンドやシェイビイは外に出るだけで異端者だとわかってしまう。だから



ら、シェイビイは外に出る事がまったく言つて、ない。そんなシェイビイが外に連れ出してきたという事も、今のゼジムを悩ませて  
いる一因であつた。

「全然事態が掴めねえけど」

「俺がお前を外に連れ出した事も、あの部下達が居る事も、少しすればわかるさ」

それでも納得できないゼジムは怪訝な表情が崩れる事は無かつたが、気にも留めずに歩きだすシェイビイを見て、仕方なくついでに  
く。

しばらく歩くと、そこには酒宴の席が設けられていた。木のテーブルの上に酒瓶、料理が並んでいる。テーブルを挟むように置かれている椅子も簡素な物で背もたれすらない。端には火が灯つていない松明が立っている。シェイビイが右側の椅子に座つたので、ゼジムは左側に座る。

「さあ、始めよう」

シェイビイはそう言つて、指を鳴らした。すると、松明に青い火が灯る。場が一瞬にして幻想的な雰囲気になる。

「随分洒落た演出だな。女を連れてくれば楽に口説けるかもな」

「馬鹿言え。俺はお前みたいに女好きではないんだ」

軽口を叩きあいながら酒を手に取り乾杯する。酒が身に染みる様に巡る。上等の酒の様だ。料理は中々の味だったが、屋敷の女性の腕には遠く及ばない。

「料理だけでも持つてくればよかつたかな」

ゼジムは酔っているせいか、普段の僅かな謙虚さすら無くなつていた。シェイビイはゼジムの言葉に苦笑いを浮かべた。

「お前には合わなかつたか？」

「いや、うまいんだろうが、うちの料理を食べてもらいたかつたかなと思つてな。飛び上がる位美味だぜ」

「そつか。いつか食べてみたいものだ」

部下達の動きを余所に、酒宴は盛り上がった。昔の話が主で、大

半は戦とは関係ない苦労話だった。シェイビィは相変わらず抑揚があまりない声だったが、時折見せる笑みが、彼も酒宴を楽しんでいる証拠だ。

「用意ができました。これからレカーネルに入ります」

ゼジムはあまりにも昔話に花を咲かせていたようで、声がするまでその男の存在に気付かなかった。急に発せられた第三者の声に、ゼジムはぎょつとして声の主を見つめた。青い光に照らされているその顔には覚えがあった。

「グレン……グレンか？」

グレンと呼ばれた男はゼジムを一瞥し、軽く会釈をすると、すぐにシェイビィの前で跪く。

「始める」

シェイビィが淡々と命令すると、グレンは恭しく礼をした後、空に向けて手を突き上げた。気合の声と共に手のひらから小さく丸い炎の塊が現れ、上空に放たれる。突然の能力の使用に、ゼジムは驚きの表情でグレンを見た。

「お前、いきなり何を」

「ゼジム、余興の始まりだ。あそこを見てくれ」

シェイビィはゼジムの言葉を遮り、指を指した。ゼジムは仕方なく、シェイビィの促した方向を見る。そこには村らしき場所があり、その周りを部下達が間隔を開けて立っている。余った部下達は村の入り口辺りに固まっていた。

「そういえば、レカーネルが云々言っていたな。ここはレカーネルの辺りなのか？」

グレンの言葉が思い出され、シェイビィに聞く。レカーネルはラルクルス大陸中央南のザンガ国の村である。シュピーゲルのアジトから13日歩くとあり、人口が50人程の小さな村で、以前ロンドを連れてシュピーゲルのアジトに向かう最中に立ち寄った村で、移動水も設置してある場所だ。夜に出歩く事も無かったために、レカーネルだとは気付かなかったのだ。

「そうだ」

シェイビイは短い答えと共に頷くだけだったが、レカーネル村を見るシェイビイの顔を見てゼジムの酔いは一気に冷めた。憎悪の感情を少しも隠さないその表情は、見ているだけで凍りつきそうになる。殺気も止まることなく溢れだしており、ゼジムですらシェイビイに声をかける事ができなかった。

シェイビイの変わりように、ゼジムはただ立ち尽くした。しかし、さらに驚く事が起きる。視界の端に映るレカーネル周辺の部下が動きだしたのだ。周辺に居た部下達の周りから何かが地面を突き破り、次々と村の上空中心に弧を描いて伸びていく。中心までたどり着く頃には、村はすっかり覆われてしまった。月の明かりが遮断されたレカーネルの村人は戸惑っているだろう。いや、田舎の村は夜が早い。既に起きている者はいないかもしれない。

何をしようとしているのか理解できず、ゼジムはレカーネル村に向かつて走り出した。嫌な予感がしたのだ。彼らがやろうとしている事を止めなければ後悔する。直感的にそう思ったのだ。

村の近くにまで来ると、現状が把握できた。周りに居た部下は土師だった。彼らが操った土が円屋根の様に村を覆ってしまったのだ。「何をする気だ……」

ゼジムの不安をよそに、ぐぐもった関の声が聞こえてくる。村の入り口の方を見ると、そこに集まっていた部下達の姿は無かった。村の入口周辺の土の壁が、人が数人並んで入れる程の穴が開いている。そこから中に入った様だ。

ゼジムの不安はさらに増した。頭の中では非常に最悪な事が浮かんでいる。その予想を裏付ける証拠に、穴から破壊音に混じって怒号や悲鳴が聞こえてくる。

「本気かよ……」

中では想像を超えるような惨劇が起きている。夢だと思っていたかったが、村人の悲痛な叫びが、シェイビイの部下達の怒り狂った叫びがゼジムを現実だと思い知らせる。

ゼジムはシェイビイの下へ駆けだした。心火を燃やして。

「おい！」

ゼジムの叫声をシェイビイは意に介さず、黙々と酒を飲んでいた。ゼジムを見てすらいない。

「なんでこんな事を！？」

ゼジムの声がさらに荒げる。

「戦をすると言ったはずだが」

シェイビイの表情は元に戻っていた。

「今日はお前と酒を飲む約束だっただろうが！？」

「だからこうして酒宴の席を設けたわけだが？」

シェイビイに悪びれた様子はまったくなく、テーブルに肘を付き、残った料理を食べている。それがさらにゼジムの怒りを増幅させる。

「ふざけるな！」

「ふざけてなんかいない」

シェイビイがようやく顔を上げ、ゼジ目を視界に入れる。ゼジ目はシェイビイの瞳に強い憎しみが込められているような気がした。

「いい加減わかれ。何年一緒にいた？」

「どういう事だ？ 何の事だ！」

シェイビイに突然投げ掛けられた問いも、ゼジ目にはまったくわからなかった。表に出ている感情の差がありすぎて、シェイビイが何を言ってもゼジ目の怒りを増幅させてしまう。

シェイビイはいつ怒り狂ってもおかしくないゼジ目を宥める事なく、今回の事の目的を相変わらず抑揚の無い声で話し始めた。

「俺とお前では生きる世界が違いすぎると言う事だ。今回お前に戦を見せたのはお前の気持ちを俺自身に気付かせるためだ。お前は困ると思ったんじゃないのか？ 俺が人間達に戦を仕掛ける事が」

ゼジ目が言葉に詰まる。考えてみれば確かにそうなのだ。ゼジ目は普通の人間と協力して生活をしている。恐れられていると感じる事もあるが、仕事をして、金をもらい、毎日不満のない生活ができている。愛する女性もいる。

つまり、ゼジムの今の生活は、人間達との協力によって成り立っているのだ。勿論、ゼジムも喜んでミリタリア国に仕えているわけではない。奴隷制度も問題視している。だが、仕事をしなければ生活ができないし、奴隷制度は個人の力ではどうしようもない。

シェイビィが為そうとしている事がうまくいくのなら協力する手もあるだろうが、そんなに樂觀できない。一つの国を潰すのならば、強力な術者が集まればできるかもしれないが、それも奇襲が成功した場合の話だ。それに、国が一つ潰れたとなれば、他の国がシユピーゲルを無視するわけにはいなくなる。警戒心が増し、国によつては自ら攻めてくる可能性だつてある。最初に潰した国とは比べ物にならない程の苦戦を強いられるだろう。もし、すべてがうまくいったとしても、異端者の国という理想郷ができるまでには相当な時間がかかるだろう。ゼジムにはそこまで賭ける想いはない。現状に不満はあれど、生活に支障をきたすほどではないのだから。

シェイビィは世界中の人間達を敵に回そうとしている。人間達を憎み、滅ぼそうとしている。世の中に不満しか抱かず、異端者を蔑んでいる人間達に代わり世界を総べようとしている。それは途方もなく、絶望的でもある。未来、将来を夢見る事ができるゼジムとは違い、生きる事も未来を考える事も苦痛でしかなく、只人間達を滅ぼしさえすれば良いと考えている元奴隷達を従え、革命を起こそうとしているのだ。

俺とお前では生きる世界が違いすぎる。

それがすべてを物語っていた。それ以外の理由はない。だから今日、ここで決別をしなくてはならない。友から敵へ。今、関係が変わる。

「わかった。わかったよ」

ゼジムは怒りを抑え、シェイビィを真つすぐに見据えた。次に、彼をこうやって見る時は戦の時になるのかもしれない。

「わかってくれたか？」

シェイビィもゼジムを真つすぐ見ている。

「ああ、残念だがどう考えても俺はお前側に行く事はできそうにねえ」

「だろうな。お前は足枷を付け過ぎた」

シェイビィの言う通りだった。もし、ゼジムが石破師として国に仕えていなければ、愛する女性達がいなかったら、シェイビィに協力していただろう。

「ミリタリアを攻める時は手加減してくれよ？」

「馬鹿言うな」

シェイビィに冗談を言うのもこれが最後だと思つと、何故か寂しく感じた。しかし、シェイビィが覇業を成し遂げるために歩きだした今、ゼジムもいつまでも引きずってられない。だが、シェイビィを目の前に行っている間は気持ちの整理ができそうもなかった。

「じゃあ、元気でな」

そんなゼジムの気持ちを察したのか、シェイビィがゆっくりと歩き出す。気になって彼が歩く方向を見ると、殲滅が終つたのか、円屋根と化していた土達が一斉に崩れ落ち始めていた。さらに視線を動かすと、シェイビィの部下達がゆっくりとこちらに向かっているのが見えた。殲滅が終つたようだ。

鮮やかな手際だった。村が相手であれば、この作戦が破られる事はないだろう。村にいる兵士は領主が抱えているぐらいしかおらず、その数は十人にも満たないだろう。異端者一人で事足りてしまう程だ。

しかし、相手が攻めの姿勢に転じた時はこうはいかないだろう。数の差がありすぎるのだ。いかに一人で100人の兵士に匹敵する異端者と言えど、数の力にいずれ屈してしまうだろう。

故に、シェイビィ達の戦い方は奇襲の一択である。大都市や城を狙うならば、水操師の移動水を使った奇襲戦法しかない。

ミリタリアを歩く時は水たまりに注意を払う必要があると、ゼジ

ムは考えていた。

「移動水は発動させてある」

シェイビィは部下達を眺めたままゼジムに告げた。

「ああ、元気だな」

ゼジムはまだこの場を離れる気はなかったのだが、シェイビィの背中の変を感じ、別れを告げた。シェイビィが友の姿からシュピーゲルのリーダーの姿に変わったからだ。すべてを圧倒する存在感。体を貫く様な殺気。今まで見てきた背中に無かったモノをゼジムは感じていた。

ゼジムにはすぐにわかったのだ。シェイビィがゼジムの気の迷いを晴らすために敢えてやってくれたのだ。だから、ゼジムも帰る事にしたのだ。

今日はシェイビィの為の酒宴だったのが、蓋を開けてみればゼジムの為のものとなっていた。すべてはシェイビィが企んだ事だと確信する。無表情で抑揚の無い声の男とは思えない程の思いやりだった。

（本当に、こういう時にならねえと本心って言うものはわからねえんだな）

普段の付き合いでは見られなかった事だった。もしかしたら、シェイビィと言う男はとても優しい男なのかもしれない。そう思うからこそ残念だった。彼が非道な道を歩む事に。だからと言って止められる事でもないのもわかっていた。シェイビィの鉄よりも固い意思を砕く方法など見つからない。

（俺はどうすればいいのだろうな）

答えなんて出てこない。しかし、それを考える事が自分の役目だと感じた。少なくとも、シェイビィを止めるならば答えを出さなければいけない。

「ゼジム！」

不意に声をかけられる。シェイビィだった。月明かりに照らされる蒼い髪は彼が操る蒼炎の様に幻想的だった。

「早く行け」

どうやら、まだ迷っていると思われたようだった。

「わかったわかった。じゃあな」

ゼジムはシェイビイの気持ちを抑える様に手を上げ、ゆっくりと移動水へ向かって歩き出した。ここで考えていても仕方がない。シユピーゲルがミリタリアを攻めるにはまだ時間がかかるだろう。レカーネルを攻めたと言う事はまずザンガ国から攻めるだろう。国一つを滅ぼすのならば相当な時を要する。それまでに答えを見つけ出せばいいのだ。ゆっくりと考えていてもいけないが、焦らなくてもいい。ゼジムは、そう思った方が名案が浮かぶ事を知っている。

（待ってるよ）

心の中でそう呟き、友としてのシェイビイに別れを告げる。次に会う時は敵となる。その時までには彼を救う手を必ず探して見せる、決心してゼジムはその場を後にした。



？  
**(前書き)**

今回短めです。申し訳ありません。始まりはここまでとなります。

？

村を覆っていた土塊達はレカーネル村をより凄惨にしていた。魂が肉体から離れた、只の人肉と化して村人にさらに追い打ちをかけるが如く、土塊達は村に舞い落ちた。土師の力によって保たれていた円屋根は、土師の力を感じなくなった途端に崩れ落ちたのだ。

生存者なんているわけがない。異端者達の凶刃に身を刻まれているのだ。もし、それでも僅かに息があつた村人が居たとしても、月明かりにより濃紺に感じる空から落下してきた土塊達を受けては生き残る事は不可能である。

「御苦労だった」

人間などが住んでいた様にすら見えない瓦礫の山と化したレカーネル村を満足気に眺めているシェイビイは、目の前で跪いている部下達の労をねぎらった。部下達は無言で頭を下げる。

シェイビイの圧倒的な力による権威と、奴隷達の持つ人間へ憎悪により、目の前にいる部下達は完全に殺戮する事に何も感じない兵となっていた。欲も、恐怖も、悲嘆することもない。只、殺戮の対象となる人間達を殺す為だけに生きているのだ。

今回の襲撃はそれを確認する為の試金石だった。無力の村人達を躊躇い無く殺す事ができる事で、シェイビイの求める殺戮兵が完成した事を表している。指揮官の報告でも、全ての部下達が無我夢中で人間達を切りつけていたという聞いた。

機は熟した。

「お前達はもう戻れ。これからが本番だ。今日はゆっくりと休め」  
シェイビイの言葉に僅かなずれもなく一斉に動きだし、アジトへと続く移動水に向かって行く。シェイビイはそんな部下の様子を眺める。目に見えなくてもわかる土気の高さ。厳しい修練を積んでいるので、剣技も異端能力も十分に使いこなす事ができる。

アジトにいる部下の60人の内、戦に出る事ができる力を持つ者

は今日連れてきた30人程ではあるが、人間の3000人もの兵力に匹敵する。それに加え、グレンなどの優れた術師が加われば、一国の兵士数に十分に対抗できるのだ。

「いよいよだ」

感慨にひたる。ようやく復讐の時が来たのだ。シェイビイも人間を恨みに恨んで修練を積んだ。蒼炎を極め、右に出る者はいなかった。個人としては最強の力を手にしたものの、一人ではどうしようもなかった。人間達の圧倒的な数に、シェイビイも迂闊に手を出せなかったのだ。

だから、シェイビイは仲間を集める事にした。それも同じ志を持つ殺戮兵を求めた。戦の途中で躊躇われては他の部下の士気に関わるからだ。そして、ついに人間達と戦を繰り広げられる程の戦力が揃ったのだ。

「これからだ」

反面、気も引き締める。今回の襲撃等、人間達からしたら小指を針で刺された程度の痛みにすらならないだろう。大事なものはこれからだ。それでも、人間達と戦う事ができる事に喜びを感じずにいられなかった。

「ゼジムさんはやっぱり駄目でしたか」

不意に後ろから声がかけられる。振り向くと、そこにはグレンがいた。真っ赤な短髪は、彼がどの炎師よりも能力を使っている事を示している。彼は誰よりも強くなる事を望み、実現させた。

能力者は大きく二分されると、過去記されたとされる書物に書いてある。一文字師と二文字師に分かれるのだが、二文字師は一文字師の上位術者、つまり能力的に優れている事が多い。能力者の力の源であるオーラと言われる気の量の差は勿論、使える術技も異なる。炎の玉しか出す事しかできない炎師は、炎の形状を操る事ができる猛炎師には及ばないというのが常識であると書物には記されている。

しかし、グレンはその常識を覆した。炎師が炎を操る事ができる

様になる事はない。しかし、グレンは自分の体を限界まで酷使した修練を続けてきた事により、オーラの量を猛炎師にも勝る程に増やし、猛炎師ですら出せないであろう程の大きさの炎の玉を作り上げる事ができる様になったのだ。

さらに、剣術も素晴らしい腕前だ。剣士としても術師としても優れたグレンは、今やシェイビィが頼れる存在となっている。

「ああ、まあ予想通りだな」

シェイビィに落胆はなかった。むしろ、楽しそうであつた。

「あの人も昔は鋭い殺気を持っていたんですけどね……」

グレンは残念そうに呟く。気持ちがわかるシェイビィはその言葉に頷き、またレカーネル村に目を向けた。

「あいつは忘れてしまったただけ。思い出せばすぐに元に戻るさ」

「では……」

「急くな。気付かれたら意味が無いのだ。密偵にもそう伝える。ただし、些細な情報でもすぐに報告するんだ。そして、いつでも俺の命令にすぐ動ける様に準備しておけ」

「すぐ伝えます」

深々と礼をして、グレンも戻っていく。残つたのはシェイビィ一人となった。

先程の酒宴も、戦も行われたのが信じられない程の静けさであつた。時折、不安定な瓦礫が何かの拍子で崩れ落ちる音が聞こえるくらいのもので、風も止んでしまい、草達が奏でていた音色も消えていた。

夜も更ければ静寂が当たり前であるが、まさか村が壊滅しているとは誰も思わないだろう。この事が知られるのは数日かかる。一番近い村ですら幾日もかかるほどの距離だ。領主からの報告が無い事を訝しんだザンガ国の役人か、商人が来た時まではレカーネル村が滅びた事は知れない。

今回は能力を使ったのは土師だけだ。彼らは術使用による反動の回復に専念してもらい、次回は土師抜きの戦になる。異端者の弱点

でもある反動。力を使えば使う程反動も大きくなる。立て続けに攻め入るならば綿密な人員の配置が必要なのである。

無論、シェイビィもそれは理解していたが、何事も実際にして見なければわからない事がある。だから、今回は土師のみに術を使わせたのは、反動から回復する日時を調べる為である。

普段の修行時と回復の速度に変わりがないか、戦で使う術と修行で使う術、同様の術でも環境によってどれだけの違いが出るのか調べる事で、自軍の戦力を正確に把握するのだ。

「やれやれ、忙しいな」

思わず一人ごちた。だが、この道を最後まで歩く時がきたなら、そこに待っているものはシェイビィが夢見ている理想の世界だ。泣き言はいつていられない。

それに、ゼジムの事もある。シェイビィは彼を仲間引きぬく事を諦めていなかった。

「すべて手に入れて見せる」

僅かに緩んだ気を引き締め、シェイビィもアジトへ戻ったのだった。

## 慮外

「どういう事ですか？」

レイサンは可能な限り目を丸くして、目の前の女性を見た。

「だから、か・い・も・の・に・い・く・よ！」

目の前の女性　ティナは律儀にももう一度同じ事を言った。レイサンは困った顔をするしかなかった。

「なぜ買物なんですか？　彼は買物が好きなのですか？」

事の発端はティナの相談に乗った事だった。ティナは17歳と、レイサンと比較的年が近かったのと、彼女が話をするのが好きだったので仲良くなったのだ。ただ、年が近いとは言っても一番離れているのが20歳のウェンディなので、彼女と仲良くなったのは単に話が合うという理由だろう。さわやかな彼女は、少々ドジをするらしく、日々の失敗をレイサンに話してくれるのだ。その話が面白いので、レイサンも興味が沸き、色々と話をしている内に仲良くなった。

そんなティナが、ゼジムの事で相談があると言って部屋に来た。今まで彼女からゼジムの話を聞く事はなかったので、驚きつつも話を聞いた。なんでも、レイサンが来て四日目辺りからゼジムの様子がおかしいと言う事だった。確かに、レイサンも薄々感じてはいたが、本人に聞いてもはぐらかされ、ロンド達他の女性達に聞いてもわからないらしく、レイサンも気になっていた。だから、その理由について調べたりするのかと思っていたが

「だから、ゼジちゃんが元気ないから気分転換に買い物に行こうって事よ！」

申し訳ないが、目の前で得意気に胸を張っているティナの思考がよくわからなかった。ゼジムの様子がおかしい理由がわからなければ、その気分転換の方法も正しいのかわからない。なのに、目の前の快活な女性は、さもこれでゼジムが元気になると言わんばかりの

態度だ。

「ティナさん。彼の様子がおかしい理由が買い物がらみだった場合、逆効果になりますよ？　そして、ゼジちゃんという愛称はちよつと気持ち悪いです」　ティナとは対照的にレイサンは冷静にティナへ突っ込んだ。しかし、論理的な言葉が彼女に通用するはずもなかった。最近分かった事だが。

「そんなのやってみなきゃわからないわ。それにゼジちゃんとゼジムちゃんだったらゼジちゃんの方が良いでしょ？」

「やって駄目だったらどうするんですか？　そもそも私は外に出た事がないんですが。あと、愛称の候補はその二つしかなかったのでしょうか？」

「その時は謝るだけよ。あと、愛称の候補は他にゼちゃんもあつたけど、これは誰かわからないから却下したの」

こうやって二つ三つの話を同時に話すのが二人の会話の特徴であつた。レイサンは二つ目の話　外に出た事がない　の返事が来ていない事に気付いた。レイサンがその事を告げようと口を開けたとき、ティナが満面の笑みで言った。

「そう！　もうレイちゃんが来て二週間は経つわ！　そろそろレイちゃんも外に出ても良いと思うの！」

レイサンはティナの言葉を聞いて即座に彼女の企みを察知する。

「もしかして、私を使って買い物したいだけ……？」

レイサンは我ながら呆れた顔をしていると思つていた。ティナは正解！　と声を弾ませていた。どうやらこちらの表情は気にならないようだ。

「最近外に出てなかったからさ。色々見たい物があるのよね」

女性達の外出は基本的に制限されている。ゼジムが付き添わなければいけないのだ。そのゼジムもここ二週間は仕事が忙しく、女性達と出かける暇がなかったのだ。そして、久しぶりの休みが今日である。

「それって結局ティナさんの我儘では？」

「何言ってるの!? 女は我儘な方が可愛いのよ? ゼジちゃんも言ってたわ」

何を言っても彼女は諦めないようだった。レイサンは内心、溜息をつく。外に出たい気持ちはあるが、まだ早いと思っているのだ。まだ、屋敷の中で知識を得たいと思っているし、男性とはゼジムとしか話をしていない。まだ男性には慣れていないのがレイサンが外にまだ出たいとは思えない理由であった。

「私は結構ですので、ティナさんだけで行ってくればいいのでは?」  
心の内を出す事なく、あっさりと言い放つ。ティナは顔を膨らませ、抗議の意を表した。

「良いじゃん。へるもんじゃないしさ!」

そつという問題なのだろうか、とレイサンは思ったが、ティナにそれを言ってもまた別の反論が来ると思い、口にはしなかった。

「じゃあ、準備しといてね。服は Rond さんに言えば良いから」

「えっ?」

ティナの突拍子のない言葉は再びレイサンの目を丸くさせた。

「えっ? じゃないわよ。外に出るのだから着替えなきゃ駄目ですよ」 レイサンは今自分の来ている白いワンピースを見てからティナに目を戻す。

「これじゃ駄目なんですか?」

ティナは呆れていた。彼女に呆れられる事がこれ程複雑だとは知らなかった。

「外には色々な人がいるのよ? ゼジちゃん以外の男もいるの。レイサンはそんな短いワンピースで外を出歩く気?」

言われて見ると確かに、レイサンが着ているワンピースは通常の物より丈が短い。なんでもゼジムの趣味だそうで、レイサンは気にすることなく着ていたのだが、言われてみれば外には男もいるのだ。ゼジムに見せる為に着ているわけでもなかったが、男にじろじろと見られるのも嫌だった。

「そうですね……」「でしょ、だから Rond さんの所に行つてね。」



私は急いでゼジちゃんに言ってくるから」

返事をするよりも早く、ティナは部屋を出ていった。

「急ぐ理由があるのでしょうか？」

レイサンも怪訝な表情を浮かべたまま、ロンドの部屋へ向かって行った。

「その格好は……？」

レイサンは目を丸くしていた。今日で何回目だろうと心の中で呟きながら。

「何が？」

ゼジムが怪訝そうにレイサンを見る。

「いや、あなたではなくて」

「私？」

そう言っただけを指さすティナ。レイサンが驚くのも無理はなかった。

僅か二週間程度の共同生活とは言え、ティナの好きな服装はわかっていたつもりだった。彼女は毎日の様に肌にぴったりとしている半袖のシャツと、太股も露わにする程の短いズボンを履いていたのだ。ティナ曰く、動きやすいからという理由だ。

確かに、レイサンの丈の短いワンピースを指摘したのだから、彼女も普段の服装で来るわけがないと思っていた。だが、せいぜい長袖、長ズボンに変えるくらいだろうと考えていたのだが、ティナの服装はレイサンの予想とは全く違っていた。

ティナはブラウスにスカートだった。ブラウスは白く、裾に付けられたフリル。スカートは、黒地に白い水玉模様が刺繍されている。耳には空色の結晶石のピアス、首元にも同じ色の結晶石のネックレスをしている。彼女は普段の活発でさわやかな女性から、清楚でおしとやかに見えるまでに変身したのだ。

対するレイサンは旅装束だ。ベージュのズボンに、同色の布の服

という地味な格好だ。さらに、顔を隠すために淡い桃色の襟巻きもさせられている。

ロンドが言うには

「その顔で綺麗な格好して外に出たら皆に見られて大変よ」

らしいので、地味で人に見られないような服装をお願いしたのだが、ティナと並ぶと自分ももう少し良い格好をすれば良かったかも、と若干後悔する。

「お前はそれで良いんだよ。見られたくないだろ？」

レイサンの気持ちを察したのか、ゼジムが優しく微笑む。ゼジムは生活感漂う白いシャツに黒のベストで、その上から真っ青なマントを羽織っている。羊毛で出来た黒のズボンはゆったりと作られていて、窮屈さとは無縁に見えた。額には繊細に作られたサークレットをかぶっており、ちょうど額の中心に赤い宝石が埋め込まれている。耳の上に当たる箇所からは白い鳥の羽が付けられており、ゼジムが貴族の身分である事を表していた。

「私は？ 私は!？」

ティナがゼジムに盛大に抱きつく。どうやら服装は変わっても中身までは変わらないようだ。

「ああ、ティナもとても似合ってるよ」

レイサンに言った時と同じ様に優しく微笑みながらティナの頭を撫でる。ティナは顔を桃色に染めて俯いてしまった。口元から「えへへっ」と照れ笑いがこぼれている。

（買い物に行きたいと言っていたけど、やっぱりゼジムさんとかかけられるのが嬉しいのかな）

レイサンはその様子を見て、ティナの本心が少し見えた気がした。「よし！ 出発だー！」

褒められて気分が高揚したのか、ティナは右手を突き上げ、外へ出て行ってしまった。ゼジムが、腕白な犬を持てあました様な表情で後続く。レイサンもゼジムのすぐ後ろについていく。

ティナではないが、気分は高まっていた。初めて見る外の世界で

ある。奴隷の時では考えられない。

しかし、レイサンの初外出は、彼女が一生後悔してしまう程の出来事になる。

？

ラルクルス大陸のミリタリア領土、ミリタリア城下町と言えば、大陸でも有数の大都市であり、活況を呈している。国王アグシューゼ・ミリタリアは、所謂平凡な国王である。しかし、異端者達へは厳しい法律を作った事で、民の信頼を得ることができた。異端者を殺したとしても罪にはならない。むしろ国が引き取ってくれて処分してくれるのだ。

これは、アグシューゼが異端者を病的に毛嫌いしているからであったが、思わぬ副産物として民の信を得るといふ思わぬ効果が出たのだ。身分の差別化、奴隷制度ができてから久しい。親から子へ語り継がれる異端者の言い伝えにより、誰も疑う事なく異端者を忌み嫌っている。子供のころから忌み嫌うべき存在として教えられた上に、都市に住む者達は叫び狂う異端者を見せられ、異端者という存在が恐ろしい存在だと植え付け、さらに嫌悪感を強固の物にしていたのだ。

これだけの教育をされれば、人間達が異端者を人間として扱わないのも無理が無い事だった。

そんな汚らしい存在である異端者への厳しい法律によって、国王アグシューゼはさらに支持される事になったのだ。

その様な理由もあり、ミリタリア城下町の人口はかつて見ない程に膨れ上がった。この街に入れば異端者から襲われない、きっと国王が守ってくれると考えたからだ。自分達は守られる存在であり、異端者は殺されるべき存在だと民達は確信しているのだ。

人口が増えたとなれば、商人達も群がる。とはいえ、城下町を囲っている壁を広げるには莫大な金が必要になるため、都市の拡大はまだしていない。

故に、家を買えなかった商人達は露天で商品売っている。場所を設ける事ができず、泣く泣く城下町を後にする商人たちの数も少

なくない。

こうしてミリタリア城下町は、民からすれば異端者の被害を受けない理想郷、商人達からすれば商いのメッカの様な都市となった。その様な経緯から、今日もミリタリア城下町は盛況だった。初めて見るその光景に、レイサンの気分は高まったままだ。

街の中心から少し外れた一本の通りには店がずらりと並んでいる。通称「陽光通り」と呼ばれるこの道は、その昔この辺りに家は無く、日差しを妨げる物が無いために一番日光が当たる場所とされたのがその名の由来だ。

しかし、今は二階建ての建物が、僅かな隙間すら惜しむ様にびつしりと立ち並んでいる為、以前の様な意味で呼ばれてはいない。

今現在は露天を含む、数えきれない程の店のおかげで夜になっても繁盛している事から、いつまで経っても静かな夜が来ない、一日中昼間の様に盛況だという意味となっている。

その陽光通りに来た時、レイサンは思わず驚きの声を上げた。

まず驚いたのは人の量だった。真つすぐ歩く事が不可能な程、人が入り乱れている。さらに、あちこちで蛮声が聞こえてくる。値切り交渉をしている者、店の商品を自慢している者、そのすべてが荒々しい声であり、喧騒に消されない様に必死で声を張り上げている。次に驚いたのは豊富な食べ物だ。少し歩けば、今まで嗅いだ事がない良い匂いが鼻をくすぐる。木の箱にぎつしりと入っている、赤いアリプという実からは甘酸っぱい匂いが食欲をそそり、別の店のこんがりと焼かれた肉の匂いには生唾を飲んだ。

装飾品や武具も色々置いてあった。どの店にでも置いてありそうな小剣から、どこぞの遺跡から掘り出された曰く付きの槍まで、この通りで揃わない物は無いと言っていたゼジム言葉通り、ここには豊富な商品があった。

中でもレイサンが注目したのは人そのものだった。今までに普通の人間は自分を高く売ろうとした奴隷商人だけだったが、ここには

数えきれないほどの人間がいるのだ。外見も様々で、背の高い者、低い者、痩身の物、ふくよかな者、髪の毛の長い者、薄い者、そのすべてが初めて見る光景だった。

そんな色々な人間を見て、レイサンは気付いた事があった。自分がある屋敷の異端者達は例外なく美貌の持ち主だったのだ。輝く様な肌も、見目麗しさも、通りを歩いている人間達と同じ種族なのかと疑ってしまう程だ。最も、中流貴族とほぼ同等の富を持っているゼジム達と、通りにいる平民達では生活水準が全く違う。毎日お風呂に入る事ができる貴族達の生活と違い、平民は3日に一回お風呂に入れば良い方で、一週間お風呂に入らない男もざらにいる。それを差し引いてもゼジム達の美貌は際立つのだが、少なくとも双方の身分の生活水準を知らないレイサンからしてみたら、ゼジム達がまるで絶世の美男美女だと錯覚してしまうのも無理は無かった。

「驚きました」

知らずに口に出してしまった。二人に聞こえなかったか、周囲に目を配ろうとした瞬間にゼジムと目が合う。その表情は困惑しており、レイサンの呟きが聞かれてしまったと言う事を示している。

「何に驚いたんだ？」

聞かれていたのなら仕方がない。所詮、自身が抱いた感想なので他人が聞いてもつまらない話だと思ったが、問われては言うしかない。はぐらかしたり嘘をついたりしたことが無いレイサンとしては当然の対応だった。

「いえ、他の方々を見て、ゼジムさんは思ったより恵まれた顔だったのかと気付いたので」

ゼジムがすぐさま反論した。見上げると、渋い顔をしているのがわかった。

「お前、そんな事は他の男を見なくてもわかるだろ」

「そうなんですか？」

レイサンは自分の容姿には勿論、人の容姿に評価を付けることはしない。美形だと思っても懂れないし、妬んだりもしない。彼女が

評価するのは心である。何度も会話して、相手の人となりを感じる事で評価するのだ。

だから、ゼジムの言葉は不思議としか思えなかった。

「いや、まあいい」

ゼジムは諦めた様な顔で溜息をつく。レイサンは気にするなという言葉を正直に受け取り、彼女はまた露天に興味を移した。視界の端に、呆然としたゼジムがたまに映るが無視していると、やがてレイサンに不満の言葉が浴びせられた。

「おいおい、こういう時は気にするもんだろ」

「でも、きにするなといわれましたので」

「げっ、真面目だな」

「私の事を不真面目だと思っていたのですか？」

「そう思っているわけではないが……」  
「ではどう思っているのか聞かせていただけますか？ 不真面目だと思われるのは困りますので」

会話を続けていく中でゼジムは少しずつ後ずさりしている。同じ距離の分、レイサンは前へ進み、追いかける。ゼジムの顔は次第に青ざめていったが、レイサンは気にすることなく詰め寄る。

「いや、だから」

「おい、二人とモー！」

ゼジムにとっては助け舟、レイサンにとっては邪魔となる、テナが二人の間に割る様に入ってくる。手には抱えきれない程の、露天で購入したと思われる装飾品や食べ物があった。どうやら二人が話をしている間、一人で露天や店を渡り歩いていたようだ。「あっちの方で、なにやら人が騒いでいるみたいなの。気にならない？」  
「おおっ、もしかして喧嘩か？ そりゃあ見にかないとな！」

ゼジムがこの話に乗じて話を膨らませる。レイサンはその間もゼジムを見詰めていたが、目が合う事はなかった。仕方なく視線を落とし、テナを見やる。彼女の目は輝いていた。レイサンは再度ゼジムに視線を向ける。

「ティナさんの様子がおかしいのですが……？」

「ティナはお祭り好きなんだ」

今度は目が合った。表情も元に戻っている。ゼジムの顔は、今更先程の話をすることはできないだろうと言っている様で、若干気分を害したが、その通りだったので今の疑問を優先させる。

「お祭り……ですか？」

「そう！ 男達が自らのプライドを賭けての殴り合い。血湧き肉躍るわ！」

ティナは清楚な格好にそぐわない握りこぶしを高々と上げ、よくわからないことを力強く口走っている。気分の温度差が感じられた。一瞬の判断でこの女性に説明を求めても期待できないと考え、レイサンはゼジムに説明を求める事にした。

「殴り合いと言っていますが？」

「いいから行くよ！ ほらほら！」

しかし、興奮したティナはレイサンの腕を掴み、走り出してしまった。横を見ると、ゼジムもティナに掴まれているのが見えた。

「後で話してくださいね。私の事を本当に不真面目だと思っているのか」

人ごみをかき分けて進んで行く中、レイサンはどうしても気になっていた事をゼジムに告げる。ティナの興奮度はとても高い様で、人にぶつかろうがひたすらと真つすぐ進んでいた。

「だから、不真面目だなんて思っていないって」

困った顔をして弁解するゼジムだったが、前方の様子を気にしたと思ったら、ティナの腕を引っ張り、強引に足を止めさせた。

「わっ、ゼジちゃんどうしたの？ もうすぐ目の前なのに」

ティナが膨れた顔をして振り返る。レイサンもゼジムの行動の意味がわからなかった。

「これは喧嘩じゃない」

ゼジムの顔は険しくなっていた。ただならぬ予感を感じ、レイサンの身に緊張が走る。前方に目を向けると、群衆が輪を作る様に集



まっている。集まっている人間達は口を揃えて大声を上げている。

レイサンはその声に耳を傾け、絶句した。

「殺せー！」

「異端者が覚醒したぞ！ 殺すんだ！」

「異端者は皆殺しだ！」

輪を作る人間達は身が震えそうな程の殺気をたぎらせ、絶叫している。自分に浴びせられている罵声ではないとわかっていても、レイサンの恐怖を十分な程にかりたてる。

右手を胸に当て、体が震えそうになるのを堪えていると、逆の手が不意に掴まれた。驚いて、掴んだ手の主を見ると、そこには優しく微笑んだティナがいた。

「大丈夫。ゼジちゃんがいるから」

その表情にふさわしい優しい声音。ティナの暖かい心に触れて、徐々に恐怖心が和らいでいく。

「何が起きているんですか？」

言葉をまともに出す事ができるまで落ち着く事ができたレイサンは、ティナに現状の説明を求めた。

「ゼジちゃんが今聞いているよ」

ティナは微笑んだまま頷いた。彼に任せるのが最善だといわんばかりに。レイサンもそれが最善と考え、周りで聞き込みをしているゼジムの帰りを待つ事にした。

？

ゼジムはこの事態をどうするか迷っていた。異端者である自分がこの場に出て収める事ができるのかと。本来ならば、ティナとレイサンの二人の身を案じ、帰る事を選んでいるだろう。だが、聞き込みをしている内に憤りが生まれた。

発端は、ミリタリア国文官であるフォッサと言う貴族が連れていた女性の奴隷が苦しみながら蹲った事の様だった。フォッサと言えば、以前はうだつのあがない弱小貴族だったのに、度重なる進言が良い政策と判断され、今やミリタリア王アグシューゼから信頼厚い忠臣となっている、所謂成り上がり貴族だ。

国王から多大なる信を得られていると言う事は、王アグシューゼに気にいられる絶対条件である、異端者を殲滅する思想に是認しているはずである。

無論、奴隷を従えている事が国王の逆鱗に触れるわけではない。己の欲を満たすためにアグシューゼですら奴隷を使う事すらある。アグシューゼの場合はその日に奴隷を殺してしまうのだが、他の貴族達も例外なく、いずれは奴隷を殺す。フォッサも恐らく同じであろう。

では、何が問題なのか。フォッサと言う貴族が奴隷を連れて街中を歩いている事が問題なのだ。もし、街中で奴隷を見つけたのなら、その場で兵士に預ければ事足りる。しかし、フォッサは違う。彼は初めから奴隷と一緒に居たと言うのだ。それが何を意味しているかはゼジムにはわからなかったが、その奴隷がフォッサにとって、特別な存在であることは分かった。

ゼジムは、フォッサが奴隷に自分が本来するはずである仕事をやらせていたのだろうと考えた。彼女の才に気付き、試みに政治について教えると、自分より良い政策や案を出したのだろう。

思い出してみると、フォッサの出世はまるで飛び上がる様だった。

それもこれもすべてはたまたま買った奴隷のおかげなのだろう。奴隷を自身の出世に利用しているフォッサは、今の世の中では屑の様な男に値する。しかし、ゼジムが憤りを感じたのはこの事ではなかった。所詮推測である。

ゼジムの怒りを生みだしたのは、次の出来事だった。蹲って苦しんでいた奴隷を見た民の誰かが「異端者が覚醒するぞ」と言ったらしいのだ。

異端者の能力の覚醒は本人ですら知らない内に起きる。ゼジムも屋敷の女性達も気づかぬ内に覚醒しており、何か行動を起こすことなどないのだ。

だが、この国の民達は異端者達は覚醒する際に何か動きがあると思っているのだ。

例外なくフォッサもそう感じた様で、なんとその場から逃げ出してしまったのだ。

ゼジムは、奴隷とはいえ、己の意で従えていた者を見捨てる行為に憤慨していた。主人ならば、責任を持たねばならぬのだ。人間であれ異端者であれ、従えていたのなら当然である。これが例えば国王がフォッサ達貴族を見捨てた場合、彼らはどうするだろうか。勿論、国王を糾弾し、暴動を起こすだろう。相手が少数だろうが、多数だろうが、そういう事を平気でやるなんて思われれば、沽券を落としかねない。

上に立つ者は責任を持ち、下の者から慕われねばならないと考えているゼジムにしてみたら、フォッサのとった行動は馬鹿極まりない愚行にしか思えないのだ。

とはいえ、そう簡単に奴隷を救済できない。民達の殺気は最高潮に達している様に見える。異端者であるゼジムが収めようとしても収めるどころか、火に油を注ぐ行為になりかねない。

かと言って、人間達の奴隷を殺さない選択肢を選べる者もいるはずがない。異端者への憎悪もあるが、国王から背信者の汚名を着せられたくないと思う者しかいないのだ。己の命を犠牲にしてまで奴

隷を助けようとする人間などこの世界にはいない。

ゼジムも自身の命、身分を捨ててまで奴隷を助けたいとは思わない。が、決して覚醒したから苦しんでいるわけではない奴隷の女性を見て何も感じないわけではない。

しかし、ゼジムの中では奴隷の女性を助ける事より、屋敷の女性達を守る事、自分を守る事の方が大事なのだ。

苦悩の結果、ゼジムは状況を見極める事にした。自分に害が及ばなくて、なおかつ奴隷の女性を助ける事ができるその時があるかもしれない。

今の自分の立場を考えると、起こるかわからない奇跡に頼るしかない。

「戻るか」

騒動の原因もわかり、己の中でも不本意ではあるが結論が出たので、ゼジムは戻る事にした。

レイサンは完全に落ち着きを取り戻したようで、張り詰めていた表情が幾分和らいでいる気がした。

それでも、騒動の收拾がついていない現状に不安がある様で、胸に手を当てたままである。

「待たせたな」

優しく声をかけたつもりだったが、状況が状況だからか、二人してびくりとした。

「ゼジちゃん……」

ゼジムの顔を見てほっと息をつくティナ。その目には若干涙が溜っていた。レイサンより年上であり、外の世界に関しての先輩でもあるティナはゼジムがいない間、心細くなりながらも気を張り詰めていたのだろう。レイサンを安心させようと、自分も怖いのにそれを見せずに励ますティナの姿が目に見えた。

ゼジムは優しくティナの頭を撫でた。ティナは静かに目を瞑り、

ゼジムに身を委ねた。

「それで、ゼジムさん。何が起きているのですか？」

恐怖心より勝る想いがあるのか、強張った表情のレイサンが普段と変わらない様子でゼジムに問う。ティナとは違い、変わった様子は無いがレイサンもまた、ゼジムの姿を見て安心できた部分があるのだろう。

ゼジムは二人を引き寄せ、周りに聞かれない様に注意しながら集めた情報を話した。ティナもレイサンも、話を聞き終わった後もしばらく言葉が出ない。

「酷過ぎる……」　しばらくして、レイサンが絞る様に声を出した。肩が震えているのは恐怖のせいではないだろう。

「なんとかならないんですか？」

気持ちを抑えきれず、悲愴な面持ちのレイサン。自分では何もしてやれないゼジムも、辛い気持ちを隠せずにレイサンに返す。

「説明した通り、俺が出るわけにもいかない問題なんだ」

ゼジムは群衆の女性の奴隷への仕打ち、レイサンの悲痛な想いに胸を痛めながらも、早くこの場から離れなければと考えていた。

このまま群衆達の奴隷への憎悪が膨れていけば、いずれゼジムにも矛先が向けられかねない。一人でいるならばなんとかなるが、ティナとレイサンがいる現状で、うまく逃げ切れる自信がないのだ。

「俺達も危ないかもしれない。残念だが、屋敷にもどるぞ」

レイサンは納得がいかない顔をしていたが、彼女の心の葛藤の決着が着くまで待ってもいられない。ティナとレイサンの背中を押し、この場を離れる様に促す。

ティナは逆らわずに押されるままに足を出していたが、レイサンはゼジムの言葉に異をとねえるかの様に、足を動かそうとはしなかった。

「レイサン」

「待ってください」

レイサンは目を瞑り、自分に言い聞かせる様に一度頷くと、ゼジ

ムを真つすぐと見据えた。

「私が助けます」

ゼジムは喫驚して、レイサンをまじまじと見つめた。レイサンの目からは決意がありありと見て取れた。気持ちはわかる。だが、同意する事はできない。

「駄目だ」

「何故ですか？」

ゼジムが間髪をいれずに拒否した事で、レイサンの目が若干鋭くなる。

「お前が助けに入ろうと、群衆に邪魔されてあの女性の下に行く事はできない。万が一行けたとして、万が一彼女を逃がす事ができたとしても、代わりにお前が捕まるだけだ」

ゼジムは容赦なく事実を言い放ち、現実をレイサンに突き付けた。レイサンを想つてこそその発言だ。

「そうだとしても、私は見て見ぬふりはできません」

しかし、レイサンにその想いは伝わらず 伝わってはいても納得せずに、己の覚悟をゼジムに言い放つ。ゼジムは困惑した。ここまで頑固だとは思っていなかったのだ。頭が良いレイサンの事だから、言えば分ってくれると思っていた。奴隷を助けたいという想いも、自分では助けられないとわかれれば、苦渋の決断をしてくれると思っていた。

しかし、レイサンは一向に折れない。彼女の心には一本の大きな芯が通っている事はゼジムも感じてはいたが、その芯がレイサン自身を危険に巻き込む事でもブレないとは思っていなかった。

「レイサン……」

ティナもレイサンの並々ならぬ決意を感じ取り、レイサンに声をかける。しかし、レイサンはティナを見ずに、彼女の心の芯の様にゼジムを見つめ続けていた。

「無駄死にしたいのか？ 普通の人間の様に暮らしたいという夢を捨ててまで彼女を助けるのか？」

ゼジムはなんとかしてレイサンに諦めさせようと、心の芯に直接訴えかけた。彼女の夢は、奴隷施設に居た頃から伸びていた芯である。そこを揺さぶれば、彼女も気づいてくれるかもしれない。

今自分がしようとしている事が、今までの我慢がすべて無に帰す行為だと言ふ事に。

「それでも、私は助けに行きたいと思います。普通の人間の様に暮らしたいという夢も、彼女を助けたいという想いも、私が決めた事です」

命を賭けなければこなせない事をやろうと口にはしているのに、一瞬だけレイサンは笑顔を見せた。その笑顔が、これ以上言葉を交わしてもレイサンの想いを曲げる事はできない事を表しているとゼジムは理解した。彼女を説得できない自分の不甲斐無さと、言葉に耳を貸さないレイサンへの苛立ちがゼジムの胸に渦巻く。

中でも苛立ちとは、ここから早く退避したい想いもある事から凄まじい早さで増幅しており、少しでも気を緩めると、叫びたい衝動に駆られる。

それでも、ゼジムはレイサンを説得しなければならない。もし、説得を断念したら、レイサンは確実に命を落としてしまうのだから。ゼジムは今の状況を打開させる方法を思い付いてはいる。しかし、それはゼジム自身だけではなく、レイサンやティナ、屋敷の女性達にまで危害を及ぼしてしまう。

例え、レイサンとティナに話して了承を得たとしても、それが屋敷の女性達の総意であるわけもなく、お前は足枷を付け過ぎた

ふと、シェイビーに言われた事を思い出す。これも足枷によるものなのだろうか、と考える。

例えば、自分にはレイサンとティナしか愛する女性がおらず、彼女達の了承を得た場合、ゼジムは喜んで奴隷の女性を助けるだろう。自分の本心もレイサンと同じなのだから。

しかし、屋敷にいる女性達に何の断りもなく行動する事ができな

いから、この迷路に入り込んでいると言っても過言ではない。

「ゼジちゃん。私達の事を気にするなとは言わないけど、ゼジちゃんが選んだのなら、きっとロンドちゃん達も納得してくれると思うよ」

今まで二人のやり取りを見守る様に見ていたティナが静かに言う。

「お前もか」

ゼジムは苦笑するしかなかった。ティナも、レイサンと同意見のようである。

ゼジムは大きく深呼吸をした。そして、女性の奴隷に目を向ける。兵士達に、槍の柄で何度も叩きつけられているのが確認できる。余所行きの服はボロボロになっており、頭から血が流れているのもわかった。

今になって初めて女性の奴隷を見据えたのには理由があった。レイサンがゼジムの言葉に納得してくれていたら、見る事なくこの場を離れるつもりだった。この光景をまともに見てしまつたら、いくら足枷が付いているゼジムでも、自分を抑えきれかわからなかったのだ。

そして、今、しっかりと見た。それはゼジムの中で答えが出たと言う事であった。

「わかった。俺が行く。お前達は隠れている」

ゼジムの言葉に、レイサンは驚き、ティナは優しく微笑んだ。

「えっ、しかし」

「馬鹿野郎。俺とお前は恋人だ。恋人を危険にさらして俺だけ逃げるわけにはいかない」

「まだ恋人ではありませんが」

こんなときでもレイサンの冷静さは健在だった。ゼジムは苦笑しながらレイサンの頭を強めに撫でる。

「可愛くねえやつだ。良いから黙って見てな」 自分が何を仕出かそうとしているのかは重々承知していた。屋敷も、仕事も無くなるのだ。愛する女性達を危険にさらす可能性だってある。



それを回避するには、国外へ逃亡するしか手は残されていないかもしれないのだ。いや、異端者による暴動ととられ、他の国でも狙われるかもしれない。

しかし、ゼジムは何故かすつきりとしていた。想像はついた。自分の身分や、異端者である事が、生きる事で我慢を強いられてきたのは言うまでもない。

今回の決断はそれらのしがらみを無視したものであるからだ。

この行動が正しいのかは分からなかったが、この決断がシェイビイの問題に対しても何かヒントになるのではないかと予感していた。「行ってくる」

二人にそう言い残し、奴隷の少女を救出するべく足を一歩踏み出したその時

ゼジムの体に戦慄が走る。

身を切り裂く様な殺気、心までも凍りつきそうな恐怖、互いが協力しあい、倍加させたような強烈な重圧がゼジムを襲う。

剣術にも、能力にも秀でているゼジムをも竦ませる圧力は、他の者も容赦なく襲っている。振り返ると、耐えきれずに腰を降ろしているティナとレイサンの姿が映った。

「なんだこれは……」

この圧力の出所を探そうと周囲を目を配る。

驚くほど簡単に見つかった。いや、隠そうとしていないのだ。

禍々しい殺気を身に纏った、他より頭一つ抜き出て体格に恵まれた男の姿がそこにあった。

？  
（後書き）

2010/06/15

誤字修正&追加修正

？

見た目は他の者より大柄で、肌は浅黒く、鉾山や工事等の職に就いているように思える。年齢も20に近いぐらいの若者だ。

どこにでもいそうな田舎の男、と言う印象を受けたが、あの男からこの重圧が放たれている事は間違いなかった。

「あんなやつに……」

何よりも、自分よりも年の若い男に圧倒されているのが腹立たしかった。重圧に逆らう様にさらに足を一歩進めると、圧力がさらに増した。

これ以上は足にくる。体が反射的にそう感じ、全身に力を込めると、幾分重圧が小さくなった気がした。

「まさか……」

ゼジムの頭にある予測が浮かび、それを実践する為により体に力を込め、今度は気を放出させる。術者しか見えないと言われている霧がゼジムの体を覆うと、ゼジムの予想通り、<sup>オーラ</sup>気で軽減された。今だに重圧はあるが、体に不自由を与える程の物ではなくなっていた。すぐさま、ゼジムはレイサンとティナの下に駆けよる。そして、

誰にも聞こえない様に小さな声で二人の耳元で囁く。

<sup>オーラ</sup>「気を出せ」

重圧に苦痛の表情を浮かべていた二人は、何も言わずにゼジムの言葉に従う。

ティナからはしっかりとした<sup>オーラ</sup>気、レイサンからは若干頼りないと感じる<sup>オーラ</sup>気が二人の体を覆い始める。

「ゼジちゃん……これは？」

「わからない。が、能力である事は確かなようだ」

ゼジムもあの男の能力の正体はわかっていなかった。今までに見た事がない能力なのだ。

「あの……」

遠慮がちにレイサンが話に割ってくる。彼女を見ると、先程までよりは和らいでいるものの、今だに苦しそうな表情だ。

「やはりまだ厳しいか……」

レイサンの力ではまだこの重圧を軽減できる程の力がないのだ。

「確か、私が見た書物の中に……これに似た能力の使い手の……話がありました」

レイサンは何度も体に入力直し、必死に言葉を紡ぐ。相当の重圧を受けているようだった。

「レイサン、もう話すのはよせ」

「大丈夫です……確か豪気師だったかと……」

「豪気師？」

聞きなれない言葉ではあったが、その書物を呼んだ事があるゼジムも微かに聞き覚えがあった。

人間達と違い、異端者と呼ばれる者達は自分達の能力について、研究をしていた。

その成果が記されていた書物をシェイビーがどこからか入手し、複製された一冊をもらったのだが、正直自分の能力の事にしか興味が無かった。だから、豪気師の項も全く見ていない。

「己から放たれる豪気を拳や足に留め、格闘によって相手を攻撃するようです。さらに、彼らは普通有能力者と違い、幾つもの能力を持っています」

話す事に力を入れ過ぎたのか、レイサンの息は上がっていた。

「わかった。もういい。ありがとな」 彼女から得られる情報は喉から手が出る程欲しかったが、ゼジムはレイサンがもう限界だろうと感じていた。これ以上話を聞いているよりも、重圧の元凶を排除した方が良いと判断する。

「周りの人間を見ればわかる通り、能力者しかこの状況では動けないようだ。お前達も動くなよ」

人間達は気で軽減できずに重圧をまともに食らっている。中には気を失っている者や、泡を吹いている者までいる。

異端者をさんざん痛めつけていた者達も苦悶の表情を浮かべているのを見て、いい気味だと内心ほくそ笑むが、この事態を放っておくわけにもいかない。

いくら異端者と言っても、これ程まで周囲に害を与える者は排除しなければならぬだろう。ゼジムが男に目を向けると、男はゆっくりと奴隷の女性に近づいていた。

憶測でしかないが、あの男は奴隷への仕打ちに大して激怒したのだろう。ゼジムとしても彼の正義感に共感できるのだが、いかにせん被害が多すぎた。

恨みはないが、やるしかない。命まで取る気はなかった。うまい事逃がす事ができればそれが一番いいのだが、そんな考えがすぐに思いつくわけがない事は、先の奴隷の件で痛感している。

だから、今はひとまずあの男の気を失わせる事に集中する。

「はっ！」 気合の声と共に男に向かって走り出す。足音に気付いたのか、一瞬男がゼジムに目を向けた。とは言っても、焦点は合って無く、顔がゼジムの方に向いているに過ぎない。

「悪く思ふなよ」

レイサンから聞く事ができた話は豪気師のすべてではない。幾つもの能力を持っているとは聞いたものの、能力の詳細は聞けていないのだ。

だから、ゼジムは先制攻撃を選択した。

手のひらに気を溜め、人間には不可視である拳大の玉を生みだし、振りかぶって男に投げつける。

石破師の能力である気の玉は唸りを上げて男に襲いかかる。狙いに寸分違わず、男の頭に直撃する。これで男は派手に吹っ飛び、気を失う予定だった。

しかし、男は首をかしげる程にしか衝撃を受けていない。

「馬鹿な！」

ゼジムは手加減をしていない。大柄であり能力者である男に手加減は無用だと考えたからだ。しかし、その渾身の気が、まるで効い

ていない。思わず驚きの声が出てしまうのも無理は無かった。

さらに最悪な事に、今の攻撃で、男の狙いがこちらに切り替わった。先程は顔だけ向けていたが、今回は体ごとこちらに向き直り、ゆっくりと近づいてくる。

「クソがつ！」

ひたすらに気の玉を繰り出し、男に向かって放つが、当たる度に一瞬硬直をするものの、歩みを止めるまでにはいかなかった。

ゼジムと男の距離が、最初の頃の半分程になる。重圧がさらに増し、ゼジムはそれを軽減する為にさらに気を放出させる。これでは、攻撃に使う事ができる気が益々少なくなってしまう。

近づけば近づく程不利になる相手は初めてだった。だからと言って、後退もできない。レイサンとティナからは離れているが、後退して距離を作って攻撃に費やせる気が多くなったからと言って、男の歩みを止められるとは限らない。

さらに、ゼジムの能力は標的に近い程効果を増す。離れれば離れる程、徐々にではあるが、衝撃は弱くなる。

後退せずに限られた気で戦うか、後退して威力が減少した玉を出すかの違いであり、結果として男に与えられるダメージの増減の違いは無い。

つまり、八方ふさがりだった。

「さて、どうしたものかな……」

この場には勿論、ミリタリア国を探してもゼジム以上の能力者など探しても見つからないだろう。そのゼジムをもつてしても、傷一つ付けられないのだ。

この男を放っておけば、ミリタリア国が一夜にして潰れる可能性だつてある。それほど、この男の能力は恐ろしいものなのだ。

せめて、近づいても全力で攻撃できれば男の意識を奪う事ができたかもしれないが、不可能である。放出している気を消してあの男の目の前にいれば、いかにゼジムとも気を失ってしまうだろう。

「逃げるわけにもいかなえしなあ……」

振り返り、レイサンとティナを見る。先程よりも男が近づいているため、ティナですら苦しそうにしている。レイサンにいたっては、普通の人間達のように、苦悶の表情を浮かべていた。

ゼジムは決心し、男に向き直る。勝てなくても良い。能力者の能力は無限ではない。消耗させることで気の枯渇させることができればいいのだ。

「行くぞ！」

ゼジムは<sup>オーラ</sup>気を全力で放出し、体に重圧を全く感じなくさせる。男の動きは非常に緩慢だ。攻撃を避け、相手の消耗を狙うには、自分が素早く動けないといけない。男の豪気がいつ瞬間的にでも膨れ上がるかはゼジムにはわからない。大事をとって、重圧以上の<sup>オーラ</sup>気を放出させているのだ。

ゼジムは男の元に駆け寄り、素早い動きで男をかく乱させる。案の定、男は煩わしそうにゼジムの攻撃するが、当たる事はない。これが続けて行けば、ゼジムの狙い通りになる。そんな考えが脳裏によぎった時だった。

男はさらに豪気を放出したのだ。近くにいた村人達が絶叫を上げてその場に倒れる。全力で<sup>オーラ</sup>気を放出しているゼジムですら一瞬硬直してしまう程だった。

その一瞬の硬直が命取りだった。僅かな隙を見逃さずに男の剛腕がゼジムの腕を捉える。

ゼジムは両腕を交差させ、男の拳を受け止めたが、衝撃をその場で消す事ができずに派手に吹っ飛んでしまう。うまく体を回転させて着地に成功するものの、着地した足にとてつもない衝撃が走る。

骨が折れてしまうのではないかと思う程の痛みがゼジムの襲うが、それを顔に出す事はできない。今だに敵は健在なのだ。

「化け物かよ」

絶望を呟きながら、男を見る。男に変わりはない、豪気は止めどなく流れていた。もしかしたら、男の<sup>オーラ</sup>気は無限大なのかもしれない。痛みと、<sup>オーラ</sup>気の消耗で視界すらぼやけていく。限界が近いようだっ

た。それでも、諦めるわけにはいかない。頭を振り、気を引き締めるが、視界はぼやけたままだった。戦うどころではない。

しかし、ゼジムは男がいるであろう場所を睨む。まだ負けていないという意味表示の為に。

それが功を奏したのか、男の後ろの景色に動きがある事に気が付いた。

必死に目を凝らすと、段々はつきりとしていく。後ろの景色が動いていたのは二人の女性だった。

旋風の如く走る一人の女性が、勢いよく飛び上がる。体を回転させ、強烈な蹴りを男の後頭部に喰らわせる。

（そんなんじゃない無理だ）

ゼジムの気の玉ですら、効果が無かったのだ。女性の蹴りなど、虫に刺された程度にすらならないだろう。

しかし、ゼジムの思いとは裏腹に、男は糸を切られた操り人形のように力無く倒れた。

「嘘だろ？」

男は一向に動こうとはしない。辺りに充滿していた豪気もなくなり、息苦しさもない。男は気を失ったのだ。にわかには信じられない出来事に、ゼジムは思わず口を開けたまま呆然としていた。

男を倒した女性は、片足で男と踏みつけ、今だに走っている女性を呼んでいる。その声には聞き覚えがあった。目をこすり、男を踏みつけている女性を見る。

「エンクレス……？」

ゼジムは信じられない様子で呟いた。その声が聞こえたのか、女性がゼジムに振り返る。とても綺麗な顔立ちだった。光り輝く金色の糸の様な髪の毛が女性に合わせて動く。

忘れようがなかった。出会った女性の中で一番美しかったのだから。二年程前を境に縁がなかったが、その美貌は健在どころか、さらに磨かれていた。彼女を目の前にしたら、王女ですら顔を隠したくなるであろう。



そんな絶世の美女と称しても異論がないであろう美女の顔が、ゼジムを見た瞬間に歪んだ。

「げっ！」

美女とは思えない程の下品な声をあげる。昔と変わらず、口が悪いままのようだった。

「ミア、急げ！ 早くこいつを！」

ミアと呼ばれた女性は男の下に着くやいなや、軽々と男を持ちあげ、肩に担ぎこむ。最も、大柄な男とは対照的にミアと呼ばれた女性是小柄で、男の頭と足は地についている。

二人の女性の様子を見て、この男が二人の仲間である事は明白だ。二人の女性は頷き合うと、途端に走り出してしまふ。ミアは大の男を担いでいるとは思えない程の軽快さで走っている。

「身体強化系の術者か？」

己や他人の身体能力を向上させることができる能力者がいると聞いた事がある。とても珍しい能力で、ゼジムが目にしたのも初めてである。

エンクレス達が颯爽と、路地の方に消えていき、呆然としていたゼジムも我に変える。

「追わなければ」

賊の仲間という理由もあるが、それよりエンクレスと話したいというりゆうの方が大きかった。

豪気もなくなり、非常に体も楽になった。気の使い過ぎで、<sup>オーラ</sup>反動である性欲が沸きあがってきているが、まだなんとか我慢できる。

自身の体の状態を確認できたと同時に駆けだす。先程までの重圧を感じていた体とは思えない程、軽やかだった。

「まさか、こんな所で会えるとはな」

初恋の女性でもあるエンクレスに出会えた事で興奮していたゼジムは気が付かなかった。ゼジムだけではなく、重圧の解放により、ほっと一息ついているレイサンやティナ、人間達も気が付いていなかった。

事の発端である奴隷の女性が、その場から消えている事に。

？

もう日は陰っていた。徐々に月が姿を現すだろう。広場ならばまだ影響はないだろうが、元々日の光が入りにくい路地ともなると、肉眼でははつきりとは相手の姿が見えない。

それでも、ゼジムは速度を緩める事なく走り続けていた。ゼジムにはわかっているのだ。

この街に住み始めて長い。この道がどこに繋がっていて、どの道が行き止まりか、はては近所の子供達が悪ふざけで壊してしまった壁の場所まで把握している。

ゼジムがエンクレスの姿を確認しなくても迷いなく走れる理由は、この道は一本道で行き止まりだからなのだ。

「エンクレス……！」

後少しで壁にぶつかる。初恋の女性、会えなくなっってから諦めがつかなかったのだから、喜びもひとしおである。

ゼジムは、先程の男の存在どころか、エンクレスが男の仲間である事すら頭の中から消えていた。

ゼジムの頭には只一つ、エンクレスの事だけである。

しばらく走ると、壁が見えてきた。壁の手前に二つの人影。一つは大きく、一つは小さい。

「エンクレス！」

ゼジムは歓喜の叫びを上げる。その声に、小さい人影がゆっくりと近づいてくる。エンクレスだ。

「覚えてるか？ 俺だ、ゼジムだ！」

エンクレスの姿を確認出来た事で、さらに心がはずんだ。

「覚えてるよ！ たくつ、なんでここにお前がいるんだよ」

対するエンクレスは嫌そうな表情を浮かべていた。その美貌から想像できない悪態をついている。

「知らなかったか？ 俺はこの国に仕えている石破師なんだよ」

エンクレスの悪態を気にせず、嬉々としてゼジムは言った。エンクレスが深い溜息を吐いていたが、構わず話を続ける。

「いやー、これは運命だな！ 俺とお前はやっぱ一緒になる運命なんだな」

有頂天とはまさにこの事だった。ゼジムは満面の笑みを浮かべてエンクレスに駆け寄る。

「来るんじゃない！」

しかし、エンクレスは近づくゼジムに威嚇するように短剣をゼジムの足元へ投げた。ゼジムは慌てて止まる。あと少し止まるのが遅かったら足に風穴が空いていたかもしれない。

そんな危険な目に遭ったというのに、ゼジムの表情は変わらない。「おいおい、危ねえじゃねえか」

今では伝説の魔物とされているサキュバスに魅了されたのではないかと言う程、ゼジムは骨抜きになっていた。

「近づくな！」

ゼジムとは明らかに温度差があるエンクレスは、ゼジムに悪態をつきながら、後ろを気にしていた。

ゼジムはエンクレスに釘付けだったので、その視線の僅かな動きや、焦りを感じる事ができた。

「何を気にしているんだ？」

「ちっ！」

ゼジムの問いに大きな舌打ちをしたエンクレスが突如、右手を振り下ろし、左手を上げた。ゼジムはその行動が何を示しているのかわからなかったが、足元にあった短剣が引っ張られるようにエンクレスの下に戻っていくのを見て、直感が働いた。

気付いたと同時に後ろに飛ぶと、ゼジムが居た場所に4本の短剣が突き刺さる。上空から落ちてきたように見えた。

ゼジムは4本の短剣を見て我が目を疑った。刀身が結晶石でできているその短剣は、確実にゼジムの狙っていたのだ。

「エンクレス！ 危ないじゃないか！」

さすがのゼジムも、自分がエンクレスに攻撃されている事に気づく。彼女に大して敵意を持つ事は無いが、突然の攻撃に驚きを隠せない。

「うるせえっ！ 帰れ！」

ゼジムの問いなど聞こえないといわんばかりに、エンクレスはゼジムに命令口調で怒鳴った。そして、今度は右手だけを上げ、地面に突き刺さった四つの短剣を手元に戻す。

ここでゼジムはようやくエンクレスの能力に気付く。

彼女が能力者である事は以前あった出来事で知っていたが、その能力までは聞いていなかった。

少しでも能力に関して知識があれば、彼女の手の周りに浮いている短剣を見れば気づくだろう。

彼女は傀儡師だ。しかも、最近能力に気付いたレイサンとは違い、修行を重ねた熟練者である。

傀儡師は、己の気を系の様に細くし、その系を対象に巻き（もしくはくつつけて）操る事ができる。傀儡師であれば、己の手で触らずとも物を動かす事ができるのだ。

それでも、傀儡師の能力が戦闘に役に立つのは3つ以上の物を同時に動かす事ができてからになる。二つの物を動かすのであれば、両手で事足りるからだ。

それに、重量のある物や、意志のある、例えば人間の動きを操ろうとするには膨大な気を消費しなければならず、なおかつ気の質も上げなければならない。

エンクレスは相当な術者と見えるが、それでも彼女が使用している武器は短剣である。大剣も操る事ができるのだろうが、彼女はあえて短剣にして、素早く小回りが利く攻撃を重視しているのだろう。さらに、短剣は結晶石と言われる、人間の精神に影響があるといわれている物だ。結晶石は傀儡師の気を抵抗無く受け入れ、操りやすいといわれている。

以上の事を踏まえると、エンクレスが相当な腕前を持っている事がわかった。

先程の戦闘で消耗しているゼジムでは分が悪い程だ。

「傀儡師とは……すごいじゃないか！」

しかし、ゼジムはそんな事より、エンクレスの腕前に惚れ直している所だった。彼女に攻撃されている事なんて少しも気にしていないようである。

エンクレスはそんなゼジムを見て、再度溜息をつく。

「クレス、できた」

その時、エンクレスの後ろから小さい声が上がった。その声は、女性のもので、小さいのにやけにはつきりと聞こえた。可愛い声なのに、無愛想なのが気になった。

「よし、行くぞ！」

エンクレスは待つてましたと言わんばかりに、その声が聞こえた途端ゼジムに背を向けて、壁側に走っていった。

自分が完全に無視されている事で、呆然としていたが、壁に近い地面が輝いている事に気付き、彼女達が何を待っていたのかわかった。

彼女達はこの場から消えようとしていたのだ。エンクレスがゼジムと戦っている内に、もう一人の女性が水操師に合図をして、術が発動していたら逃げる算段だったのだ。

「エンクレス！」

追いかけても、もう遅かった。彼女達は水に吸い込まれる様に姿を消し、水たまりの輝きもすぐ消えてしまった。ゼジムの叫びが空しく響いただけだった。

「くそっ……なんで逃げるんだ……」

折角話をしたかったのに、と呟いてから思い出す。

「そういえば、あの男の仲間みたいだもんな」

それならば、エンクレスが逃げてしまったのも納得がいった。自分の事を嫌っているとは微塵も思っていないゼジムだった。

「そうとわかれば……あっ！」

運命的な再会に思わずエンクレスを追ってしまったが、あの奴隷はまだ助けていない。重圧を起こしていた主がいなくなった今、人間達も動けるようになっていいるだろう。

ゼジムは自分の行動が愚かだった事に気付いた。奴隷は勿論、テナとレイサンを野獣の住み家に置いてきたようなものだ。

「やばいな」

言葉よりも早く、ゼジムは走り出した。じっとしている時間が惜しかった。もしも、テナやレイサンまで異端者だという事がみつかってしまっていたらと思うと、焦燥を隠せない。

ゼジムは力の限り走った。元の場所に戻る頃には顔から汗が滴り落ちていた程だった。

？

途中で死を覚悟する程の重圧に襲われて、邪魔が入ったとはいえ、奴隷の裁きが終了したわけではない。

むしろ、異端者と思われる者の乱入があり、余計に奴隷への恨みが酷くなるかもしれない。

そう覚悟して元の場所に戻ったゼジムだったが、覚悟が甘かったようだ。

大地を揺るがさんとはかりの大怒号。死の恐怖を与えた男に怒りが心頭しているようだ。

男がいなくなった事で、重圧の脅威は無くなったが、男のせいでさらに状況は悪化している。

「ゼジム様っ！」

一人の兵士がゼジムに気付き、恭しく礼をする。それに軽く手を上げて応える。

「どうなっている？」

「はい、先程の男のせいでさらに民達の異端者への憎悪が増してしまっています。さらに……」

「どうした？」

兵士が言いにくそうにしている事に気付き、ゼジムは先を促した。  
「その……奴隷に逃げられまして……それで民達が」

「さらに目の色を変えたわけか」

兵士の言葉尻を奪い、ゼジムが言うつ、兵士は申し訳なさそうに  
「はい」と呟いた。

「そうか……」

ゼジムはこの事態をどう抑えるか思案した。民達の状態を見ると、異端者が見つからなければ収まりがつかないだろう。

それでも、ゼジムは奴隷を捕まえたとしても、民にも兵士達にも差し出すつもりはなかった。



民達に状況は悪化してしまったが、これはゼジムが待っていた奇跡の様な出来事である。

この場に戻って来た時、民達を見た時は大柄な男に文句を言いたい気分だったが、奴隷がこの場にいないのなら話は別だ。

まだ、一筋の光にも満たないが、奴隷を助ける事が僅かでもあるならば、やる価値はあった。

「わかった。俺が指示を出しても大丈夫か？」

ゼジムは一つ頷いた後、兵士に確認をとる。もし、この場に自分よりも身分が高い者がいた場合、ゼジムが命令を下す事ができないのだ。

例え、その者がどんなに無能でもその者に従わなければいけないのだ。仮にフォッサがこの場にいたのならば、ゼジムもフォッサの命に従わなければいけない。

「はい。幸いにもゼジム様の他におりません」

兵士の言い様はゼジムに指揮してほしいと暗に示していた。兵士達は平民出がほとんどであり、その平民達も赤子が生まれた時にゼジムに世話になる事になる。

高慢である貴族達はゼジムの力を借りる事が当たり前だと思っている事に対し、平民出の兵士達はゼジムに感謝しているのだ。

それは、異端者の赤子を育ててしまうという危険を回避できているからである。

貴族達は、奴隷を買う事ができるように、万が一異端者の赤子を育てていたとしても、それ程の罪にはならないのだが、平民達は、それを国に知られてしまった場合、謀反の意志ありとみなされ、一家全員処刑されてしまうのだ。

だから、ゼジムは平民達には必要不可欠な存在なのだ。中にはゼジムを尊敬している者さえもいる。

それなのに、自分の子供が異端者だった場合は国に躊躇い無く差し出し、異端者を見つけたら殺そうと思う平民達を、ゼジムは不思議に思っている。

ただ、それも幼い頃からの植え付けが原因なので仕方ない部分もある。異端者は何が何でも排除するべきと思うのが当たり前なのだ。ゼジムはその異端者という括りから少し外れて扱われているだけなのだ。

そうでなければ、目の前にいる民達は躊躇いもなくゼジムの襲うだろう。それをしないのは、ゼジムが今の段階では異端者として扱われていないからだ。

ゼジムがもし、異端者に力を貸している姿を見られたりでもしたら、ゼジムも異端者としてみなされるだろう。

だから、これからやる事にはより一層注意しながらやらなければいけない。

「では、命令だ。今この場にいる兵士も、もし城から増援が来るならその兵士も、やる事は一緒だ。民達が落ち着くまで、この場から動かない様に見張っていてくれ」

「見張る……ですか？」

兵士はあからさまに怪訝な表情を浮かべている。恐らく兵士は奴隷を搜索する事を命令されると思っていたのだろうし、ゼジム以外の者ならばそう命令するだろうから無理もなかった。

「そうだ。お前達を守るべき者は民だ。異端者は奇怪な能力を使う事は知っているだろ？ 搜索は俺に任せろ。奴隷の逃げた場所には目途がついている」

最もらしい事を言っているが、ゼジムは奴隷がどこに行ったかなんてわかるはずもない。奴隷がいつ逃げたのかもわからないし、ましてどこにいるのかなんてわかるはずもない。

これを人間が言ったのなら、この兵士も怪しむだろうが、他でもない異端者のゼジムが言えば、兵士も何の疑いもなく信じてしまう。「わかりました」

兵士は切れが良い敬礼をして、他の兵士にゼジムの指示を伝えに行った。初め、動揺の声が漏れていたが、ゼジムからの指示だとわかったのか、その声は消えた。

「よし。後は探すだけだ」

まずはティナとレイサンである。彼女達の無事を確認し、屋敷に帰してから奴隷の搜索だ。兵士達がいつまで民を抑えてられるか、民達の怒りがいつまで続くのかはわからない。

一秒も時間を無駄に使えない。

ゼジムを引き始めていた汗を呼び起こすかのように走り出す。

怒り狂うと称しても良い程の群衆をかき分け、ティナとレイサンの二人と別れた場所に戻るが、そこに二人の姿はいなかった。

ゼジムは困惑した。

「捕まったのか……いや……それならば民達に動きがあるはずだ」  
呟きながら、思案を巡らす。

ティナとレイサンが民達に捕まっているというのは可能性が低かった。民達に変化は見られない。

ティナとレイサンが自分達で判断してこの場を離れたと考えるのが妥当だ。

「ならば、近くに隠れているはずだ」  
結論は出た。

ゼジムは己の頭に刻み込まれている街の地図を頼りに、隠れるのに都合が良く、なおかつ現場からそう離れていない場所を虱潰しに探した。

しかし、彼女達は見つからず、代わりに違う者を見つけた。  
「フォッサ殿……」

貴族にして、王からの信賴厚い忠義の者が、長年手をかけられていなく、微かに鼻を突く異臭漂う路地に一人立っていた。

貴族の社交会向きの派手な装飾が施された高級な服が目立っているが、汗まみれで怯えの感情を瞳に映し出しているその顔だけを見れば、路地裏に住んでいる家無者やむものとそう変わりはいなかった。

「おっ、おう。ゼジム殿ではないか」

ゼジムを見て、悠然と振る舞うフォッサだったが、虚勢を張っているのは明らかだった。

「フォッサ殿、この事態をどう収めるおつもりで」

ゼジムは率直に聞く。身分の高い者に対して失礼かとも思ったが、時間が惜しい。優先していたのはティナとレイサンの安否なのだ。奴隷に関しての情報も大事ではあったが、二人の事に気を向けている今では、店の主人のくだらない武勇譚を聞かされている様な、その程度の価値しかない。

「おっ、おう。それはだな……」

ゼジムが奴隷の件を知っているとわかるやいなや、フォッサの顔に再び汗が吹き出し、ばつがわるそうに俯く。

「フォッサ殿！」

中々話そうとしないフォッサに苛立ちを浴びせる。ひっ、と小さな悲鳴を上げたフォッサは観念したのか、小さな声で話し始めた。

「私がエレナの力を借りて今の地位を持ったのは事実だ。そして、私は次第にエレナに情を入れてしまったのだ。今日はエレナが私の家に来てちょうど一年経ったので、記念に服でも買おうと思って初めて外に連れ出したのだ。その帰りの道中で……」

両手を顔を覆い、泣いているフォッサを余所に、ゼジムは思案していた。

貴族の常識では、奴隷に名前を付ける事はない。以前に苦渋を飲まされた女性の名前を付けて、奴隷とその女性を重ねて復讐すると言った貴族がいたが、そんな特殊な趣味を持つ者ではない限り、名前を付ける事はないのだ。

だから、エレナと呼ばれる奴隷は大事にされていたのだろう。今日に限っては、フォッサもエレナを異端者の奴隷ではなく、一人の女性として見ていたのかもしれない。

貴族であろうと、街に出かけるならば、それ相応の服装にする。しかし、フォッサの服装は街に溶け込む事ができない程、派手である。

フォッサ自身、今日と言う日を楽しみにしていたのだろう。それはエレナを信じたと言っても良い。

その矢先に、人間達が覚醒と信じて疑わない行動をしたら、悲しみも大きいだろう。

能力の覚醒は、その奴隷の死を意味する。

フォッサとエレナの関係を深く知らないゼジムだが、恐らく二人はとも仲睦まじく生活していたかもしれないと想像していた。

「フォッサ殿とエレナは愛し合っていたのか？」

「そつ、それは……！？ そつだ。愛し合っていたのだろうな」

ゼジムはフォッサを見据えた。腫れた瞳で遠くを見つめるフォッサに嘘は感じられなかった。

内心、ゼジムは驚いたとともに、感心もしていた。

人間と異端者は例外なく絶対に相容れないと思っていた。絶対的な憎悪の植え付けによって、心を惹かれる事は無い。

貴族にしたつて、自身の欲望の吐きだせる、反応がある人形のような存在と認識していて、心を通わしあおうと考える事など無い。

故に、フォッサは極めて珍しかった。

情けない顔貌とは裏腹に、フォッサもまた、レイサンの様に心の奥に大きな芯があるのかもしれない。

それが具体的になにかはわからなかったが、それがあつたからこそ、フォッサは偏見なくエレナを愛せたのかもしれない。

そう思うと好感が抱いたが、事態はゼジムの気持ちの変化程容易にはいかない。

「フォッサ殿はどうしたいのですか？ エレナをどうしたいとお考えですか？」

フォッサは視線をゼジムに戻し、真つすぐに見据えた。その瞳からはただならぬ決意を感じ取れた。

「酷い事をしたと言う自覚はある。故に、一緒になりたいとは言えない。が、エレナともう一度話したい」

最後の方はエレナを想い浮かべていたのだろう。逃げ出してしまう後悔の念が僅かに表情に表れていた。

ゼジムは決心した。

「わかりました。探して、見つける事ができたらフォッサ殿の下に送り届けます」

この男なら二度とこんな過ちをしないだろうと考えた結果だった。最も、当事者の一人であるエレナの弁は聞いていないので、エレナが拒んだらフォッサの下には送り届けないのだが。

「まっ、誠か!？」

フォッサは目を大きく開いて、ゼジムに掴みよる。エレナの事で真剣なのはわかるのだが、汗臭い年上の爺に近寄られるのは不愉快だった。

「はい。御約束します」

言いながら、フォッサの肩を押して離れさせる。

「頼む!」

フォッサは身分高い貴族としてではなく、愛する女性を待つ一人の男性として深々と頭を下げた。

「まだ見つかるとは決まっていなかったので礼は待ってください。最悪、屍との再会になりかねない」

蒸し返す様で若干罪悪感が沸いたが、元は言えばフォッサが動揺してエレナを一人にしまったのが原因なので、ゼジムは正直に告げた。

フォッサは力無くへたり込み、両手で頭を抱える。

「そんな……」

ゼジムはやれやれ、と溜息を吐き、踵を返した。

「どっ、どこへ行く!？」

慌てて呼びとめるフォッサに背中を向けたままゼジムは答えた。

「一秒も無駄には出来ませんから。見つかった時はそちらへ伺います」

そう言つて、ゼジムは走り出した。

フォッサはゼジムの姿が見えなくなるまで、その背中に向かってずっと祈っていたのだった。

？

思わぬフォッサとの関わりによって、焦燥はさらに増した。

ティナとレイサンの搜索、さらに奴隷の搜索。

フォッサと話をしてしまったせいで、奴隷の事も頭にちらつかせながらの搜索になってしまった。

薄汚れた服を着て壁を背に座り込んでいる女性の家無者やむものにまで目を向けなければいけなくなり、目星を付けていた場所を探し終わる頃には月が顔を出していた。

しかし、ティナとレイサンはもちろん、奴隷も見つける事はできなかった。

仕方なしにゼジムは月の灯りだけを頼りに闇雲に探し始めた。

時間が経てば経つ程、焦燥感は胸を襲い、それに呼応して足が速まる。

気づけば、ゼジムは自身の屋敷の近くにまで足を伸ばしていた。

「ちっ」

舌打ちをして、夜空を見上げる。

「ティナ……レイサン……」

夜空に思い描いた二人が見える。ティナは満面の笑みで映っているのに対し、レイサンは伏し目がちだった。

二人にもしもの事があれば、自分はどうなってしまうのだろう。

愛する女性の七人の内の二人だが、その七人はただの七人ではない。

かけがえの無い存在だ。屋敷に来て日が浅いレイサンにだって、分け隔てなく愛情を注いでいる。

奴隷の事はひとまず忘れ、ティナとレイサンの搜索に全力を注ぐべきだったのだろうか。

もし二人を探す事を優先するならば、成り行きとはいえフォッサの頼みを見捨てる事になる。それならば最初から断ればよかったの

でないか。

考えれば考えるほど、自分の行動が正しかったのかわからなくなつた。

「ゼジム様……」

唐突に声をかけられる。

現状の深刻さから逃避して思案を巡らしていたからか、人が近づいてきている事に気付くのが遅れてしまったようだ。

波がかった黒髪が肩まであり、その瞳は大きく、人懐っこさを想像させる。

整った顔立ちなのに、どこか華がない。

ゼジムが、彼女の長所は何かと問われれば、迷わずに、優しい心を持つ所と答えるだろう。

「トウレネ」

トウレネはゼジムに微笑みかけたが、すぐに表情を強張らせた。

「なにがあつた？」

トウレネが一人で外出する事など今までに無かった。と言うより、全ての屋敷にいる女性達は安全を考慮して、ゼジムと共にではないと外出しない様に言い聞かせているのだ。

なので、トウレネがここにいると言う事は、それだけで非常事態を意味している。

「まずは、勝手に屋敷を出て申し訳ありません」

律儀に謝罪をするトウレネ。そして先を続ける。

「ティナとレイサンは戻ってきています」

この場にトウレネがいなかったら、ゼジムは膝から崩れ落ちていただろう。

能力を使いすぎた反動である性欲を無理矢理抑えつけ、能力者と戦い、ティナとレイサン、奴隷を探して必死に走り回っていたのだ。その結果は、ゼジムのくたびれ損だったが、二人が無事だという事も加わって、どっと力が抜けてしまった。

「そうか」



ほっと一息をつく。

「屋敷に御戻りください」

トウレネは何故か切実に詰め寄ってきた。それが何を意味しているのかわからないが、ゼジムにはもう一つやるべき事があった。

トウレネを優しく引き離し、頭を撫でる。

「すまない。探し物がもう一つあるんだ」

トウレネの顔が綻んだ。

「恐らく、その探し物も屋敷にありますわ」

月明かりが一瞬消える。雲が遮ったようだった。

ゼジムはトウレネの言葉を反芻したが、理解できなかった。

目を大きくして、徐々に差し込む月明かりに照らされていくトウレネを見つめる。

「探し物がわかるのか？」

トウレネは勿論、ティナやレイサンにも奴隷搜索の件は話していない。

ティナとレイサンを探している途中になりゆきで頼まれた事なのだ。

故に、ゼジムと、その頼み事をしたフォッサ以外、探し物が何であるかはわからない。

「奴隷の女性ですよね？」

「なんでわかる……？」

困惑したゼジムの余所に、トウレネは嬉しそうにゼジムの横にそっと寄り添う。

「ゼジム様が屋敷に中々戻らないのは奴隷を探しているからではないかと、皆で話し合っていたのです」

「いや、それはティナとレイサンを探していてだな」

「いいえ。二人の事だけを探していたのなら、屋敷に一度戻る考えも浮かぶはずですね。浮かばない理由は、他に何か考える事があったから」

こうも言い当てられると、言葉を返せなかった。

確かに考えてみれば、しばらくして見つからないならば、一度屋敷に戻る事も考えるだろう。

それをしないのは、トウレネの言うとおり、別の探し物があつたからに他ならない。

無論、ティナとレイサンを優先的に探していたのだが、奴隷を無視する事もできなかったので、屋敷に戻ろうとは考えられなかったのだ。

「それなのに、二人の事を考えて胸を痛めているなんて、欲張りというか、不器用というか」

「なっ、お前いつからいたんだ!？」

ゼジムは不覚にも赤面していた。

「夜空を見上げてレイサン、ティナ……と呟いていた時からですわ。とても切なく感じました」

「お前っ！」

ゼジムは益々赤くなる顔を隠す様に俯く。まさか見られているとは思っていなかったで、中々顔が上げられなかった。

「ゼジム様の慈悲深い心は尊敬しておりますが、愛する女性とその他との境ははっきりしていただきたいですわ」

そう言つて、頬を膨らますトウレネを見て、からかわれていると気付く。

「やめてくれ。後悔しているんだから」

トウレネは小さく舌を出して応える。

「私達に何かあつて一番傷つくのはゼジム様自身ですよ?」

悪戯めいた笑みを浮かべるトウレネを見て、ゼジムは自身がそれ程わかりやすい人間なのかと疑ってしまう。

それすらもトウレネに見破られていて、

「ゼジム様を愛しているからこそわかるのですよ」

と先に言われてしまった。

自身の心を丸裸にされたも同然のゼジムは「これから気をつけるよ」と返すだけで精いっぱいだった。

屋敷に戻ると、玄関で騒動が起きていた。

奴隷の女性と思われる悲鳴が屋敷に響き渡る。

女性達が痛めつけていたわけでもなく、彼女の怪我の処置をしようとしているのは、抱えきれない程の包帯を持っているティナを見てすぐに分かった。

女性 エレナが何故治療を拒んでいるのかはすぐにわかった。味方なのかも、敵なのかもわからない者の屋敷に連れて行かれ、疑っているのだ。

屋敷の女性達と少しでも向き合えば、悪意が無い事がわかるのだが、エレナはそれすらもしていないのだろう。

フォッサに見捨てられたのかもしれないと考え、深く傷つき自暴自棄になっているのかもしれないかった。

以前は高価な服だったはずの、所々破れているワンピースを纏っているエレナは、何者も寄せ付けたくないという想いを、射す様な視線に乗せて辺りを牽制している。

ゼジムが近づくと、その視線の対象をゼジム一人に絞った。

「近づかないでください」

瞳とは違い、声音には何も込められていなかった。絶望しているのだとわかった。フォッサに見捨てられたと思っているのだ。

「エレナ」

ゼジムの予想を裏付けるかのように、エレナは名を呼ばれ困惑した。

「何故私の名前を？」

「フォッサは見捨てていないぞ」

鋭かった瞳が、一瞬緩まる。しかし、すぐに元に戻り、ゼジムを睨みつけた。

「出鱈目な事を言わないでください。私は知っています。あなたとフォッサ様は身分も違うし、今まで話す事も無かったはずです」

エレナはまったくゼジムの事を信用していない様だった。だが、

ゼジムは気にせず告げる。

体力、反動、色々限界がきている。エレナに信用してもらわなくとも、フォッサにエレナを保護した事を伝えればいいのだ。

「そんな事はどうでもいい。今からフォッサを呼んでくるから、着替えて待っている」

ゼジムはティナに目配せをすると、ティナがそれを察して、着替えの服を取りに踵をかえした。

「いない！」

しかし、エレナの叫び声に止められる。ティナは驚いて振り返り、エレナを見つめた。ゼジムも、他の女性達も同様にエレナに視線を集中している。

そんな中、エレナは俯いて、かろつじて聞きとれる声で言った。  
「このままで良いです」

ティナもレイサンも、他の女性達もエレナの言葉に怪訝な表情を浮かべていたが、ゼジムだけはピンときていた。

「わかった。そのまま良いから待っている」

エレナは俯いたまま小さく頷く。顔を上げられる状態ではないようだ。

（フォッサ殿から買い与えられた大事な服…… ってとこか）

ゼジムは苦笑して、屋敷を後にした。

フォッサの屋敷は、ゼジムの屋敷から総離れておらず、十分も歩くと、住まいが確認できる。

大きな黒い門の先に、そびえたつ様にあつた。ゼジムの屋敷二分程の大きな屋敷には、従者達の手が隅々まで行き届いているようで、一度見ただけではこの屋敷が数十年の時を刻んできた建物だと見分ける事ができないだろう。

ゼジムは黒い門を開き、扉の前まで歩いた。扉は両扉で、ちょうどゼジムの首の高さに獅子を模した、鉄でできた小さなレリーフが付けられている。

その獅子の鼻から手の平に収まるぐらいの輪が出ていて、その部分は動かせる様になっている。

ゼジムはその輪を少し持ち上げ、扉に何度も打ちつけた。輪が当たる部分も鉄で出来ており、輪が当たる度に大きな金属音が鳴り響く。

しばらく打ちつけていると、扉が僅かに開き、そこから一人の女性が姿を見せた。不審な思いを隠そうとせず、扉を開けようとはしない。

「こんな夜更けに何か御用でしょうか？ 見たところ、貴族の方のようですが」

「フォッサ殿に用事がある。ゼジムが来たと伝えてくれ」

「……少々お待ちください」

女性はそう言い残し、扉を閉めた。

相当な疲れが溜まっているゼジムは、僅かな待ち時間にすら苛立ち、髪の毛をくしゃくしゃとかきあげたり、もう一度獅子の輪を打ちつけたりにしていた。

しばらくそんな事をやっていると、再び同じ女性が顔を出した。

先程よりも顔が険しかった。

「中にお入り」

ゼジムは女性が言い終わる前に強引に扉を開き、中に入っていた。

「何をするのですか！？」

先程の女性の喚き声を無視しつつ、屋敷の中を見回す。

「おい、フォッサ殿はどこにおられる？」

「上級貴族の屋敷に強引に上がり込むなんて無礼極まりない！ 憲兵隊を呼びますよ！？」

ゼジムの行動が彼女の逆鱗に触れたのか、脅迫めいた言葉を吐いている。

「そんな事をして困るのはフォッサ殿だと思うがな。それより早くフォッサ殿の部屋を教えろ。フォッサ殿にもそう云い付けられてい

るんじゃないのか？」

女性の事など気にも留めずにゼジムは催促する。ゼジムの言うとおり女性はフォッサからそう言い付けられている様で、渋々と目の前のドアを指差した。

「あちらです」

「ありがとよ」

歩きながら礼の言葉を贈り、女性が指差したドアを開く。

中にはフォッサがいた。エレナの事が気がかりでしようがないのか、路地で出会った格好のまままで座り心地が良さそうなソファーに腰を落とし、前かがみで両の手を組んでいた。

「ゼジム殿！」

待ちわびたかのように大きな声を上げるフォッサ。

「エレナを保護しました」

ゼジムは座りもせずに簡潔に話した。許されるならば、この場に大の字で寝てしまいたい程、疲労感がずっしりとゼジムにまわりついている。

「そっ、そうか。それは良かった……」

フォッサは感極まってそれ以上の言葉が出なかった。フォッサの気持ちはわかるゼジムだったが、あえて続けた。

「それで、エレナの事なのですが、いつ頃こちらに連れてきましようか？」

後はエレナを連れてくる日取りを決めたらゆつくりと休める。

日取りが決まれば、とりあえず一段落できるのだ。

ティナとレイサンの失踪や、奴隷救出の為に骨を折った一日だった。

早く夕飯を食べて風呂に浸かり、反動解消の為に女性を抱こう。

ゼジムの頭の中は今日一日の苦勞を吹き飛ばすであろう、癒しになる出来事を想像し始めていた。

「その事なのだが……」

しかし、フォッサの言葉は今日の出来事を締め括る物ではなかつ

た。

これ以上は嫌だ、と思いながらフォッサの言葉を見無視する身分ではない自分を憎みつつ、恐る恐るフォッサに聞く。

「まだ何か懸念する事が？」

「私が奴隷を、しかも着飾った奴隷を連れて歩いていた事は周知の事実だ」

ゼジムは悟った。がつくりと俯きそうになるのを必死に堪える。

「それはつまり……」

「貴族憲兵隊が調査に入る事になるだろう」

貴族憲兵隊は貴族を取り締まる特殊な憲兵隊だ。貴族は自尊心が強く、自分よりも身分が低い者に対して否を認めたり、謝罪する事はない。

そこで結成されたのが貴族憲兵隊だ。彼らは全てが生粋の上級貴族達であり、フォッサも逆らえない。

公明正大に真偽を暴く彼らには特徴があり、全ての憲兵が奴隷を買った事がなく、王と同じく奴隷をとて憎んでいる事だ。

彼らの結成は現国王になってから当然の様に結成された。

憲兵隊は、国王がどれほど異端者を憎み、恐れているかを示しているものだった。

「そうになると、しばらくこちらには近づけさせない方が良いと言う事ですか」

溜息を吐き、自分にかかる災難を受け入れるか悩むゼジム。

貴族憲兵隊は容赦がないと言われている。フォッサの屋敷に奴隷が隠れていないかひたすらに調べ、フォッサへの執拗な事情聴取が容易に予想できた。

一日や二日で終わるものではない。

では、その間エレナが身を隠す場所を探さなければいけないが、フォッサが用意した所であれば貴族憲兵隊が調べるだろう。

そうになると、フォッサと関わりが無い者で、エレナを知っている人間に頼るのが一番である。

信用の問題は身分の差とゼジムが異端者であると言う事で解消される。

貴族憲兵隊はゼジムの疎ましく思っている。フォッサが憲兵隊の聴取に折れて真実を話せば、憲兵隊はゼジムの調査対象に入れる事だろう。

故にエレナを匿う役割はゼジムに回ってくる。ゼジム自身を守るためにはエレナも守らなければいけないのだ。

「そうだ。それで、申し訳ないが貴公に頼みたいのだ」

案の定、フォッサはエレナを頼むと言いだした。

ゼジムは内心、断りようがないだろう、と毒づきながら頷いた。

「わかりました」

「すまぬ。だが、貴族憲兵隊の尋問は地獄と比べても遜色がないと言われている。我が身一人の為ならば心折れてしまうだろうが、エレナと貴公の命を預かるとなると、耐えられる気がするのだ」

フォッサは申し訳なさそうにしながらも、決意のこもった言葉だった。

ゼジムはその気持ちを理解できた。

人は一人では立ち向かう事ができない程の困難に出くわす事がある。その時に、力をくれるのは自分が大切に想う人達であり、自分を大切にしてくれる人達だ。

フォッサにとってエレナは愛する存在であり、ゼジムはエレナを助けた恩人である。

自分が口を割ってしまったら、その二人に危害が与えられるのならば、命がけで口を閉ざす事もできるのが人なのだ。

ゼジムは自身の身分から、フォッサに頼まれたら引き受けなければいけないと考えていたが、どうやらゼジムの思い違だったようだ。

フォッサは恐らく、ゼジムが断ったとしても、身分の差を盾にしてゼジムの陥れる事はないだろう。

エレナを見つけただけでもフォッサにとって恩人にならないの



だ。

ゼジムは人間を信用した事など無いし、心を通わせることなどできないと断定していたが、目の前に居るフォッサだけはその括りに入れる事はできないのかもしれないと感じていた。

全てを委ねることに抵抗が無くなるほど信用できるわけではないが、フォッサの言葉に嘘は感じられない。

わずかにではあるが、フォッサに好感を抱き始めている事を理解した。

「そう思うならば、気がする、ではなくて是非耐えていただきたいですな」

どうせ、こちらに選択肢はない。ならば目の前の男を信じるのも良いか、と思うことにした。

そう思うとほんの少し、人間に対してのわだかまりが解けて、それが自然と優しい笑みとなってフォッサに向ける事ができた。

「そうだな。耐えなければいけないな」

フォッサも笑った。

これから襲いかかる不安を見せずに笑うフォッサを見て、ゼジムはさらに好感が増した。

「こちらの事は安心してください。彼女は絶対守ってみせます」

本心だった。異端者を差別しない人間なのであれば協力して見てもいいと思った。

「こちらの事も安心していてくれ。絶対に耐えて見せよう」

夜も更けた頃、部屋に二つの笑い声が響いていた。

? ?

ゼジムはあれからフォッサにエレナへの手紙をしたためてもらい、民達が集まっている広場へ行った。

夜も遅くなったからか、人はまばらになっていたが、今だに奴隷の裁きに執着している者もいた。

ゼジムは困り果てている兵士に代わって民を説得し、なんとか収めることができた。

しかし、それはその場のぎである。

民達の話盗み聞きしたのだが、どうやら日替わりでエレナの搜索をするつもりようだ。

ゼジムも、エレナの姿を確認しなければ民は納得しないだろうと考えていた。

諸々の問題はあったが、兵士とゼジム、下っ端同士が話し合っても意味がないので、兵士に今日起きた事を上に伝える様に指示し、兵士達を解散させた。

兵士も民も広場から居なくなった事を確認し、ゼジムがその場を後にしたのは日が変わったところだった。

ようやく自身の役目を終えたゼジムは屋敷に戻った。

最悪な一日だと思っていた。これほどまでに疲労感があるのとはとても久しかった。

それでも、帰路の間、疲れをそれ程感じなかった。

フォッサと言う人間の心に触れる事ができたからだ。

人間に対してのわだかまりはゼジムにとって良い気分になるものではない。

長年その感情を抱いているのは精神的な疲労になる。

ゼジムとしてはそんな感情を捨て去りたいとも思っているのだが、世の中がそうはさせない。

ゼジムが人間達に対して好意的にしたとしても、人間達はゼジム

に好意を与えるとは限らないのだ。

自分の身を守るならば、愛する女性達の身を守るならば、人間達に全幅の信頼を置く事は危険なのだ。

だが、フォッサはそのわだかまりに一本の杭を刺しこんだ。

それはまだ、僅かなヒビしか作れない程の弱々しいものだが、確かにそこに存在する光の杭だ。

そして、それは些少なからゼジムを変えた。

人間は信じる事ができないが、その中でも信じてみてもいいかもしれない人物がいる事に感づかせてくれたのだ。

フォッサをまだ信用はしていない。だが、試す価値はあった。

もし、貴族憲兵隊の件がうまく片付いた時には、フォッサを少しは信じてみるのも良いかもしれない。

「とりあえず、事が終えてからの話だな」

そう呟きながらも、ゼジムはフォッサが貴族憲兵隊の尋問を切りぬけた後の事を想像しながら自身の屋敷の扉を開けた。

エレナにフォッサからの手紙を見せると、エレナは感極まって泣いた。

しばらく泣き続けた後、エレナは小さな声で「フォッサ様の容疑が晴れるまでよろしくお願いします」と呟いた。

馴染むには時間がかかりそうだったが、警戒心は無くなっただろうと、安堵した。

その後、ティナとレイサンを説教した。

話を聞けば、怒り狂った民達に恐怖を感じ、人目がつかない所かつゼジムが帰ってくるのが見える場所に隠れようとしたのだが、件の奴隷がそこにいたのだと言う。

ティナはゼジムの待った方が良かったのだが、レイサンがここは居続けるのは危ないと感じ、ティナの制止を振り切って屋敷に戻ってきたようだ。

レイサンの言い分は最もだったが、それでも逃亡中に民に見つか

れば恐ろしい事になっていただろう。

しかし、それも全ては二人を置いていったゼジムのせいなので、説教は「危ない事はあまりするなよ」と言うだけに留めた。

レイサンは不服そうだったが、それを無視して話を終わらせたのだった。

それからトウレネが作った夕飯を食べ、風呂で疲れをゆつくりと癒した。

身体的な疲れは大分取れていた。

だからこそ、疲労感に隠れていた、能力を使い過ぎた反動である性欲が抑えきれなくなっていた。

「まだか……」

今、ゼジムは自室のベッドに腰を降ろしている。

カーテンは開いたままで、月の光が部屋を照らしている。それも、これからくる女性の為の演出である。

今か今かと待ち望んでいると、ようやくドアが開いた。

「お待たせ」

カーナだった。透けている寝着一枚であり、その下には裸体が見えている。

周りを挑発するかのごとく、女性の象徴と言える胸を揺らしながらゼジムの横に座る。

月の光がカーナに降り注ぐ。妖艶な印象を持つ彼女は、月の蒼い光を浴びてその魅力をさらに増し、凄艶に見えた。

カーナの肉体美をゼジムは舐めまわす様に凝視する。

「今日がカーナで良かった」

「私もそう思うわ」

カーナも、ゼジムが今までに無い程能力を使った事が分かったのか、両腕をゼジムの首に回しながら同意した。己の体温が高いからか、カーナのひんやりとした腕が気持ち良かった。

「早速で悪いが」

カーナの柔らかい唇がゼジムの口を塞ぐ。何度も口付けをされ、

ようやく唇が解放された。

しかし、ゼジムが動く間も無く、カーナは満足そうな笑みを浮かべ、ゼジムを押し倒した。

「構わないわよ。あなたはどうせいつも情緒なんて気にしていないでしょ？」

「確かにな」

その言葉を合図にゼジムが動き出す。

その後、長い時間ゼジムは欲望をカーナにぶつけていたのだった。

? ? (前書き)

活動報告にて小説ブログのurlを載せています。良かったら見てみてください。

? ?

ミリタリア王、アグシューゼは苛立ちを募らせていた。

理由は非常に我儘な事で、寝ている時に起こされたからだ。

奴隷に関わる問題はその日の内に告げると、強く言っているのが災いした格好だ。

さらに、その問題にフォッサが関わっている事がさらに苛立たしさを増した。

奴隷を心から憎み、忠誠心も厚いと感じ、試しに政策の事で相談すると、フォッサは良策を披露してみせた。

それから重用してたのだが、アグシューゼはフォッサが奴隷絡みの問題を起こすとは夢にも思っていなかった。

それほど信頼できる相手だと思っていたアグシューゼからしたら、今回のフォッサが起こした事はアグシューゼに対する裏切りでもあった。

「馬鹿な奴よ……」

事前に申し出ておけば、貴族憲兵隊を出すまでも無かったのだが、フォッサは奴隷を買った事を隠していた。

故に、謀叛の可能性を疑い、貴族憲兵隊に調査を命じた。

貴族憲兵隊の厳しい尋問に加え、アグシューゼからの信頼を失い、今の身分からの降格も仕方がない状況だ。

たった一言アグシューゼに告げないだけで、明暗が分かれたのだ。こうなると、フォッサには興味がなくなった。

後は貴族憲兵隊が調べ、適切な処置が下される。

アグシューゼは最終決定をするだけである。

つまらない事で睡眠時間を奪われた。

そう思い、再び眠りにつくこうとする。

「ミリタリアの王よ」

大の大人が五人は寝れるのではないかと思う程の大きなベッドに

背中を預けようとした時、急に声を掛けられた。

「何奴！」

王の自室である。城の中でも一番高い塔に位置しており、外から侵入する事は不可能だ。

だからこそ、アグシューゼは唯一の侵入手段である扉に目を向けた。

案の定、声をかけた主は扉の目の前にいた。

「お主は誰だ？」

見慣れない顔だった。美しい顔立ち。蒼い髪の毛と相まってお伽噺に出てくる神族を想像させた。

「俺は異端者だ」

男はさらりと言つてのける。

「私がミリタリア王だと知つての発言か？」

「勿論」

大陸に知れ渡る程の異端者嫌いであるアグシューゼを目の前にしても堂々としている男。

それが、アグシューゼを逆上させた。

「ならば一時の猶予を与えよう。己の短い人生を振り返りながら死ね」

アグシューゼは男から目を離さずに動き、4本の筒がある所まで移動する。

そのうちの一つの蓋を開け、怒号を上げた。

「異端者だ！ 早急に我が部屋へ！」

アグシューゼは歪んだ笑みを浮かべた。

これで目の前の男の行く末が決まったも同然だ。

あとは、屈強な戦士達が男を切り刻むのを待つだけ。

アグシューゼは確信していた。

「それは兵士の詰所につながっているのか？」

しかし、男は慌てる様子ではなかった。

「そうだ。今更後悔しても遅いかな」



アグシューゼは勝ち誇った様に高々と笑う。

「ふむ。恐らく誰もこないぞ？」

男の言葉に、アグシューゼの笑い声が消えた。

怪訝そうに男を見る。

「どういう事だ？」

アグシューゼの問いに男は口端を上げる。

「寝ているからだ。寝てもらった……と言う方が正しいか」

「ばっ、馬鹿な！」

アグシューゼは再度筒に向かって声を上げる。しかし、男が言っている事を肯定するかのごとく、一向に兵から声が返ってこない。

アグシューゼの心中で、一つの欠片が生まれていた。

「そんなはずはない。屈強な戦士達を一人でだと！」「屈強……か。所詮人間ではないか」

男は怪しげな笑みを浮かべながら手の平から蒼炎を出した。

蒼い炎は獲物を捉えたとかばかりに猛々しく燃えている。しかし、それはアグシューゼに襲いかかる事無く、男の腕の周りを忙しなく回っていた。

蒼炎を見せられた事で、次々と欠片が生まれ、それぞれがつなぎ合わさり、形を為していく。

アグシューゼの意志に関係なく、完成されたそれは、絶望的な恐怖だった。

守ってくれる者もおらず、兵士達を一人で倒す化け物の様な目の前の男に敵うはずもない。

助けも呼ぶ事ができない。逃げる事もできそうにない。

呆然と殺される自分しか想像できなかった。

「な……何故」 声が震えた。口は渴いていた。王としての執務をこなし、一日の終わりを過ごす優雅な自室が、想像を絶する恐怖で渦巻いている。

アグシューゼはまともな思考すらできなくなっていた。

「勘違いするな。うまくいけばお前を殺しはしない」

男は言いながら蒼い炎を消し、懷から手の平に収まる程度の水晶を取りだした。紫色の輝きを放つその水晶は、吸い込まれる様な魅力があった。

「それは何なのだ？」

引つ掛かる部分もあったが、間違いをしなければ殺される事は無いのだろう。頭が働かないアグシューゼは、敵である男の言葉を信じ、恐怖を若干忘れていた。

「神の石だ」

「神の石？」「この石を体内に入れると、異端者を超える力を手に入れる事ができる」

そんな石の存在など知らなかった。伝説を記す書物にすら書かれていた記憶は無い。

「これがあれば、異端者を駆逐できる。そう思わないか？」

男の言っている事は確かに魅力的だったが、正常な思考を持たないアグシューゼですら、おかしく感じていた。

もし、そんな石があるのならば、過去に異端者の暴虐を許す事も無かったはずなのだ。

「お主は、異端者であろう？ 余にそれを与えて何がしたいのだ？」  
これもおかしく感じる原因だった。敵であるアグシューゼに力を与えるなんて考えられない。

「一つ頼まれて欲しいだけだ。言っておくが、断るなら殺すし、お前が神の力を得た後で俺に逆らうならその時も殺す。お前が神の力を得たとしても、俺を殺す事はできない」

男の言葉一つ一つに強烈な殺気を感じられた。その殺気をたぎらせた瞳は迷うことなくアグシューゼを捉えている。

「異端者であるお主が、余に何を頼むのだ？」

男の殺気から逃げるかの様に顔を逸らしたアグシューゼはただ従う事しかないと悟っていた。

「受けるか受けないか、どちらを選ぶ？」

問う事すら許されなかった。アグシューゼは是か否かを言う権利

しか与えられていないのだと本能で察知した。

「わかった。引き受けよう」

自分の命を守るにはそう言うしかなかった。目の前の男が何の目的で神の石なる物を与えてくれるのか理解できなかったが、そんな事はどうでもよかった。

心が、目の前の男の言葉に従えと警告していた。

アグシューゼは王としての威厳を守り、異端者に屈せずに死ぬことができると思っていた。

しかし、目の前の男はアグシューゼの小さい自尊心など、容易く引き裂いたのだ。

僅か数刻前まではミリタリア国に君臨していたアグシューゼだったが、今や目の前の男に屈従するしかなかった。

「では、これを飲み込め」

男は神の石をアグシューゼに投げる。神の名を冠する物に対して粗末な扱い方だった。

アグシューゼは割れ物を受け取るかのように慎重に受け止めた。石にしては軽かった。

近くで見ると、水晶の奥にある何か（・・・）が輝きを発しているのがわかった。

絶えず強い輝きを放つ神の石から、言い知れぬ圧力を感じた。

「飲めと言われても……」

手の平程の大きさの石だ。顎を外したら口の中に入るかもしれないが、飲み込む事は到底できそうもない。

「飲み込むのが一番痛くないと思ったのだから……」

呟きながら、男はアグシューゼに近づき、神の石を強引に奪い取った。

「仕方ない。少々痛むが我慢しろ」

「えっ」

アグシューゼが疑問を口にするよりも早く、男は石を持った右手を振りかぶり、アグシューゼの胸に叩きこんだ。

「がああああっ！」

肉が切れる音、骨が砕かれる音と共に激痛が胸に走る。アグシューゼはその苦痛に絶叫を上げるが、男はお構いなしにさらに押しこむ。

血が噴水のように飛び散り、アグシューゼと男に降りかかる。

「やめてくれっ！ 許してくれっ！」

激痛に顔をゆがませながらも必死に許しを請うが、男は気にするそぶりすら見せずに、口端を上げた。

「仕上げだ」

そう言い、ねじ込む様に腕を動かすと、手が完全にアグシューゼの胸の中に入ってしまった。一際大きい叫びが部屋に響いた。

男は五月蠅そうに顔をしかめ、右手を抜いた。そこに神の石は無かった。

「しっかりと働いてもらっぞ」

男は勢いよく手を振り、血を払う。

アグシューゼは薄れゆく意識の中で、神の石が静かに脈打つのを感じていた。

## 再会

朝目覚めたゼジムを襲ったのは強烈な倦怠感だった。

反動の解消のため、朝日が出るまでカーナを求めた事で性欲を抑える事ができたのだが、その代わりに倦怠感を引き起こしていた。それもすべては昨日の出来事が原因だ。

本来なら今日は体調不良と言って一日休みたいところなのだが、ゼジムは疲労に溺れていると言っていい体をゆつくりと起こした。フォッサの処遇、街の様子などを見ておかなければいけない。

現状を明確に把握しておかなければいけない。いつ、ゼジムに火の粉が飛びかかってくるかわからないのだから。

倦怠感を取り去ろうと上半身を大きく伸ばす。効果はさほどなかったが、やらないよりはましだった。

そして、ベッドから出ようとした時に、視界の端に朝日をはじき返しているのではないかと言う程の眩い金髪を捉えた。

「カーナ……」

金髪の女性は名前を呼ばれても一向に起きる気配もなく、規則良く寝息を立てている。

通常なら、事が終われば部屋に戻ったり、そのまま寝たとしても、ゼジムより早く起きているカーナだが、今回はさすがに疲れきっているようだった。

「ありがとな」

ゼジムは前夜、何一つ文句言わずに付き合ってくれた愛する女性の頬に感謝の口付けをし、起こさない様に静かに着替え、部屋を出た。

「おはようございます」

部屋を出た瞬間、挨拶の言葉を耳にする。レイサンだった。

「おお、レイサン。おはよう」

朝からの待ち伏せ。ゼジムは嫌な予感がしていた。

「昨日は何故あの三人組を追ったのですか？」

やはり、とゼジムは思った。レイサンは前日の事が気になっていたようだ。

「あー……それはだな……」

真実を言えるはずがなかった。愛し合う（レイサンはまだだが）女性を危険な場所に置き去りにし、長年の想い人を追ったのだ。

想い人を追うだけならまだよかっただろう。しかし、異端者にとつて危険極まりない場所でのティナとレイサンを置き去りにした事は、咎められて当然の事である。

中々話し始めないゼジムの、レイサンは怪しむ様に睨んでいる。

「まさか、誤魔化そうとしてませんか？」

ゼジムの胸の奥に衝撃が走る。

「な……なんでそう思うんだ？」

「私がここに来た日の夜、部屋から出ようとした時と同じ顔をしています」

ゼジムの慌てて顔を逸らし、レイサンに見えない様にする。

僅か二週間の付き合いであるレイサンにすら、ゼジムの心の内は見透かされていたのだ。

ならば、数年の付き合いであるトゥレネが昨日のゼジムの胸中を的確に当てる事ができるのは必然だった。

「いや、誤魔化そうとはしていないぞ」

そう言いながら、ゼジムは心の準備を始めていた。恐らく、誤魔化す事は勿論、嘘をついても見破られてしまうだろう。

ゼジムは観念するしかなかった。

そうになると、非難を受ける覚悟が必要になる。故の準備だ。

「あのな……実は」

不安に揺らぐ心を必死に固め、ゼジムは昨日の事を話した。

観念して話し始めたゼジムを見て、最初は嬉しそうに聞いていたレイサンだったが、話し終わる頃には厳しい視線をゼジムに浴びせていた。

「つまり、一緒に暮らしている恋人を置いて、ただの想い人を追ったというわけですか。置き去りにした危険を考えずに？」

「いや、ただの想い人じゃ」

ゼジムの言い訳を、レイサンは睨み据えて一蹴した。

「あなたは本当に私に好かれたいと思っっているのですか？」

容赦ない口撃が襲いかかる。ゼジムは顔を上げる事すら出来ず、うなだれていた。

「お前達の事は本当に大事に想っている」

「何もわかってませんね」

レイサンの言葉が何を意味しているのかわからなかったゼジムは顔を上げ、レイサンを見た。

レイサンは悲しそうに視線を落としている。

「レイサン？」

「私はまだいいです。今の話を聞いても、あなたを好きになる可能性がさらに低くなるだけですから。けど」

再びレイサンがゼジムを睨みつける。その眼光には溢れんばかりの非難が込められていた。

「ティナさんはあなたの恋人でしょう？ 恋人を危険な場所に置き去りにするなんて、最低です」

終わりの辺りでは、言葉を荒らげていた。それほど、ゼジムの行動に怒りを感じているのだ。

レイサンの言った事は至極当然だった。

「すまない……本当に後悔しているんだ」

ゼジムは頭を下げた。

「頭を下げれば良いと思っっているのですか？ それに、頭を下げる相手が違うのではありませんか？」

「いや、お前も謝罪の対象だ。お前はまだ俺の事なんて気にもしていないだろうが、俺はお前も愛しているのだから」

頭を下げたまま、ゼジムは言った。許してもらえるまで、頭を上げるつもりはなかった。

「そうですか……」

レイサンが口を閉ざす。そこから動こうともしないので、ゼジムも動かずに頭を下げ続けている。

「その思い人の存在は他の方々は知っているのですか？」

長い沈黙の後、レイサンが静かに口を開いた。先程より語気が薄れている気がした。

「いや、知らない」

「その人とも一緒に暮らしたいと思っているのですか？」

「わからない。あの時は再会にのぼせあがっていたから、そこまでは考えていないんだ」

「今は？」

ゼジムはしばらく考えた。不思議と、そういう気持ちにはならなかった。

「ならないな。何故かわからないが」

「では顔を上げてください」

「いや、許されるまでは」

「いいから」

ゼジムの言葉を、レイサンは鬱陶しいとばかりに遮る。渋々、ゼジムは顔を上げた。

レイサンは真剣な面持ちで言った。

「約束してください。その思い人の事を忘れてください。それができないなら、どんな時でも優先するのはこの皆さんにしてください」

「わかった。約束する」

ゼジムも真面目に言う。

レイサンに言われる前から、何故あの状況でエンクレスを追ってしまったのだろうかと後悔していた。

しかし、レイサンの言葉でさらに、自分がどれだけ馬鹿な事をしたのか思い知らされた。

エンクレスの事を忘れる事はできないが、屋敷の女性を優先する



と言う事は、前日トウレネの言葉を受けて、ゼジム自身も決めた事だった。

故に、レイサンから約束を話しかけられた事はゼジムにとってもありがたかった。

自分の意思に自信がないわけではないが、他者との約束があればより守ろうと気になるのだ。

「ティナさんには内緒にしておいてあげます。ただし、この約束を破った時は容赦なく言いふらしますが。全員に」

表情を全く変えずに淡々と述べるレイサンを見て、ゼジムの背筋に悪寒が走った。彼女は本気だ。

「大丈夫だ。絶対約束は守る」

彼女の威圧感に負けじと、ゼジムも力を込めて言った。しばらくの間、睨みあいが続く。

「わかりました」

先に視線を逸らしたのはレイサンだった。想いが通じた、とほつとしたのも束の間、レイサンはすぐさまゼジムに強い視線を向けた。「彼女達がどれほどあなたを愛しているか知っているから、今回は言わないでおいてあげますが、次はありませんからね？」

「ああ、わかつている」

ゼジムは目を僅かも動かさず、己の気持ちを伝えたい一心でレイサンを見つめた。

「期待……はする気はありませんが、せいぜい裏切らないように」その言葉に、今のレイサンのゼジムの評価が集約されている気がした。

これ以上の低落は防がなければいけない。

「絶対約束は守る！」

強く言いきった。しかし、レイサンは表情をまったく変えない。評価の変動も無さそうだった。

「あつ、大した罪滅ぼしにはならないが、今度良かったら外で食事

」

「結構です」

ゼジムの誘いを言い終わるまでもなく、一言で切り捨てるレイサン。

レイサンは一礼をして、無言で行ってしまった。

渾身のご機嫌取りを一蹴され、固まったゼジムだけが取り残された。

「ま……まずいな」

今までの女性とは明らかに違うレイサンに大して、ゼジムは焦りを覚えていた。

それは、今までの接し方が通用しないと言う事だった。

無論、全ての女性が同じ接し方でゼジムを愛するようになったわけではない。

だが、話していくうちに何気なくわかったりするのだ。今まではしかし、レイサンに関してはお手上げ状態だった。

思えば、出会った頃から一度もレイサンの中のゼジム評が上がった事がない気がした。

かと言って、ティナ達とは仲を深めているのだから、ゼジムの行動が悪い他なかった。

「本当にどうしたものか……」

弱弱しく歩きながら食堂へ向かって行く。

その間、どう取り入ろうか思索したがその全てが、実行する前から失敗が目に見えている物ばかりだった。

十余人が座れる程の大きなテーブルがある食堂に、フォッサの奴隷であり愛する人でもあるエレナの姿は無かった。

ロンドの話では大勢での食事は苦手だと言う事で、彼女にあてがった部屋で一人で食べているとの事だった。

ゼジムはそれでは寂しいのではと感じたが、今日はエレナの意志を尊重する事にした。

と言うのも、問題が山積みでエレナの日々の日常にまで口を出す

事ができないからだ。

民達の事、王が下すフォッサの処遇、エンクレス達が起こした事件の目的やシェイビィの事、全てが気がかりだった。

その中でもシェイビィの事以外は今日城に行けば何かしらわかるだろう。

早々に食事を終えたゼジムは、女性達にくれぐれも屋敷に出ない様に言い付け、屋敷を出たのだった。

？

朝日に照らされた街は特に変わりがなかった。表面的には。

朝、家の周りを掃除している初老の女性も、朝から店を開いている働き盛りのおじさんも日常通りだった。

しかし、一たび昨日の話をすると、人が変わったかのように異端者への怒りをまくし立てるのだ。

ゼジムは、当分異端者への怒りが収まる事がないと、肌で感じていた。

民の様子を見ながら城へ向かって行くと、背後に気配を感じた。それは、ゼジムとの距離を開く事も、近づける事もなく、一定の距離を保っている。

朝から狙う暗殺者など効いた事がなかったので、ゼジムは意識をそちらに向けながらも、城への歩みを止めなかった。

しばらく歩き、人氣が無い通りに着いた頃、それが突然近づいてくる気配を感じる。

ゼジムは仕方なく振りかえった。これ以上近づかれると、いざ仕掛けられた時に後手に回ると考えたからだ。

そこには初老の男がいた。清潔に整えられた短髪は白く、黒のテールコートがこの上なく似合っている。

一見すると、貴族の屋敷にいる執事だった。

「ゼジム殿とお見受けします」

ゆっくりとした口調。皺を強調させる程の笑顔だったが、その瞳は笑っていない。

「何か用か？」

誰からの手の者か、何が目的かもわからない。ゼジムは静かに精神を集中させ、<sup>オーラ</sup>気を練り始めた。

「私はフォッサ様の屋敷で執事として働かせていただいているタキシムと申します」

フォッサの名を聞き、練っていた気<sup>オーラ</sup>を解く。

「それならコソコソついてこないで、さっさと声をかければ良いものを」

「申し訳ございません。誰にも見られないように、と主人からの言い付けでしたので」

恭しく礼をし、謝罪するタキシム。

「それで、用はなんだ？」

立ち止まっでの会話は怪しく見られかねないと感じたゼジムは、ゆつくりと歩き始めた。

意図を察したタキシムもゆつくりとゼジムのすぐ後ろを歩く。

「フォッサ様は身動きがとれなくなっていました。そこで、私が取次役を引き受けましたので、そのご挨拶に」

「もう、貴族憲兵隊が動き出したのか？」

事が起きたのは昨日であり、報告したのが夜遅くである。

本来ならば、王と主要貴族達の会議が今日の朝行われ、昼ごろに審議者に通達、それから貴族憲兵隊が動き出し始めるのだ。

既に動いているとなると、それは異例中の異例である。

「はい。朝からフォッサ様は取り調べをうけておられます」

「早すぎるな……」

口到手を当て、思案するゼジム。

夜遅くに、王は勿論主要貴族達が集まるとは思えない。

かと言って王の独断もあり得ないのだ。フォッサの進言を聞き入れる事すらあったアグシューゼは、どんな小さな事でも会議をし、多数決を取り、決めるのだ。

それは、ただ単にアグシューゼが一人で責任を取りたくない故の行動だとゼジムは感じていたが、他の者達はそう思わず、部下を信用し、部下の意見を尊重する良き王として敬っている。

それがミリタリア国王アグシューゼの姿であり、他国から忠義王と呼ばれる所以でもあるのだ。

だからこそ、独断は考えられなかった。今まで散々部下達の意見

を聞いてきた上での今回の独断は、周りから見たら気紛れだと思われるかもしれない。

しかし、それはアグシューゼ王本人が許さないはずなのだ。一度決めた事に対して、決して曲げない男なのだ。

「今は、そんな事よりもお互いの身を案じる事が大切ですよ」

タキシムがさりげなくゼジムの背中を押す。歩みの速度が遅くなっていたのだ。

ゼジムは速度を落とす事なく歩いているつもりだったが、思案に気を取られ過ぎていたようだ。

「ああ、そうだな」

少し手を上げ、礼の意を示し、タキシムの手から離れる様に歩みを早くさせた。

「話を戻しますが、新鮮な情報の交換を行うために一日に何回か会った方が良くと思うのですが」

「そうだな。お前の都合のいい場所と時間で良いぞ」

石破師の仕事は誰に監視されるわけでもなく、誰とも行動を共にすることも無い。あくまで忙しくなかった場合の話だが。

「かしこまりました。それでは、私の散歩の時間と、買い付けの時間に合わせていただきますしょう」

タキシムがゼジムのポケットに一枚の紙を忍ばせた。恐らく詳細な時間が書いてあるのだろう。

「執事が買い付けしているのか？」

それよりも、ゼジムが気になっていたのはこの事だった。屋敷には侍女がいたはずだ。通常、料理を作るのも侍女であるから、買い付けは侍女が行って当然なのだ。

「フォッサ様が信頼しているのは私一人でございます。故に、日常生活に動きを持たせる事で、こういう事態になっても怪しまれずに動けるのです」

今、私がここにいるのも日々行っている事です、とタキシムは得意気に言った。

「つまり、朝の散歩はこの時間だと？」

「左様でございます」

次の質問をしようとしたゼジムだったが、ふと前から気配を感じ、口を閉ざした。すると、タキシムが小さな声で「では」と言い残し、ゼジムから離れていった。

話がまだ終わって無かったので、タキシムの急な行動が理解できなかったが、前からくる気配に集中する。

気配の正体は平民の男性だった。

サークレットを着けているゼジムの事は見ただけで貴族とわかるので、男はゼジムとすれ違う時に深く頭を下げた。

見知らぬ顔だったので、手を上げる挨拶のみで終わらず。

しばらくして、後ろの方で会話が聞こえ始めた。聞き覚えのある声だった。

「なるほど……日々の常か」

一見すれば貴族の主人と執事に見えたが、相手が知り合いでは通用しない。

タキシムが急に離れたのはそれが理由だったのだ。

「それにしても徹底しているな」

タキシムの先程の話は真実のようで、制限無くフォッサの右腕として動けるように普段の生活で種をまいているようだ。

フォッサが唯一信頼していると言うのもわからなくもなかった。

満足できる程情報の交換は出来なかったが、恐らく今回は顔合わせで、午後に情報を交換するのだろう。

ゼジムはポケットから一枚の紙切れを取り出す。

そこには午後の待ち合わせる場所、一件の酒場の名前が書いてあった。その下に、夜10時と書いてある。

「これは……やるな」

酒場の名前は月光亭。宿泊もやっている大きな酒場だ。ゼジムもたまに行く事がある。

恐らく、ゼジムがこの酒場に幾度か訪れている事を知っていて、

この場所を指名したのだろう。

自分だけではなく、ゼジムの日常の動きにも気を使っているのだ。もしかしたら、監視されていた事もあるのかもしれない。

「こっちはまだ何もしていないってのによ」

フォッサ側の方が鬼気迫っている状況なのだから当然の事なのだが、それでも先にあれこれ動かれているのは気に入らなかった。

必要以上の恩を受ければ、いずれ対等ではなくなる。対等でなくなれば、無理難題も断る事がなくなるのだ。

フォッサがその目的で先手を打っているわけではない事はわかるのだが、用心するに越したことはない。

フォッサは屋敷から出る事はできない。タキシムも城の中に入り情報収集する事はできないだろう。

城内での情報はゼジムが独占出来ると言う事だ。

「面倒臭いが、しょうがないな」

己や愛する女性達を守るためだ。手を抜いて、後に後悔してしまうのはごめんである。

「よし、行くか」

気持ちを新たに、ゼジムはミリタリア城へ向かった。



？

ミリタリア城は遠い昔からあるとされる古城だ。

度重なる戦で、倒壊の危機もあったが、当時の優秀な石職人達の手によって当時の面影のまま存在している。

それでも、悠久の歴史を持つ城だけに、内装や、城の作りは現代とは少々違う。

謁見の間は左右に石柱が立っていたり、訪れる者達を待たせる客間など無い。今現存している城ではミリタリア城だけである。

だが、それはミリタリア国が敗戦をしていないとも言える。

他の国は、戦争時に倒壊した城もあれば、戦争の傷跡が酷く、新しく建て直した城もある。

ミリタリア城は、そのどちらの危機も跳ね除けて、今も歴史ある姿を見せているのだ。

戦や襲撃等で敗れなかった一番の理由は、他の国と比べて異端者が多いからだ。

だが、それ故に異端者と普通の人間の間に確執が生まれ、今では忌み嫌い合っている。

魔獣と呼ばれる恐るべき力を使う魔物達を倒した事で英雄と称された異端者。彼らが突然、自分達が国を統治すると言った事が発端だった。

個々の能力で優れる異端者と、数で優れる普通の人間の戦争は消耗戦だった。

結局数の利で押し切った人間達が勝利し、ミリタリアは異端者を排除した。

しかし、その後も異端者と言われる特殊な能力を持つ者達が少数ながら生まれてきてしまう。

能力が覚醒するのは15歳前後と、両親が精いっぱい育てて一人前の大人になる時期だけに、異端者だとわかった時の落胆ぶり、

絶望は人間達が多いに苦しめた。

そこで、当時のミリタリアの学者達は過去の書物を漁り、石破師に目を付けた。

異端者の能力は様々で、火を操る者、身体能力を上げる者や物を自在に操る者がいた。

その中で、石破師は単純に気を発する事ができる。異端者としての覚醒は15歳だが、潜在している気

学者達は様々な石破師を集め、実験を繰り返した。異端者自体の数が少なく、その中でも石破師に限定しているので、この実験は何代にもわたって行われていた。

そしてようやく、何百回の実験を繰り返し、石破師の能力が人間と異端者では被害が違ふ事を立証したのだ。

さらに、同じ異端者でも、優れた異端者の方が損傷が少なかった事で、生まれたばかりの赤子にも気があるのなら、見分ける事が可能かもしれないという希望的観測が出た。

しかし、それにはさらなる障害が発生した。

石破師とはその名の通り、石すらも破壊できる程の気を繰り出す事ができる術者である。

より強い力を出す事はできても、限りなく弱い力を出す事ができる術者はいなかったのだ。

そこで、当時のミリタリア王は国に石破師を募集したのだ。

国に忠誠を誓い、赤子を殺さない程の気を出す技術がある者に限り、中流貴族とし、本人と家族の一生を安泰して暮らせることを約束したのだ。

当時、奴隷制度も無かったので、異端者を生んだ親達は、お金すらもらえず、損害しかなかったのだが、この事で民達も希望ができた。

そして、石破師だった異端者は血の滲む修行をし、技術を高めていった。

こうして、石破師は赤子の選別をする選別師としての地位を確立

し、今に至る。

ゼジムは奴隷施設から逃げ出した後、悪行を繰り返していた。生きる為には食べなければいけなく、しかし、働く事ができなかった。人から奪う事しかできなかったのだ。

当時のゼジムは人間達を嫌い、彼らを殺す事を虫を踏み潰す程度にしか思っていなかった。

しかし、その後エンクレスとシェイビイに出会った事で、考えを改め、選別師になる事に決めたのである。

シェイビイの下で厳しい修行の末、ゼジムはミリタリアの選別師試験を受けた。

合格し、晴れて選別師に就任した時、初めてアグシューゼと対面する事ができた。

異端者撲滅を信条としている噂に違わぬ、強い決意を前面に出す王、と言うのがゼジムが最初に感じた印象だった。

玉座に優雅に座りながらも、一分の隙もない。その強い眼差しは、当時のゼジムの震え上がらせた。

異端者としては憎むべき相手なのだが、石破師として国に仕える者としては、威厳あるアグシューゼの姿には畏怖を感じていた。

それから、今に至るまでゼジムがアグシューゼに会う事はそれほどなかったが、アグシューゼは常に威風堂々としていた。

故に、ゼジムは玉座に座るアグシューゼを見た時、我が目を疑った。

城に着き、前日生まれてきた赤子に關しての書類をもらい、フォッサの事や、昨日の事件の情報収集を行おうとしていたのだが、開始早々兵士に呼びとめられたのだ。

王が呼んでいると言う事だったので、情報収集を後回しにして謁見の間に急いだ。

王が座る玉座まで伸びている赤い絨毯が進み、王の前で跪く。

「顔を上げよ」

そう言われて顔を上げ、王を見た。そこに今までの威厳を体現していたかのようなアグシューゼの姿はなかった。

ゼジムを目の前にしているのに、その視線の先はゼジムではなく、虚空を眺めている。

どこか上の空で、心をどこかに置いてきてしまったかのように表情が無い。

初めて見る王の姿に、ゼジムは失礼だと感じながらも視線を逸らす事ができなかった。

「ゼジムよ」

視線を動かさずに王が名を呼ぶ。

「はっ！」

ゼジムは再び頭を下げた。王からの言葉を聞く時にとる臣下の振るまいであるが、ゼジムは胸に広がる動揺のせいでそんな事は忘れてしまっていた。

頭を下げたのは、あの姿の王を見てはいけないと心が警鐘を鳴らしているからだった。

「ザンガのノーンと言う街は知っておるか？」

「存じております」

ノーンはミリタリア東、ザンガ王国領北西に位置する街だ。ミリタリアから街道を17日程歩くとある栄えた街である。

ミリタリアだけではなく、大陸中央北のオーコム国領との国境も近く、様々な国の商人達が立ちよる事で有名だった。

ラルクルス大陸最西に位置するミリタリアはオーコムとザンガとは領土が隣接しているため、友好的な付き合いをしているのだ。

「ノーンの石破師が死んでしまったので、タナに常駐しているバルンをノーンには派遣する事になった」

タナはミリタリアから7日程東の街道を歩くとあるミリタリア領の街である。

ノーンと同じく国境付近にあるのでミリタリア領に住む商人達はミリタリアかタナを拠点に活動している。

バルンはゼジムよりも年上の石破師だ。30歳を超えたのにその技術はゼジムに及ばないが、それでもミリタリア領の中でも上位の技術を持っているのでタナの石破師に任命された術者だ。

「それは困りましたね」

ゼジムは顔を陰しくさせた。

石破師は全ての街や村に派遣出来る程数がない。なんとか主要都市に常駐出来る程の数はいるが、一人でも欠けたら支障が出てしまう。

「そこで、お前をタナに派遣したいのだが、良いか？」

「わっ、私がですか!？」

ゼジムは謁見の間だと言う事を忘れて驚きの声を上げた。

アグシューゼの政治思想の核となるのは民からの絶大なる信頼である。その中でもミリタリア領の全人口の半分を有していると言っても過言ではない、ここミリタリアの民達に対して誠実さを見せる事で絶大な信頼を保っているのだ。

その一旦を担っているのがミリタリアーの石破師であるゼジムだ。どんなに優秀な石破師でも事故が起きる。赤子を殺してしまう事があるのだが、ゼジムは石破師に任命されて5年間一人の死者も出していない優秀な石破師なのだ。

そのゼジムのミリタリアの常駐石破師に据えている事で、民達の信頼を得ている部分もある。

故に、ゼジムの他の街に送るなんて過去に無かったのだ。

ミリタリアに数人の石破師がいた時も、ゼジムのミリタリアから動かず、他の石破師が派遣されていた。

「私がここを離れてもよいのですか？」

「構わぬ。ちょうど優秀な新人石破師が見つかったのだ。彼の力を試す良い機会なのだ」

そうですね、とゼジムの納得したふりをしたが、どう考えても王が言っている事はおかしかった。

もしかしたら、ゼジム以上の石破師なのかもしれないが、それで

もいきなりミリタリアの赤子を選別させるとは思えなかった。

ゼジムですら、最初は辺境の町や村だった。そこから徐々に功績を上げ、ミリタリア常駐まで媚びつけたのだ。

「今日の選別が終り次第、準備をし発つのだ」

「そんなに急いでおられるのですか？」

通常ならばどんなに急ぎでも明日の出発だ。

「バルンを送りはしたが、何が起るかわからん。いつでもお前が行けるようにしておきたいのだ」

「それほどノーンでの選別を重要視しておられるのですか？」

「無論だ。一人の死者も出さずに終われば我が国の石破師がいかにも優秀か知らしめる事ができるし、ザンガに一つ貸しができるわけだが、逆に選別の失敗は我が国の評価を下げる事になり、ザンガへ借りを作る事になる」

「何日間の派遣なのですか？」

バルンも赤子を殺してしまった事があるが、おおよそ100人見て一人殺めてしまうぐらいだ。一日で100人も赤子が生まれる街などラルクルス大陸には無いと断言できる。

それでも死者が出る可能性を示唆しているとすると、かなり長期的に派遣される恐れがあるということだろう。

「ザンガが新しい石破師を派遣するまでだ」

ザンガ王国はザンガ領東より位置している。ノーンまでおおよそ30日程であろう。近くの街に複数の石破師がいればその限りではないが、恐らくどの国も石破師は少ないはずだ。

「その間私もタナへ常駐していなければいけないと言う事ですか？」

「苦勞をかけるが、頼まれてくれぬか？」

（その問いを断れると思っているのか？）

ゼジムは内心悪態をつく。王の命令に逆らえば死刑が目に見えている。今回は命令というよりは頼み事の様だが、それでも断れば王の機嫌を損なう可能性は大にある。

機嫌を損なえば、色々と不都合な事が起きるだろう。今の暮らし

ができるのは今のゼジムの身分があつてこそその話なのだ。

「王の御心のままに」

平穩を望むならば、そう言つしかなかった。

「では、頼むぞ」

アグシューゼはゆっくりと玉座から立ち上がり、裏の自室へと通じる扉を開け、出ていった。

ゼジムは王が消えた後の玉座を恨めしそつに見つめていた。

？

問題は増えるばかりだった。

フォッサの奴隷エレナを匿っている今、ゼジムはミリタリアを離れる事は避けたかったのだが、王の願いという、言外に含まれた断りよのない命令に屈さざるをえなかった。

さらに、王の願いは思わぬところでも効果を表していた。

ゼジムをタナに派遣する話は貴族達から漏れたようで、城にいつまでもいるゼジムに、通りすぎる兵士や貴族達が厳しい視線を浴びせてきたのだ。

結局、満足に情報収集もできずに、城を後にするしかなかった。

家臣達の王への絶対的な忠義による、迅速な情報の伝達がミリタリア国を支えている核となる一つなのだが、今のゼジムには疎ましく感じていた。

空は赤く染まり始めた頃、選別を終えたゼジムは屋敷に戻った。

フォッサの執事であるタキシムとは夜の10時頃に会う事になっている。

食事を取り、湯浴みをするぐらいの時間は残されていた。

急遽決まった派遣。夜ぐらいいはゆつくり過ごす事にした。

その旨はアグシューゼの側近にも話を通してある。

旅と言えば通常夜は動かずに野営をとるのだが、ゼジムは屋敷で夜休む代わりに夜出立し、休まずに歩くと伝えたのだ。

そうすれば、タナへ到着する日は変わる事はない。側近も不満そうにしていたが、却下することもできず、ゼジムの希望通りに進める事になった。

ゼジムは屋敷に戻り女性達を集め、派遣の話をした。

しばらく会えなくなり、さらに今日も急がなくてはいけないので、構ってやる事ができない事を謝ったが、女性達は納得せず、よってたかってゼジムに詰め寄っていた。



「ゼジちゃん、どういう事なの!？」

「ゼジム様、最大で30日も屋敷を空けるなんて本気で言っているのですか？」

「そんなに放っておくなら浮気されても文句は言えないよね」

ティナが、トウレネが、カーナが好き勝手に喚いている。

「俺が決めた事じゃないから」

反論の一つでも言ってやろうかと思っていたのだが、予想以上に文句を言われ、ゼジムは彼女達を宥めるしか選択できなかった。

「ねえ、別に誰かが見送りに来るわけじゃないのよねえ？」

ひとしきり文句を言い、幾らか収まってきた時、騒ぎから一步離れた所から、静かな、それでいてどこか人をからかうような声があった。ウエディだ。

「まあ、そうだが……」

答えたゼジムは質問の意味が分からず、怪訝な表情を浮かべた。

「じゃあ、私達が一緒に行っても誰もわからないってことだよねえ？」

ウエディはわざと声を少し張り上げ、にやりと笑ってゼジムに片目をつぶってみせた。

「はっ!？」

ゼジムの驚きを余所に、静かになった女性達が一齐に騒ぎ始める。

「そっか! その手があったね!」

「何着ていこうか悩むわね」

「タナに行くのは初めてだわ。楽しみ!」

女性達は次々とウエディの言葉に賛同していく。

しかし、さすがにゼジムはウエディの言葉を肯定するわけにはいかなかった。

国の者に気付かれたらとんでもない事態になりかねない。

「いやいや、門番がいるから」

「そんな事はフードでも被っておけばやり過ごせるのでは? 従者だと言えば良いのですから。それにロンドさん以外は見破られるこ

ともないので大丈夫だと思いますけど？」

ゼジムの反論は言い終わるよりも早く、もう一人の傍観者　レイサンにあっさりと論破された。

「そうね！　それなら大丈夫ね。しかもロンドは術でタナに行けるわ。ロンドだけはフードを被らなきゃいけないけど」

「私はそんな事にしないです。タナかあ。前に移動水を作りに行った時以来ですわ」

レイサンの言葉によって、女性達の同行は決定的となった。

彼女達は、子供達が初めて祭に行く時の様な笑顔を浮かべて、タナの街で何をしようか話し合い始めた。

ゼジムが声をかける事を躊躇うぐらい、彼女達からは期待と、それを邪魔する者を拒む雰囲気漂っていた。

「レイサン……」

諦めたゼジムは恨めしそうにレイサンを見た。

別に同行が嫌なわけではない。が、極力危険な目に合わせたくないのだ。

ゼジムは当初、タナに到着してからロンドの術で女性達を呼ぶつもりだった。

タナには仕事をしに行くわけで、反動の解消をしなければいけないからだ。

その事についてお願いするつもりだったのだが、事態はあらぬ所へ向かっている。

「道中は危険なんだぞ！？」

ゼジムは焼け石に水程度の脅しを叫んだ。賑やかだった広場に沈黙が訪れた。

ゼジムは効果がないと決めつけていたので、この状況に内心驚いていたが、まだ彼女達を説得できるかもしれないと微かな希望が生まれた事を感じ、咳払いをして後を続けようと口を開こうとした。

しかし、一人の女性が一歩前に出た事で、ゼジムは自分の考えがまったく見当違いだったことを痛感する。

「では何のために私達は術の修行をしてきたのですか？」

「またしてもレイサンだった。」

ゼジムよりも頭一つ以上小さいレイサンが、頑固にそそり立つ石壁のように感じられた。

ゼジムの知らない内に、交渉事や議論はレイサンに任せる事になった様だ。

他の女性達はレイサンに前を譲り、二人のやり取りを見守っている。

「うっ、レイサンはまだまだ修行が足りないだろう？」

苦し紛れに反論するが、それが何の意味も為さないのは誰が見ても明らかだった。

「では私以外は大丈夫と言う事ですね？」

「お前達には普通の生活を」

「この屋敷のみでの生活が普通の生活には当てはまるとは思えませんが。それに、皆さんはあなたと過ごせる時間が最近少なくなった事を不満に思っている。この状態で30日も放っておくのは不味いと思いますけど」

「その埋め合わせは」

「無理ですよ。だって日々溜まっていく不満すら解消できないのに、30日前後の不満が追加されたら、どうやって解消させるのですか？」

「どうやっても勝てそうに無かった。レイサンは日々進化していた。彼女に口喧嘩で勝つことは一生ないだろう。」

ゼジムは大きく溜息をついた。まさか、屋敷に戻ってからさらに心身が疲労するとは思ってもいなかった。

「わかった。わかったよ」

「うなだれるゼジムと控えめに勝ち誇った顔をするレイサン。どちらが屋敷の主人かわからなかった。」

「ただし、付き添いは3人までだ」

それ以上は気が回らないと判断した。旅にしろ、タナでの買い物

にしろ、自由に動く女性が多いので、目を離すわけにはいかないのだ。

「エレナもいるし、全員連れていくわけにはいかないからな」

しかし、そんな事を言ったら何を言われるかわからないので、エレナの事を出して納得させようとする。

しかし

「大丈夫ですよ。タナにさえつけば移動水がありますから。では、同行したい人を決めましょうか」

これ以上言葉を出すことは不可能だった。

呆然と立ち尽くすゼジムを余所に女性達は大いに盛り上がった。た。

彼女達の眼には反対するゼジムの事など映っていないだろう。賑やかな場所にいるのに、どうしようもないほどの孤独感を感じているのは除け者にされているからだ。

ゼジムが彼女たちの同行を認める趣旨の発言でなければ、決して彼女達の耳に入らない事を悟る。

それもこれも、レイサンが中心となってやっていることだった。

彼女達がレイサンを仲間として認めているようで嬉しかったが、今後の事が不安にもなった。

どんな些細な口喧嘩にもレイサンを出されてしまえば、負けてしまう。

ゼジムは、思い思いに話をしている女性達を眺めた。

今までだったら、ロンドやトゥレネはゼジムに味方についていた。しかし、それもゼジムに対する遠慮だったのかもしれない。

嘘偽りないレイサンを見て、彼女達も正直に自分の意見をぶつけることにしたのかもしれない。

そうだとしたら、ゼジムとしても嬉しい限りだ。

こちらが一切壁を作らずに近づいても、相手が壁を作らないとは限らない。

もし、レイサンが来たことにより、その壁が崩れたのならば、こ

んなに嬉しい事はない。

ゼジムは、もう一度彼女達を見た。

いつもと同じようで、今までにない、気持ちを解放している女性達の姿に見えた。

？

夜も更け、ゼジムはタキシムに会うために酒場へ向かった。中に入り、さつと周囲を見たが、タキシムの姿は無かった。

まだ来ていないのかと思い、ゼジムはとりあえずカウンター席に腰を下ろす。

「やあ選別師様。久しぶりじゃねえか」

「その呼び方はやめてくれよ」

この酒場の主人である男がカウンター越しから声をかけてきた。年に数回訪れただけだったのだが、この男の記憶力は人よりも優れているらしく、半年程開けても、以前話した事を覚えていた時にはゼジムも驚きが隠せなかった。

話を聞くと、一見さんですら覚えていいるらしい。

酒場の主人にはもったいない特技だと、ゼジムは感じていた。

ゼジムはタキシムが来るまで何も頼まないのも悪いと思い、酒場の主人に酒を頼んだ。

ゼジムの席の周りに人はいなく、大半がテーブル席で仲間達と騒いでいる。

繁盛していない酒場ならまだしも、この酒場に一人や二人で来る者はあまりいなかった。

「しかし、あんたとタキシムさんが知り合いだとはね」

頼んだ酒をゼジムの前に置く時、小さい声で主人が言った。

「あんたも……いや、一度会ったら忘れないんだもんな」

声に出かけた疑問は言い終わる前に解消した。主人の特技を思い出したからだ。

「おうよ。まあそれが理由ではないんだけどな」

「どういう事だ？」

「あの人とは昔からの付き合いでな」

「友人なのか？」

もし、そうならばこの酒場を待ち合わせる場所に選んだ理由がわかる。

昔からの馴染みが主人の酒場なら、秘密の話をする事も可能だ。

「それも違うな。なんというか、元同業」

「くだらない話はそれで終わりにしていただけますか？」

不意に後ろから声がした。ゼジムは振り返ろうとしたが、それよりも早くその声の主はゼジムの隣の席に座る。

タキシムだ。

「おおっと。やっときたか」

主人が気まずそうにしている。二人の様子を見るに確かに友人とは思えない。二人の関係は年齢差による上下関係以外の何かがある様に窺えた。

「遅くなりました」

タキシムはゼジムに丁重に一礼した。

「いや、俺も大して待っていない」

「いえ、私が先に来ていれば、その男からくだらない話を聞くこともなかったでしょうから」

タキシムはそう言つて、主人をじろりと見る。主人は居心地が悪くなったのか、奥の厨房へ向かおうとしていたが、不穏な気配を察知したのか、足を止め、半笑いで二人を見ていた。

「そう言ふなよ。くだらない話でもないさ。同業者だったんだろ？」

昔は何をやっていたんだ？」

ゼジムは面白半分タキシムにたずねた。タキシムは嘆息した後、もう一度主人を睨んだが、観念したのか、もう一度溜息をつく。

「私とこの男は昔、裏の情報屋として生きていたのです」

「闇蜘蛛と言う事か！？」

ゼジムは思わず驚きの声を上げた。

裏の世界の情報、例えば、とある店の旦那の隠し事や、果ては貴族の密談まで、金さえ積みめば何でもこなすと言われている裏稼業の者達だ。

以前は少人数で徒党を組んでいたと聞くが、今はギルドを作り、裏世界を掌握しているとも言われている。

もし、仮に闇蜘蛛の者達がゼジムの素性を暴く依頼を受けたとしたら、女性達の正体を隠す事は相当難しいだろう。

「その名は好きではないんですよ……」

闇蜘蛛の由来は、その情報網である。まるで街中に蜘蛛の糸を張り巡らすかのように、平民達の世間話さえも知っているとされている。

その情報網は一人だけでも多大なのに、闇蜘蛛達で共有する事で、その情報量はとても計り知れないと言われている。最も、仲間に情報を売るのであって、慈善で協力するわけでもない。

闇蜘蛛達は利益を何よりも優先するので、莫大な利益を得るために、多少の損益は気にしないのだ。

さらに、彼らは武術も達者で、並の兵士では太刀打ちできないと聞く。

恐らくタキシムも老いたとはいえ、相当の腕前なのだろう。そう思うと、今朝の事も納得できた。

「驚いたな。まさか闇蜘蛛の中にまっとうな職につく者がいようとは」

彼らがこなす仕事はどんなに安い依頼でも、平民の一カ月分の生活費に上ると言う。

裏世界で名の売れた闇蜘蛛であれば、その後一生働かなくても生きていけるだろう。

「ゼジム殿、そんな話をしにきたものではありませんよ」

「そうだったな」

表世界とはかけ離れている闇蜘蛛の話が聞きたかったが、そんな話をしていられる程時間が無い事を思い出し、お互いが持っている情報交換を始めた。

話が変わったやいなや、酒場の主人は離れていき、他の客の相手をしていた。



危ない話と言うのは、時には聞いただけで己を危険にさらす事もある。元闇蜘蛛の主人は危ない匂いを察知して離れたのだろう。

足を洗っても、そういう勘と言うものは衰えない物なのかと感心しつつ、ゼジムは今日起きた出来事をタキシムに話した。

タキシムの情報は主にフォッサの状況と貴族憲兵隊の動向だ。さらに、まだ貴族憲兵隊が来て一日である。

いくら貴族憲兵隊と言えども、最初から無理をしようとはしないので、タキシムからの情報に目立った事は無かった。

故に、二人はゼジムの情報について話し合っていた。

「王の様子が変わったのですか」

タキシムは信じられないと言った様子だ。無理もなかった。貴族達も民達も、厳格なアグシューゼしか見た事がないのだ。

ゼジムの話の様な、気の抜けた様を見せる事など、ミリタリア王アグシューゼを知る者からしたら信じられないのも当然の事だ。

「嘘の様な話だが、本当の話だぜ？」

「ええ、信じていないわけではありませんが……」

タキシムは言葉を続けずに黙ってしまう。過去にその様なアグシューゼの噂を耳にしたか思いだそうとしているのかもしれない。

ゼジムは、タキシムの結論が出るまで、ちびちびと酒をあおっていた。

「やはり、わかりません」

ゼジムの酒がちょうど空になった時だった。ようやくタキシムの口が開いた。

「あんたでも記憶にないか」

ゼジムはがっかりしたように大きく溜息を吐いたが、期待はしていなかった。

それほどまでに、アグシューゼという男がそのような姿で表に出た事も、貴族達に見せた事もないのだ。

「何か、善からぬ事が起きているのかもしれませんが」  
ゼジムもその言葉に頷く。

「そうかもしれないな。かと言って、そうではないかもしれない。情報が少なすぎて、今結論を出す事はできないな」

この話をこれ以上話しても得る物はない。ゼジムはそう考えていた。

「そうでしょうか？」

しかし、タキシムは違ったようだ。

「どういう事だ？」

「アグシューゼ王の異変、貴族憲兵隊の動き、ゼジム殿のタナへの派遣。この全てに何らかの意図が見える気がします」

タキシムの言葉に、ゼジムはまた思考を巡らせたが、答えは出ない。

「どんな意図があるっていうんだ？」

「わかりません。今は……ですが」

「それは、調べれば何かわかるかもしれないと言う事か？」

タキシムの言外の言葉に気付き、ゼジムは尋ねたが、タキシムからすぐに答えは返ってこなかった。

元闇蜘蛛の力を持つてしても、ミリタリア王アグシューゼの情報を得るのは困難なのだろう。

「わかりません。が、関係している気がします。あなたが派遣されている間、アグシューゼ王の事も調べてみましょう」

やがて、タキシムが覚悟を決めた様子で言った。

「できるのか？」

「期待はしないで欲しいのですが、やれるだけやってみようと思います。フォッサ様にも関わる事でもありますし」

「すまないが、願います」

ゼジムは頭を下げた。夜も大分更けていた。話はこれで終わりの様に思えた。

明日は早く出なければいけないので、話が終ったのならすぐにも帰りたいのだ。

「しかし、数十日も連絡が取れないとなると、困りますね」

だが、まだ話を終わっておらず、ゼジムは腰をあげようとしていたが、仕方なく再度腰を下ろした。

「そうは言っても仕方がないだろ。手紙でも送ってくれるのか？」  
今更そんな話をしなくても、と内心愚痴を言う。しかし、タキシムの言葉は正しかったので、表情に出す事はしない。

「手紙では遅いでしょう」

タキシムはあっさりと却下した。

「じゃあ、他にあるのかよ？」

「水操師がいますよね？ その女性は今回の旅に？」

「ああ……って！？」

タキシムがあまりにも当たり前のようにその名を出したので、ゼジムは思わず答えそうになってしまった。

「過去にそういう稼業だと言ったはずですよ？」

「依頼があれば異端者でも調べ上げるといふ事か」

ゼジムは、タキシムの底の知らない情報網に舌を巻いた。

異端者ですら、自分の能力しか知らない者も多い。人間にいたっては、異端者は何やら不可思議な術を使うぐらいにしか思っていない者しかいないと言ってもいい。

ゼジムも、他の能力に関しては特に興味が無い。知っているのは屋敷の女性達の能力と、シェイビイの能力ぐらいだ。

前日の男の豪気師の能力など一切知らなかったが、それで別に困る事もないし、それが当たり前だと思っている。

タキシムにとっても、同じ事が言える。タキシムが異端者と戦いになる事なんて一生に一回起きたら凄いくらいである。

それに、異端者を調べようとしても、それは困難を極めるだろう。異端者は自分達の力が人間に見られる事を嫌う。普通の人間として暮らしている異端者がほとんどだからだ。

だから、必然的に異端者の能力を調べるには辺境のミリタリア王の威光が届かない程の村にまで赴くしかない。

例外として、人間の身近にいる石破師の能力を調べる事は他の能

力より探る事は簡単ではあるが、水操師と巡り合う事は稀である。

「そう言う事です」

タキシムはあっさりと言った。もし、異端者を調べる事ですら、その口ぶり通りなのであれば、タキシムは相当な腕前なのかもしれない。

ゼジムは万が一の事を考えて、屋敷の女性達に気をつけるように言っておくことにした。

しかし、水操師のロンドの存在すら気付かれている。効果は無いどころか、既に全ての女性の能力を把握しているかもしれない。

もしそうなら、大きな弱みを握られた事になる。そして、ゼジムは絶対にフォッサ達を裏切る事ができない。

裏切ったとわかれればすぐに王に報告され、ゼジムも含め、処刑されるだろう。

（やはり信用できないか……）

人間を信じてみても良いかもしれないとは思っていたが、彼らはゼジムの弱みを盾に協力を要請している様に感じられる。

弱みを小出しに明かしてくるのも、意図があるのかもしれないかった。

「私達はあなたの弱みを握ったなどと考えてはおりません」

余程表情に出ていたのか、タキシムにはゼジムの胸中がわかってる様だった。

「ただ、あなたと同じで、私達もあなたが信用に足る人物か調べさせてもらっただけです」

「で、その結論は？」

勝手に調べられていたのは腹立たしかったが、ゼジムはそれよりもタキシムの次の言葉に集中した。

ここでタキシムが否と言えば、強力関係は解消、タキシムは恐らくゼジムは脅迫し、従わせようとするだろう。

そうなるのなら、タキシムが答えを言ったら、強力関係を解消するつもりだ。

命令に屈してまで生き残ろうとは思わない。

もし、ミリタリアを追われるのならば、他の国に行けばいい。

それに、例え追手を差し向けられても、女性達を守り通せる自身があるし、たかだか人間ごときに遅れをとることもない。

ここで手にした富、地位は魅力的なものであるが、ある程度の自由があればこそだ。

女性達に文句を言われる可能性があるが、それも一時的な事だ。

また、別の国で安定した生活ができるようになれば、フォッサに従って人形の様に操られながら生きるゼジムを見るよりよっぽどマシだとわかるだろう。

「信用する、とフォッサ様は言いました」

「何故だ？」

隠れて調べていた男に、ただ信用すると言われても納得はできなかった。

「異端者……だからではないでしょうか？」

「異端者だから？」

ゼジムは怪訝な顔でタキシムを見た。タキシムはどこか嬉しそうだ。

「エレナ様を殺そうとも思わず、フォッサ様に同情してくれた。そんな人はあなたぐらいでしょう？」

タキシムの言う事は最もだった。ゼジム以外の、人間ならば早々にエレナを差し出すだろうし、他の石破師でもフォッサに協力しようとは思わないだろう。

異端者が人間を心から信用する事はないだろう。その逆もしかり。それがわかっていからこそ、お互い歩み寄ろうとは思えない。

ゼジムも、脅迫されかねない特殊な状況だったから覚悟を決めただけで、関わりなくても良いのならば、エレナを預かるうとはおもわなかっただろう。

「確かにそうかもな」

「でしょう？ それだけではいけませんか？」

タキシムの瞳を真つすぐ見つめるゼジム。その瞳に揺らぎは無く、強い意志が宿っているのがわかる。

「あー……！」 わかった。信じよう」

「それは良かった」

しかし、己の眼力の無さを嘆いていたゼジムは気付いていなかった。

「それでは連絡手段ですが……」

ゼジムは思いだし様に、あつと呟くと、ふてくされながら言った。

「寄れるか？」

ゼジムの態度を気にもせず、タキシムはそう返答した。

再び、ゼジムは席を立った。今度はタキシムも止めなかった。

「わかりました。私はもう少しいなければいけない（、、、、、、）」

ゼジムはタキシムの言外の意味をわかっていたので、何も言わずに酒場を後にした。

宿泊している者達も眠りについているだろう。

そんな中、カウンター席に並んで座る男達がいた。

タキシムと酒場の主人である。

二人は無言で酒を飲んでいる。

「なあ、あの選別師さんはどうなんだ？」

それが当たり前であるかの様な長い沈黙を破ったのは酒場の主人だった。

「不器用な方だと思いますよ」

タキシムは主人を見ずに言った。

「不器用！？ なんでも大勢の女を囲っていると聞いているがな」

ゼジムが街を歩く時は必ずと言って良い程、隣に女性の存在がある。

毎回同じ女性であれば問題は無いが、日によって女性が違っているので、多数の女性を囲っていると、街では噂になっている。

器量が良い女性ばかりであればなおさらである。

ゼジムの知らない所で、女性達は街の男達の話題に上っている事さえある。

ゼジムを妬んでいる者も少なくはない。

酒場の主人に愚痴を零す男も後を絶たないので、主人もゼジムが美女達に囲まれている生活をしている事は知っていた。

「そうですね。不器用だが器用に振る舞おうとする、が正しいでしょうか」

タキシムはついさっきまで話していた男の顔を思い浮かべていた。あの時、ゼジムはタキシムの真意を見抜こうとした。が、それはうまくいかずに終わった。

本人も自覚しているのだろう。自身に腹が立ち、表情に出してしまっていた。

彼の若さに内心苦笑しつつ、助言をしようかと思ったが、それはしなかった。

「闇蜘蛛には向いてねえな」

主人がおどける。タキシムは苦笑した。

この主人は足を洗ったつもりのようだが、未練があるようだ。無理もない。タキシムとは違い、彼は当時の恋人に子供ができた事で足を洗わざるを得なくなったのだから。

しかし、タキシムはそれで良かったと思っている。

闇蜘蛛という稼業に染まる前に抜け出せたのだから。染まっていれば、彼は子供など切り捨て、今も一人で生きているだろう。

タキシムと主人は同じ時期に足を洗った。

守る物ができた主人とは違い、タキシムはある男との再会だった。当時の事を思い出すと、今でも微笑んでしまう。

「私の勝手な意見ですが、彼にはフォッサ様のように人を信じる気持ちを忘れないでほしい」

異端者は人間に対してだけでなく、同じ異端者相手にさえ気を許す事は無い。少なくとも、今までタキシムが出会った異端者は皆そうだった。

だから、ゼジムを調べて驚いた。彼の周りにいる女性達が皆異端者なのだから。

人を愛し、それを守るために己の体を張る事ができる。

それが、タキシムが、フォッサがゼジムを信用した理由だった。

「気にいったってことかい？」

主人の目が見開かれた。

「そう言う事です」

タキシムはにつこりと微笑んだ。しかし、すぐに険しくなる。

「だからこそ、助言を与えなかったのです。彼には自分で気づいてほしい。今のまま生きればいい事に」

「だが、裏切れば容赦はしない、と」

主人がタキシムの言葉に付け加える。

「正解です」

「随分厳しくするんだな」

主人が気の毒そうにしている。



「失礼な。信じているからこそです」

主人は、出会ったばかりの男に対してやりすぎなのではないか、  
と思ったが口にはしなかった。

タキシムが珍しく楽しそうにしているからだ。

「あのような異端者がいるとはね……」

嬉しそうに呟くタキシム。

今宵の酒はとても美味かった。

？

天には雲ひとつない。濃紺の空に星達が競い合う様に輝き、月明かりが街道を照らしている。

地では小さな虫達が大合唱するように鳴いている。耳を癒してくれるような優しい響きだ。

魔物達も心地よく寝ているのだろう。

辺りに気配はない。

草一つない整備された街道を歩く一行がいる。

ゼジムとレイサン、ロンドとウェディである。

ゼジムを除いた屋敷の面々で話し合った結果、三人の女性が旅に同行する事になった。

初めて街からでるレイサンと、移動水が使えるロンドは固定で、残りの一枠を争った結果、ウェディに決まった。

レイサンは初めて見る広大な景色に感嘆の声を上げていた。

奴隷商に連れられていた時も外を経験しているだろうが、景色を見る事は許されない。

星も街で見た時より綺麗に見えた。開放的な気分だからだろう。

旅は終始静かになる事は無かった。

レイサンが事あるごとに質問をするからだ。

ただ歩くだけではつまらないので、皆が皆、普段とは違い、レイサンの質問に良く答えていた。

しかし、疲れが溜まるにつれ、億劫になっていく。

それでもレイサンの質問は止まらない。

ロンドとウェディはいつしかレイサンから離れていて、ゼジムが一人で相手をする事になってしまっていた。

「あれはなんですか？」

今日だけで何回その言葉を聞いたのか数えていたが、もうその気力もなかった。

「あれは、ツチアラシだ。その名の通り土を荒らす悪戯好きな獣だ。落とし穴を作り、罠に落ちた獣を喰らうのさ」

正確な情報を言わなければさらなる質問を呼ぶ事になる。この一点に関しては、ゼジムも彼女が求む答えを出せるようになっていた。「そうなのですか」

そう言ってレイサンは小さな手帳に書き始める。今日だけで三冊目だ。

「もうそろそろわからない事はなくなるんじゃないのか？」

ゼジムは答えに期待していなかったが、言いたくなってしまった。今のレイサンは一般人が知らない事までも知っているのだ。

「まだまだ世界は広いですから」

予想通り、レイサンはまだ満足していない。

ゼジムは溜息を吐いて振り返る。

後ろにはロンドとウェデイが快適そうに歩いている。

ゼジムの視線を感じているはずなのだが、気付かないフリをしている。

「あれはなんですか？」

レイサンがまた何か気になった様だ。

恨めしそうにロンド達を見てから、素早く表情を変え、レイサンに答えるのだった。

整備された街道に魔物が出る事は少ない。

魔物がない所を狙って作られたからである。

それでも運が悪いと一日一回程魔物と出会ってしまうのだが、今回は奇跡的に魔物の姿を見る事はなかった。

ゼジムは、レイサンの質問攻めが魔物すらも遠ざけたと考えている。

一日目は夜通し歩き、寝ずに次の日も歩くという厳しいものだったが、それ以降は昼歩き、夜休んだ。

そうして七日が経ち、ゼジム達一行はタナにたどり着いた。

「うーん！　ようやく着いた」

街に着いたゼジムは、昼間にも関わらず、女性達に有無を言わせないまま宿に向かった。

疲れている事もあったが、女性達の勝手な行動をすると予期しての事だ。

しかし、ゼジムの思惑と反して、女性達も宿からすぐ出かけはしなかった。

何でも、湯浴みをしたり、色々とする事があるそうだ。

旅の間は、湖でも見つけなくては体を洗う事すらできなかったので無理もない。

ロンドの能力を使えば、屋敷に戻る事もできるのだが、レイサンがそれを断った。

普通の人の旅を体験したかったと言っていた。

そんなわけで、来て早々振り回される事が無く、ゼジムもベッドに横たわる事ができている。

「いつもの旅以上に疲れた気がするぜ」

人と話すと言う事は旅に欠かせない物だと思っていた。

代わり映えしない景色を見ているだけではすぐに飽きてしまう。

人と話す事によって旅は楽しいものになるのだ。

しかし、それに例外がある事をゼジムは初めて知った。

何事もやり過ぎは良くないと言う事を。

「さて、と」

ゼジムはおもむろにベッドから立ち上がった。

旅装束を脱ぎ捨て、領主に会うための正装に身を包む。

街に着いた日に領主の屋敷に出向くのはミリタリア国では当然となっている。

いくら疲れていようと、怠れば評判が悪くなる。

気だるい体に鞭を打ち、ゼジムは領主の屋敷へと向かって行ったのだった。

レイサン達は三人部屋を借りていた。ゼジムは別の部屋にいらしいが、先程隣の部屋から物音が聞こえた。

「領主の所へ挨拶へ行つたのよ」

ロンドがそう言つた事で、しばらくでかけられないとわかり、順に湯浴みをする事になった。

タナという街は旅人や商人が多いそうで、昼間から湯浴みをする者も少なくないようだ。

レイサンが一番先に入り、次にロンド、最後にウェディが今向かつた所だ。

「良いお湯だつたわね」

帰つてきたロンドが至福の一息を放っている。彼女自身が水を操るからなのか、ロンドは湯浴みが好きなのだ。

「そうですね。ちょっと狭かつたけど」

それに大してレイサンは正直な感想を言つた。ロンドが困つた様な顔をする。

「私達の屋敷が特別なのよ？ 平民なんてお風呂に入る事ですら数日に一回なんだから」

確かに、レイサンは湯浴みをする時に宿の主人にお金を払っている。ロンドに持たされたからだ。

湯浴みをするのにお金がかかる事を知らなかったレイサンはその事を不思議に思っていたのだが、ようやく謎が解けた。

「知りませんでした。奴隷施設でも、毎日入っていたから」

淡々というレイサンにロンドは顔を膨らませ、レイサンの頬をつねつた。

レイサンは目を大きくしてロンドを見つめた。

「過去を忘れなさいとは言わないけど、口に出すのはやめなさい」初めて見るロンドだった。普段、怒られる事があるが（主にティナのせいで）その時はふざけている様な、冗談の様な雰囲気がある。しかし、今日の前にいるロンドは違う。本気で怒っているのだ。

「ご……ごめんなさい」

レイサンは素直に謝った。ロンドの急変ぶりに呆けてしまい、何故怒られたのか考える事すらせずに。

レイサンの謝罪を受けたロンドは微笑みながらレイサンの右手で頬に触れた。お風呂からでたばかりのロンドの手からは良い香りがした。

「今は前だけを見ていなさい。今、過去の事を思い出すのは苦しいけど、前に進んで行けばいずれ気にならなくなるわ」

「はい……」

レイサンはロンドがなぜそこまで怒ってくれたのかわからなかったが、それが心配しての事だと言う事は感じる事ができていた。いつもなら「なんで口にしたってはいけないのですか？」と聞いていただろうが、ロンドの本気の顔に、呆然としてしまった事で、機会を失った。

これは、レイサンがその場の雰囲気や相手を見て言葉を選ぶ、または黙る事を覚えた瞬間であつたが、レイサンが自覚するのはもう少し先である。

「どうしたの？」

不意にウエディの声がした。二人は弾かれた様に距離を開けた。湯浴みを終えたウエディは薄布の真っ赤なローブを羽織っていた。「ゼジムに相手されるまで我慢できなくてレイサンでもいたただこうとしたのかしら？」

ウエディは意地悪な笑みを浮かべてロンドを見ている。

「そつ、そんな事はしてません！」

慌てて応えるロンドは、事情を知っているレイサンから見ても怪しく見えた。

ウエディは最初に屋敷に住むようになった女性で、女性の中で最年長（21歳）であり、女性の中で一番の権力者でもある。

普段はひょうひょうとしていて、レイサンもウエディと話す機会が無いどころか、会う事も稀であつた。

屋敷の中から出られないので、どこかにいるのはわかっていただが、屋敷のどこを探しても彼女は見つからなかった。

それは、レイサンの先輩である Rond 達も同じ様で、彼女の行動を把握している女性はいないのだ。

ウエディが気が向いた時にだけ、風のように現れて、後輩をからかい、また風のようになくなる。

掴みどころが無いのがウエディと言う女性なのだ。

「本当かな…… Rond ってこう見えて女の子も好きだからね。自分好みにしたがるというか」

からかう対象を変えて、今度はレイサンの耳元で囁いた。

「確かに……私の服も全部 Rond さんが選んでくれました」

レイサンは思いたす様に首肯した。

「あなた達はっ……」

Rond してはよかれと思ってやった事である。ウエディが言っている意図は決してない。

しかし、レイサンは根が真面目である。ウエディの匠みな話術により、信じてしまっている。

「ほらっ、やっぱ Rond は女の子好きよ」

レイサンの性格を知ってか知らずか、ウエディが追い打ちをかける。

「止めてください。本当に」

Rond はいまだかつてない程の鋭い視線をウエディに浴びせた。

「うっ、冗談でしょ」

ただならぬ気配を察知したのか、ウエディはあっさり折れた。

Rond はちらりとレイサンを見た。ウエディの一言で冗談だと気付いたのか、胸を撫で下ろしていた。

「よかったです。Rond さんの気持ちは嬉しいのですが、私は女性と付き合う気はありませんし」

その言葉にウエディは呆然とした。Rond はウエディに近づき、小さな声で言った。

「彼女は物凄く真面目なんです。私達の様にかからうと、ウェディさんが痛い目見ますよ」

「確かに、ちよつと予測できないねえ」

レイサンは二人が何の話をしている気になり、二人に視線を送ったが、二人は作り笑いを浮かべるだけだった。

「一体何を話しているんですか？」

「それより、準備はいいかい？」

質問に質問で返され、レイサンは若干ムツとしたが、今度はウェディが言った事が気になってしまった。

「準備って何ですか？」

そう言つてウェディとロンドを交互に見る。ウェディは何か企んでいる様な笑みを浮かべているが、ロンドは何も聞かされていないのか、ウェディを見詰めて怪訝な表情を浮かべている。

「外に出る準備よ」

きつぱりと言い放つウェディ。

彼女が湯浴みをしたのに、ローブを羽織っている疑問がようやく解消された。

しかし、彼女が言った事がゼジムから強く言われている事に反しているのは、まだ来て間もないレイサンですら知っている事だ。

「ゼジムさんがいないから無理でしょう？」

「そうですね。それに折角湯浴みをしたのに、またあのフードを被りたくないです」

レイサンの至極真つ当な言葉に、ロンドも続く。ロンドは旅の間、ずっと被っていたフードを嫌そうに見ている。

「そんなのまた湯浴みすればいいだけの話じゃないかい。早くしないと置いていっちゃうからねえ」

二人の反論は風のようにさらりとかわされてしまった。ウィディは二人に流し目を送り、部屋から出て行く。

残された二人は優雅に歩いていくウェディを呆然と見送るしかできなかった。



「どうするんですか？」

ウェデイが視界から消えてしばらくして、レイサンはロンドに恐る恐る訪ねた。

ウェデイはゼジムの言い付けを破り、外へ出てしまったのだ。

レイサンの脳裏に先日遭遇した恐ろしき光景が浮かんだ。

もし、ウェデイが異端者だと気付かれてしまったら……。

そう思うと、胸に嫌なざわめきが蔓延る。

「どうしよう……」

ロンドはただ慌てるだけだった。普段はおっとりとしているロンドだったが、さすがにこの状況では普段の様に振る舞う事ができない。

「追うしかないではありませんか？」

レイサンは意を決してロンドに言った。先日の出来事を思い出すと、言葉を取り消したくなるが、ウェデイの事を思い、その思いを打ち消す。

「でも……」

ロンドは困惑した顔を浮かべるだけで、動こうとはしない。

レイサンは、彼女が女性達の中でも、よりゼジムを愛している様に見えていた。

それゆえ、決心出来ない様に思えた。

「私は、異端者を前にした人間達を見た事があります。あれは、本当に怖かった。私達異端者を殺す事に何の躊躇いもない……。ウェデイさんが殺されてしまうかもしれないんですよ？」

レイサンは必死にロンドを説得した。ロンドは息を止めているかのように苦しそうな顔をして、目をきつく瞑っていた。

彼女の心の中で、ゼジムの言い付けと、ウェデイを心配する気持ちがせめぎ合っているのだろう。

レイサンは逸る鼓動を抑え、静かにロンドの葛藤の決着を見守った。

「わかった。行きましょう」

僅かな沈黙の後、ロンドの目が見開かれた。決意のこもった、強い眼差しだった。

「行きましょう」

ロンドの結論はレイサンにとって嬉しい事だったが、手放して喜んでいる暇は無かった。

ウェディを一刻も早く見つけ出さなければいけないのだ。

レイサンは手早く支度を済ませ、ロンドも先程は嫌がっていたフードを躊躇い無く被った。

ロンドがレイサンに目配せをした。

レイサンは頷くと、勢いよく部屋を出たのだった。

？

タナの街はミリタリアの最東に位置する都市だ。

各国の商人や貴族等が一番最初に訪れるミリタリア領の街という事もあって、その優雅さはミリタリア城下町に匹敵する程だ。

ミリタリアと違う所は、中央北のオーコム、中央南のザンガから来た商人の割合が多い事である。

国が違えば服装も違う。見慣れない服を着た商人達が露天を開き、自国の特産物や装飾品を売っている。

食べ物匂いも当然ミリタリア城下町とは違う。

黄色い皮に包まれたバーナの実は、天候が安定していて他国よりも暖かいオーコムでしか採れない物だし、鮮度が命のザンガウシのミルクはミリタリアではタナでしか買えない。

特産物を躍起になって買おうとしているミリタリアの商人や、タナの民達が店に群がっている様を、ウエディはしげしげと眺めていた。

「どれが良いかねえ」

どの店が良い物売っているか見定めているのだ。彼女がレイサンとロンドの制止を無視して外に出たのは理由があった。

それは、普段ひょうひょうとしていたウエディからは考えられない程の理由であり、それ故二人に説明をしなかった。

「追いかけてくるかねえ」

ウエディは部屋に残してきた二人を想い浮かべ、吹きだす様に笑った。

ロンドは突然の出来事で慌てふためいている事が容易に想像できた。

しかし、レイサンの事はあまりわからない。

他の女性達に聞いた話でしかレイサンを知らないのだ。

これは、レイサンを嫌っている故の事ではない。

他の女性達にも同じ様に接してきた。彼女はわずかとはいえ、一番年上である。

ゼジムがいない時間が多い屋敷の中で、ゼジムの代わりを務めなければいけないのだ。

だから、一人に対して時間を割く事を止めて、全体を見つめる事にしたのだ。

誰かが困っていたら手を差し伸べたり、助言をする。

そうする事で、女性達の精神を安定させていたのだ。

しかし、今回の30日にも渡るゼジムの派遣はさすがのウェディも突然の事で対処できなかった。

ゼジムが最近忙しく、話す時間すら満足にとれなかった上での派遣である。

日々募っていく女性達の不満が爆発して当然だった。

だが、彼女達の不満が愛によるものだと言う事はわかっていたし、ゼジムにはその不満を解消させる義務があると思ったウェディは旅の同行案を言ったのだ。

さらに、レイサンはどこかゼジムを敬遠している印象を受けていたので、旅の最中は積極的にレイサンとゼジムが話をするように図った。

そして、ゼジムはレイサンを不機嫌にさせる事なくタナの街に着く事ができた。

そのご褒美ではないが、ある物をゼジムに買ってあげようかと思いい、外に出てきたのだが……。

「中々売っていないねえ」

どこの店に目を向けても、それらしき物は売っていない。

遠目に見えていても見つける事ができなかったのだ、ウェディは仕方なく、一つ一つの店に赴く事にした。

幾つもの店に聞いて、ようやくウェディは望んだ物を買う事ができた。

普段はひょうひょうとしているが、買った時には自然と笑みが浮

かんでいた。

「あの子達は部屋で大人しく待っているのかねえ」

結局、ロンド達が姿を現す事はなかった。ウェディを見つけられなかった可能性もあるが。

目的の物が買えたので、宿に向かう途中だった。

ロンドとレイサンがいた。しかし、二人の表情は厳しく、何やら言い合っているようだった。

二人の目の前には下卑た笑みを浮かべた大男が3人程いる。三人ともが盗賊上がりともいう様な強面だ。

それだけで、ウェディは察した。

「ちよつと。私の家族に何かよう？」

怯むことなく近づき、いつものひょうひょうとした態度で大男に言う。

「ウェディさん！」

「よしよし、二人とも大変だったねえ」

ウェディは慰める様に二人の頭を撫でた。そうしながらも、この事態をどう切り抜けるか思索していた。

「よう、あんたも連れか？」

大男の一人が舌なめずりしながら近づいてくる。

「近づくんじゃないよ」

ウェディの鋭い視線に、大男が一瞬たじろいだ。しかし、すぐに持ち直し、下品に笑う。

「へへっ、気の強い女も好きだぜ俺は」

「馬鹿だねえ。あんたに似合う女はここにはいないよ」

馬鹿にしたようにウェディが言うと、大男の顔が怒りに染まった。「てめえ！ たかが女の癖に舐めやがって！」

大男は人目をはばからず大声で怒鳴り散らした。ウェディの凶つた通りだった。

「はっ！ 男が偉いなんて誰が決めたのさ！ 一人で女も口説けない小者が偉そうに言うんじゃないよ！」

「このアマがつ！」

いつの間にか、辺りに人だかりができている。ウエディは内心にやりとした。

そして、今までの態度とは打って変わって、瞳を潤ませ、顔を恐怖の色に染め、叫んだ。

「この人達強姦する気です！ 誰か助けて！」

口調すら変えた、ウエディの悲痛な叫びに集まった人達はざわめく。

「こつ、この目狐が！」

大男が脅すつもりで振りあげた拳すら、ウエディの計画通りだった。

「きゃー！ 殴られる！」

ウエディは間髪入れずに叫んだ。その光景は誰の目にも明らかだった。

盗賊が美女を襲おうとしている。

誰もがそう感じたのである。

「やめろっ！」

そう感じたのならば、止める者が現れるのも当然の事だった。

大男達に負けないうらい大柄な男がウエディと大男の間に割り込んだ。

横顔を窺うと、まだ若者である事がわかった。

「助けてください！ 私達、無理矢理この人達に連れていかれそうになって……」

涙声で話すウエディの肩に手が置かれた。

「任してくれッス！」

これがウエディの芝居とは露とも思わない若者が険しい顔つきで大男達を睨んだ。

その迫力は中々のもので、大男達は怯んだ。

「こんな昼間から罪を犯そうとするなんて考えられないッス！」

ミリタリアの辺境の訛りで怒鳴る男に、盗賊達も負けじと凄む。

「ふざけるな！ てめえみたいな若造に負ける程年とっちゃいねえよ！」

大男が再度拳を振り上げ、若者に向かって振り下ろした。

若者はそれを左腕で受け止めると、反対の手で思い切り大男を突き飛ばした。

大男は豪快に吹っ飛び、後ろに控えていた二人の大男にぶつかった。

ウエディは若者が想像以上に強い事にほっとした。

自分が画策した策で他人が傷つくのが嫌だったのだ。

若者から目を離しても大丈夫だと判断し、周囲に目を配る。

憲兵が近づいてくるのが見えた。

ウエディは若者に視線を戻した。若者た予想以上にできると感じたのか、大男達は迂闊に手を出せない様子だった。

「これ以上相手を殴らないで。襲ってきたら防ぐ事だけして」

ウエディは若者に小さな声で話した。

「えっ？」

若者が聞き直して振り返った。

まさか喧嘩の最中に相手から目を離すとは思っていなかったので、ウエディは呆然と若者を見つめていた。

その時だった。

「馬鹿め！」

吹き飛ばされた大男がここぞとばかりに拳を振う。余所見をしていた若者は気付くのが遅れ、まともに頬に当たってしまった。

態勢を崩されながらも、若者は構わずに右の拳を振う。上体だけで繰り返した拳はなんなく大男に受け止められ、先程の仕返しと言わんばかりに、若者を突き飛ばす。

それでもなんとか倒れずに踏みとどまる若者に、大男は苛立った顔で懷から短剣を取り出した。

「ふざけやがって！ 邪魔なんだよてめえは！」

大男が短剣を振りあげた。周囲から悲鳴が飛び交う。

ウエディは最新の注意を払って気を溜めた。<sup>オーラ</sup>誰かに助けてもらうつもりで芝居を打ったのだが、若者が怪我する事は望んでいない。かと言って、異端者だと気付かれるわけにもいかない。

なので、ウエディは能力を使う事を周りに気付かれない様に、好機を待っていた。

「卑怯ツス！」

「卑怯？ 馬鹿が！ その下らん正義感で貴様は死ぬんだ！」

大男がさらに振りあげた。群衆は大男が持つ短剣に釘付けである。ウエディは好機と睨んで、絶妙の間で若者の後ろから指先を出そうとした。

ウエディが持つ能力は火である。

大きな炎を出せば怪しまれるが、小さな火を出して大男の気を逸らす程度なら周りに気付かれない様にできる自信があった。

しかし、大男が急に怪訝な表情を浮かべたので、慌てて指先を自分の胸まで戻した。

「なんなんだ！？」

不安な声で喚く大男。しきりに自分の右手を見ていた。

ウエディも怪訝に思い、大男の右腕を注意深く見た。

良く見ると、男の短剣には何本もの白い糸の様な物が巻きついて  
いる。

ウエディの直感が告げた。

（傀儡師ね）

この場に異端者がいる。そう確信し、糸の出所を探ろうとする。  
しかし、急に若者が動き出した事で、背中しか見えなくなる。

「隙ありツス！」

右手が動かないと錯覚している大男目がけて、若者が強烈な右拳を放った。

それが大男の鳩尾の辺りに当たり、呻きながら大男は崩れ去る様に倒れた。

「ひいつ！」



それを見て、後ろに控えていた二人の男達が情けない悲鳴を上げて逃げ出した。

しかし、駆けつけてきた憲兵達に取り押さえられた。

「怪我はないツスカ？」

若者が声をかけてくる。助けてくれた事に感謝はしているが、礼を述べるより先に、傀儡師の糸を追う。

大男が持っていた短剣を見た。が、既に糸は消えていた。

「どうしたんツスカ？」

「なんでもないですわ」

気落ちした事を見せずに、笑顔を作る。

「ありがとうございます。おかげで助かりましたわ」

普段使わない女性らしい言葉での感謝に、若者は顔を緩ませた。

「ウエディさん！」

後ろから緊迫した声かけられる。ロンドとレイサンだ。

「大丈夫だったかい？」

「どこに行ってたんですか！？」

助けに入ったお礼を言われるとばかり思っていたが、ロンドの怒鳴り声がウエディに耳を襲った。

「凄い心配してたのですよ！」

「あー……ごめんねえ」

ウエディはばつが悪そうにロンドに謝った。

「許しません！ 勝手に言い付け破って、勝手に私達を助けようとして、危ない事ばかりじゃないですか！」

いつものロンドとは明らかに違った。困惑してレイサンに助けを求める様に見るが、レイサンは瞳を閉じて首を振っている。

「ロンドさんを怒らせたウエディさんが悪いですよ」

助け船は出さない、とぼつさと切り捨てられてしまった。

「つれないねえ……。」

「いいからこつちを向いてください」

レイサンに向いていた顔を両手で挟まれ、強制的にロンドを正面

に見据える格好にされる。

「いやー……本当に悪かったと思っているから。ねえ？」

「駄目です。許しません」

冷たく言い放つロンド。

これは本当にまずい。

「まあまあ、皆さん無事でよかったッス」

迫りくる怒気に恐怖すら感じていたウェディを救ったのは若者だった。

若者に声をかけられた事で我に返ったロンドは恥ずかしそうにウェディを解放した。

「あの、ありがとうございます」

丁寧に頭を下げるロンドは普段と変わらない。ウェディはほっと一息ついた。

若者は純朴なのか、ロンドの感謝の言葉にも照れていた。

「当然の事をしたまでッスよ」

「良かったら、お名前を教えてください」

「僕は」

「ガント！」

若者が照れながら頭に手をやって、名乗ろうとしたが、叱声もとれる厳しい声音が若者の後ろから聞こえてきた。少々低い声だったが、女性の声だった。

若者が慌てて振り返る。表情が引きつっている様な気がした。

「クレスさん……」

先程颯爽と助けに入った若者と同一人物なのかと疑いたくなる程の弱い声だった。

「てめえはまた揉め事を起こしやがってよ！」

ウェディは文句を言いながら近づいてくる、クレスと呼ばれた人物に目をやった。

（これは……まあ）

見た事もない程の美女とは彼女の事を指しているにちがいないと

思った。

レイサンの顔を見た時もその美しさに目を惹かれたが、それ以上に眩しく映った。

長めの金色の髪はこの世の物とは思えない程艶があり、目、鼻、口どれをとっても文句のつけどころがない。

肌はこの世で一番綺麗と言われている白光石の様に白く、細身の体に不釣り合いな豊満の胸もレイサンにひけをとらない。

彼女が羽織っている茶色いローブが動く度に、体にフィットした黒いシャツや、太股すら露わにする程の短い深緑色のズボンが見える。

彼女に神話に出てくる法衣を着せたら、正に女神だろう。

「なんとか言えよ！ ガント！」

しかし、その女神の様な美貌の持ち主は口が悪かった。

「いや、困っている人を助けただけッス」

ガントと呼ばれた若者はクレスが近づいてくる度に小さくなっていくように見えた。

「馬鹿野郎！ 力も無いくせにでしゃばるなよ！ 今だって俺が助けに入らなきゃ死んでたぞ！」

後ろの言葉は小さい声で話していたが、ウエディにははっきりと聞こえた。

（なるほど……彼女が傀儡師なのね）

一つ謎がとけた。仲間である彼女が助けに入るのは当然の行動だ。

「それは……感謝してるッスよ」

「いや、してないな！ お前はしてない！」

クレスは真っ向からガントの言葉を切り捨てた。

「ガントは、どうしようもない、馬鹿だから」

今まで聞いた事もない声に、ウエディに悪寒が走った。

その声はウエディのすぐ後ろから聞こえてきた。

（いつの間？）

心の動揺を見せる事なく後ろを振り返ると、そこにはクレスに負

けない程の美貌の持ち主がいた。

銀色の髪の毛は彼女の腰近くまで達しており、愛らしい大きな瞳が特徴的だった。

クレスの大胆な服装とは違い、彼女の黒と白を基調とした長めのワンピースは裾等にフリルがついていて、とても可愛い。

その服装にはロンドに通じるものがあつた。

「ミアさんまで……酷いッス」

「本当に馬鹿なのだから、仕方ない」

高く、小さな声。それなのに、不思議と耳にはつきりと聞こえる。まるで、彼女が話す時だけ周囲の雑音が消えてしまっているようだ。

「凄い……」

ロンドが感嘆の声を上げた。

その言葉にウエディも静かに頷く。

女神の様な美貌を持つクレスと、それに匹敵するミア。

自分達もそれなりの美貌を持っている事は自負していたが、確信して自分達より綺麗だと思える女性はいなかった。

だから、思わずウエディはクレスとミアに見惚れてしまっていた。ロンドも同様だった。

並んで見惚れている先輩の間から、レイサンが口を出す。

「ウエディさん。お礼をした方がいいのでは？」

その言葉で我に返り、レイサンに目を移す。

「そうだねえ。助けてもらったのならお礼をしなきゃねえ」

ただ、お礼をしたいわけではない。ウエディの中で、傀儡師であるクレスが気になるのだ。

異端者としての能力を使いこなし、ガントもミアもそれを知っている様に思える。

過去、人間と異端者が分かりあえた事など極めて稀であり、そうになると二人も能力者の可能性が高い。

もし、三人とも能力者なのであれば、彼女達は何らかの意志に沿

って動いている。

それが、三人の共通の目的があるということならば気にならないが、三人が誰かの指示で動いているとなると、三人が何らかの組織に属している事になる。

もしそうならば、彼女達は助けるふりをしてゼジムを狙っている暗殺者だったり、ミリタリアの情報を探っている諜報員の可能性も出てくる。

しかし、それも可能性の話であり、現段階ではわからない。だからこそ、彼女達の素性を知るために、レイサンの言葉に同意したのだ。

もつとも、レイサンは純粹に助けてもらったらお礼をするのが礼儀であると思っっているだろうが。

「そんなあ、お礼なんて気にしないでくださいよ」

ガントが締まりの悪い表情を浮かべている。どうやらウエディを含め、助けた三人に鼻を伸ばしているようだが、彼の仲間である二人の美人を見る限り、ガントの行動は理解し難い。

「いえいえ、是非お礼をさせてください」

ウエディはわざとらしくない程度に食い下がった。

「いや、本当にいらねえから。こいつが好きでやった事だしよ」

クレスがだるそうに手を振る。いかにもお礼を受けるのが面倒くさいとわかる。

（この男の子だけなら楽なんだけど……）

ウエディは内心で苦笑を浮かべた。ミアを見ても、お礼を断る気なのがわかる。

「本当お礼なんて大丈夫ツスよ」

クレスの言葉に恐れをなした様で、いかにも残念そうな表情でガントも断る。

これ以上食い下がれば、怪しまれる可能性も出てくる。

「そうですか。残念ですが……」

ウエディはあっさりと自分の思考を切り替えた。

手間がかかるが、ロンドとレイサンを宿に帰してから、彼女達を尾行する事にした。

異端者が集まっているのは、人間だけではなく、異端者にとっても脅威な事なのである。

彼女達の目的や、裏にある組織がわかるまで、逃がしはしないつもりだ。

「本当にありがとうございました」

ウエディはもう一度、深々と頭を下げ、感謝の意を示した。

「どうりゃっ！」

頭を上げようとした瞬間、聞きなれた声の気合と共に、何かがガントに向かう気配を感じる。

慌てて頭を上げると、そこにはガントにとび蹴りを放つゼジムの姿があった。

「ゼジム！」

「ゼジム様！」

女性達の言葉を勘違いして受け取り、こちらを向き、すまし顔で髪を梳かす。その後方で、崩れる様に倒れるガントがいた。

「お前達、なんで外に出ているんだ？」

その疑問は微塵も怒りを感じない。

ウエディは既に分かっていた。

ゼジムが、助けを求める姫君の下に颯爽と現れた勇者の様な心持ちなのだと言ふ事を。

「ゼジム様……」

いつもはゼジムに忠実であるロンドですら、呆れている。

レイサンにいたっては深い溜息を吐いている。

「んっ………どういうことだ」

助けを喜んでいない二人を見て、ゼジムはようやく慌てだした。

怪訝な表情で、唯一表情を変えないウエディに状況説明を求める。しかし、ウエディはゼジムの言葉を見無視し、ある一点だけを見つ

めていた。

また面倒くさい事になった、と呟いているクレスだけを。

？

領主の屋敷に行き、挨拶を済ませたゼジムは久しぶりに訪れたタナの街を急ぐ事もなく、街並を眺めながら宿に向かっていた。

過去に何人かの女性と来た事がある。

ミリタリアではお目にかかれないう他国の物が売っているので、女性達の買い物にかける時間はミリタリアでの買い物とは比較にならない。

つまり、これから訪れるであろう厳しい現実から少しでも逃れようとしているのだ。

10日間の旅を終え、その足で買い物に出かけられる程、ゼジムは体力が残っていないかった。

しかも、レイサンと会話をしながらである。精神の消費も激しい彼女達と買い物に行きたくないわけではない。彼女達が喜ぶなら、率先して行きたいと思っている。

しかし、今日ぐらいはゆっくり休みたいのが本音だった。

そんな考えを巡らしている時に、前方で騒ぎがあった。

ティナに勝るとも劣らない野次馬根性を持つゼジムは、その騒ぎに見に行った。

近くにいた民に話を聞くと、どうやら盗賊紛いの連中が美女に難癖をつけたのだと言う。

美女と言う言葉に反応してゼジムは群衆の波をかき分け、騒ぎの中心に進んで行った。

そこで見たものは、自分の愛する女性達と、その傍らにいる大男だった。

その光景を見た瞬間、体が無意識に動いた。

相手に何もさせない電光石火の飛び蹴りで、その大男を倒した。すぐに、女性達の歓喜の音が聞こえると思ったゼジムだったが、その妄想ともとれる想像とは違い、現実には呆れていたり、溜息を



吐いている。

「私達の宿へ運んで行きましょう」

溜息と共に吐きだされたレイサンの言葉に、事情を知らないゼジムは納得できなかったが、レイサンの氷の様に冷たい視線に負け、渋々と自分が倒した大男を担ぐ。

その時、ゼジムを追いぬいて歩いていく一人の女性に目を惹かれた。

「エンクレス……？」

彼女は忌々しそうにゼジムに舌打ちをし、先へ進んで行く。

「面倒……だけど、仕方ない」

さらにゼジムの後ろから一人の女性が現れた。その女性にも見覚えがあった。その静かदैいて妙に残る声は忘れるはずもなかった。

「とにかく、宿に向かいましょう」

そつと肩を叩かれる。ウエディだ。彼女がさつき見せた表情もゼジムは気になっていた。

「どうなっているんだ？」

「みちすがらお話します。それより、憲兵にあれこれ聞かれるのは困りますし、早くこの場から去りましょう」

そう言い残し、ウエディも先へ行く。

彼女の言つとおり、憲兵達は大男達を縛り終え、こちらを向いて何やら話している。

悩んでいる時間はない。

ゼジムはウエディに遅れない様についていき、騒ぎの一部始終を聞きながら宿に向かったのだった。

ゼジムは一行を自分の部屋に案内した。

クレス達だけならば良いが、気絶しているとはいえ、男がいる。

たかが宿の一室とは言え、借りてしまえばその間は彼女達の部屋である。

彼女達の部屋に男など入れたくない。

それが、自分の部屋に案内した理由だった。

値段で言えば、それなりの宿である。広さは相当な大きさである。二階にあるこの部屋は窓からタナの街並が見える。

元は三人客用なのか、ベッドが三つあり、あとは小ぶりのチェストや、机しかない。そこに、ゼジムの旅の荷物があるだけだ。

だから、ゼジム達とクレス達が全員腰を落ち着けて座れた。

ゼジムは担いでいた大男　ウェディの話ではガントという若者をベッドの一つに寝かせ、クレスを見た。

（状況は把握したが……クレスか……）

金色の系の様な美しい髪の毛。透き通る白い肌。そして女神を想わせる程の美貌。それでいて大胆な服装。

彼女を見るだけで心が躍りそうになるが、以前レイサンと約束した事を思い出す。

（落ち着くんだ）

レイサンに言われて、その通りだと感じたゼジムはクレスを忘れる事になっていた。

それは努力をする必要すらなく、レイサンに言われた通り、今近くにいる愛する存在を大事にしようと思うだけで、クレスへの想いが消せたのだ。

しかし

（会ってしまつと、どうしてもその想いは甦ってしまうのだな）

今は、彼女に会えた喜びと驚きがゼジムの頭を占めていた。

レイサンに言われた今、クレスにどうしようと言う気は無いのだが、あの女神の様な娘を見ていたかった。

だが、それすらも咎められそうで、ゼジムはクレスを少し見てはすぐ顔を逸らしたり、行動の最中にちらりと見る程度しかできなかった。

（いや、待てよ……）

レイサンはクレスの名前も顔も知らないのではないか？

ふと、そんな考えがゼジムの頭に過る。

確かに想い人の話をしたが、クレスの名前を出した覚えはなかった。

ただ見るだけならば、気付かれないかもしれない。

ゼジムの周りにいる女性達を見れば、ゼジムが美女好きだと言う事はレイサンもわかつているはずだ。

逆に、あれほどの美女を見ない方が怪しく映るかもしれない。

ちらりと、レイサンの様子を窺う。

レイサンの瞳はゼジムを捉えて離さず、険しい表情を浮かべていた。

（これは……駄目だな）

レイサンの観察眼の凄さを改めて思い知ったゼジムだった。

「ガントが起きたらすぐに出るから」

そんな無言のやり取りが終った頃、クレスが誰に言う事なく言葉を放った。

クレスの顔は窓に向いていた。表情は険しく、話す事は何もないと意思表示しているようだった。

「いえいえ、そんなわけにはいきません。せめてお食事だけでも」人を世話する事が好きなロンドらしい言葉だった。しかし、それが、今回に限ってはゼジムを苦しめる事になる。

（食事まで一緒にしては気が持たん）

必死に心が躍る事を抑えているゼジムからしてみたら、その時間が長くなる様な事は避けたかった。

「まあ、当人がそう言うのなら、しつこく誘うわけにもいかないんじゃないか？」

ゼジムの言葉にウエディが食いついた。

「愛する女性達を守ってもらったのに、随分あっさりとしているんだねえ」

ウエディも何か感付いてる様だった。

「そうですね。知りあいならいざ知らず」

レイサンが輪をかける。

チクチクと言葉の針がゼジムを指す。ゼジムは居心地の悪さを身  
に感じながら言い訳を探す。

彼女達の嫌みに答えたのは意外な人物だった。

「知りあいだよ」

そう言ったのはクレスだった。ゼジムは一瞬ほっとしたが、レイ  
サンの追撃を聞き、それすらも彼女の思惑通りだと事に気付く。

「お二人はいつ出会ったのですか？」

レイサンは自分とクレスの関係を調べるつもりなのだ。

「まあ、そんな事は良いじゃないか」

ゼジムの言葉に反応する者は誰一人もなく、悲壮感を漂わせて宙  
に消えていった。

「ただ、昔会った事があるだけだ。あんた達みたいな関係なんて何  
もない」

クレスが、いかにも嫌そうな顔で言った。面倒事になると思っ  
ているのだろう。彼女は面倒事がとても嫌いだった。

僅か数日間のクレスとの旅の間でも、彼女の不精さを色々体験し  
た。

中でも、どうせ服も洗うのだからと、泉に服を着たまま入った時  
はゼジムも口を開けて見ている事しかできなかった。

協調性もなく、こちらの意見を聞く前に行動してしまうし、二人  
でいるのに、彼女はまるで一人で旅をしているようだった。

「私もありませんけどね」

「あっそう」

いかにも興味が無さそうにエンクレスは言った。

「先程の質問に答えていただけませんか？ いつ出会ったのですか  
？」

「だから、あんた達みたいな関係がない。それでいいじゃないか」

「私が聞きたいのは出会いの話です」

「話す義理はねえな」

ゼジムが頭の中で思い出にふけている間に、言い合いが始まっていた。

慌ててレイサンを宥める。

「レイサン、まあまあ。後で話すから」

「あなたの話はどこか信用できないのでクレスさんに聞きたいんですけどね」

レイサンの容赦ない言葉の槍がゼジムの胸を貫く。

旅の最中はそれなりに仲良くなったとばかり思っていたが、どこかで評価を落としたようだ。

今、不甲斐無さを見せているからだとはゼジムは夢にも思っていなかった。

「ははっ。信用されてねえなあ」

二人のやり取りを見て、クレスは笑っていた。それはゼジムが今まで見た事無い程の笑顔だった。

その裏にも何も隠されていない、何も隠していない、心の笑顔。

彼女はこんなに心底笑う事ができたであろうか。

一緒に旅をした僅かな時間、彼女は必死で生きる為に、本当の笑顔を浮かべる事はなかった。

そんな余裕はない。伝手も能力も無かった。あるのは男を悦ばせる為の技と、誰もが振り向く美貌のみ。

それは誰にでも与えられる物ではないが、それを武器に生きていく事を良しとしなかった。

別れる時も、彼女は自分が何をしたいか探していた。

今の笑顔を見ると、その何かを見つけたのかもしれない。

ゼジムは、クレスが自分と別れてからの彼女を知りたくなった。

「今は何をしているんだ？」

「なんでも良いだろ」

一蹴されるのはわかっていた。ゼジムはさらに質問を重ねる。

「彼女は仲間なのか？」

「ミア」

クレスは手短に答えた。

駄目だ。彼女は昔以上に手ごわい。

そう考え、ミアに目を向ける。彼女からクレスの情報を引き出すつもりだった。

「ミアって言うのか。素敵な名前だ」

「名前、褒められても、嬉しくない」

さして大きくない声なのに、不思議と耳の残る少女の声。

その一答だけで、ゼジムはミアがクレスと同じぐらい難攻不落の砦に感じた。

「何歳なんだ？」

「話す事は、あまり、好きじゃない」

不安は的中した。彼女とは会話すら成立できない。

ゼジムは、自身が複数の女性と付き合っている事が誇れなくなっていた。

ここまで自分に興味を示さないのはクレスだけだと思っていたが、レイサンに加えてミアもゼジムに興味が無いようだった。

（誰か俺の碎けた心を救ってくれ）

苦し紛れにロンドに目をやった。その視線に気づいたロンドはいつも通り優しい笑みを浮かべてくれた。

（俺にはやっぱりお前達だけだ）

久しぶりのクレスの毒舌に耐えられなくなっていた事もあって、ゼジムの心は、より愛する女性達に傾いたのだった。

「お楽しみの所悪いんだけど」

僅かな沈黙の隙を縫った様に、それまで一言も話さなかったウェディが突然口を開いた。

「あなた達の目的を聞かせてもらいたいねえ」

ウェディの顔は笑みを浮かべていたが、その目は笑っていない。

雰囲気の違いを感じ取ったクレスの顔はさらに顔を陰しくさせた。

「目的？ 意味がわからねえな」

「異端者が連んでいるのはとても珍しい事でねえ」

「あんた達だつて連んでるじゃねえか」

「私達は普段隠れて生活してるのよ。あなた達は？」

「話す義理はねえ」

クレスとウエディは無言のまま睨みあう。ここが決闘場かと思う程、部屋に殺意ともとれる圧力がぶつかり合う。

その迫力に、誰も口を出せなかった。ミアに限ってはそのやり取りにも興味が無さそうにしているが。

クレスとはかくとして、ゼジムはウエディがこれ程までに感情を露わにする所を見た事がなかった。

彼女の動機は分からなかったが、ウエディの中で譲れない何かがある事を悟る。

長い沈黙。静寂を破ったのは

「ふわーあー」

呑気な若者の寝起きの一声だった。

ベッドから体を起こした若者は眠そうに瞼を擦りながら辺りを見ていた。

「あつ、クレスさん。ここは？」

現在流れている空気を知らずに話しているガントを余所に、クレスとウエディに睨みあいが続く。

ゼジムはちらりとガントを見た。

あの大男は豪気師だ。顔を覚えているわけではなかったが、クレスと一緒にいるというのがガントがあの時大騒ぎを起こした豪気師だと確信した理由だ。

しかし、その若者からは豪気ばかりか、<sup>オーラ</sup>気すら感じられない。

15歳を超えた頃から、異端者は無意識に<sup>オーラ</sup>気を放出させていく。

それは体に収まりきれなくなった<sup>オーラ</sup>気が溢れだしているだけなのだが、ガントからは何も感じられなかった。

優秀な能力者であれば、意図的に<sup>オーラ</sup>気の放出を止める事ができるが、それができる程の使い手にも見えない。

何にせよ、あれほど圧倒的な<sup>オーラ</sup>気を出すには長い時間を要するはず

に違いない。

そう考え、ゼジムはガントを視界の外へ追いやり、ウェディとクレスの動向に注目した。

「たかだか何をしているか聞いているだけなのに、その断り様を見ると、余程悪い事をしているのかねえ」

「はっ！ それは、能力を持つ赤子を選別して奴隷施設に放り込む仕事より悪い事って意味か？」

舌戦ではクレスの方が上手だった。

愛するゼジムが苦悩しながらこなしている仕事だと知っているからこそ、ウェディの怒りは並々ならぬものではなかった。

部屋の空気がさらに変わる。

殺意ともれた圧力は明確な殺意と変わり、ゼジムの目は<sup>オーラ</sup>気の流れを感じていた。

「言わないのなら、ここで死ぬかい？ 傀儡師さん」

「能力を知っているからつて有利とは限らねえぞ？」

殺意で返すクレスからも<sup>オーラ</sup>気の流れを感じた。

これ以上、言葉はいらない。そう互いの目が言っていた。

いつ動き出してもおかしくない二人を、ロンド、レイサン、ミアは厳しい眼差しで見っていた。

もし、戦いが始まったら、自分達もすぐに動ける様に。

僅かに昇る<sup>オーラ</sup>気が物語っている。

ガントも他と同じく、いつでも動ける態勢になっではいたが、その体からは<sup>オーラ</sup>気を感じられない。

熟練の術者ならば、相手に<sup>オーラ</sup>気を悟られない様にする事も可能だが、男の若さでは無理だ。

仮に、男が天才だったとしても、この状況で<sup>オーラ</sup>気を消す事に意味がない。

そんな不審なガントを気にしつつ、一際激しくなった<sup>オーラ</sup>気の流れを察知し、ゼジムはウェディとクレスに視線を戻した。

ウェディとクレス、互いが意を決して足に力を入れ、飛ばうとし



た。

「待て」

瞬間、絶妙な間でゼジムが割って入った。

ウエデイに対しては頭に手を乗せ、クレスに対しては<sup>オーラ</sup>気を込めた手の平を向けている。

「昔の馴染みとはいえ、俺の女に手を出す事は許さないぜ」

そう言いつつも、ガントを見る。やはり、<sup>オーラ</sup>気の欠片も感じられない。

「フンっ」

クレスは意地悪い笑みを浮かべた。

それを無視し、今度はウエデイに顔を向ける。

「事情はわからないが、彼女達は客人だろ？」

「けど、得体の知れない者達を放っておくのは危険よ」

ウエデイの言葉で、ゼジムは彼女が何を危惧していたのか理解した。

「大丈夫だ。彼女達は俺達の敵ではない」

ゼジムも、彼女達が今何をしているのか知らなかったが、確信はあった。

彼女は昔からその美貌とは裏腹に男の様な娘だった。

その彼女が悪の手に染まる事は考えられない。

変わらないクレスを見て、そう思ったのだ。

「本当かねえ？」

ウエデイが不審な表情を浮かべる。それでも、ゼジムが表情を崩さず一心にウエデイを見つめると、やがて溜息を吐きながら渋々と納得した。

その様子を見て、クレスは舌打ちをしながらも、<sup>オーラ</sup>気を四散させた。  
「長居しちまったな。帰るぞ」

ミアはその言葉を待っていたのか、素早く立ち上がり、そそくさと部屋を出て行った。

ガントも、事情を飲み込めていないながらも、この場に長くいる

事が不味いと感じたのか、ミアの後に続いた。

「下まで送るよ」

最後に残ったクレスに、ゼジムは声をかけた。いつもなら肩に手を回すところだが、さすがに今はしない。

クレスはゼジムを一瞥したが、そのまま何も言わず、部屋を出て行った。

「色々悪かったな」

階段を下りる最中に、ゼジムは今回の非礼を詫びた。

「気にしてねえよ」

クレスはその後何も喋らず、淡々と階段を下りて行く。

ゼジムも何も喋れず、クレスの後をついていった。

無言のまま、宿の入口にまで来た。

そこでクレスは足を止め、ゼジムに振り返った。

「俺達は、今俺達みたいな奴が静かに暮らせる場所を作っている」

急な話題に、ゼジムは眉をひそめた。

「さっきの女が気にしていた事だ」

そこまで言われてようやく気がつく。

「よくわからねえけど、あのウエディって女、最初から俺達は何者が疑っていたみたいだからな」

彼女の言葉に、ゼジムは納得したかのように頷いた。

ゼジムや、他の女性を守る立場にいるウエディが、異端者のクレス達一行に不審な感情を抱くのは当然の事だ。

しかし、それは本来ゼジムがやるべきことである。

クレスを目の前にして浮かれていただけのゼジムは、深く後悔した。

「ありがとう」

ゼジムはクレスに頭を下げた。彼女は、ウエディの事を考えて素性を明かしてくれた気がした。

人に心を出す事が苦手なクレスらしかった。やはり、彼女はあれから変わっていない。

「しかし、お前も変わったな。俺に手を出そうとするなんてよ」  
クレスが意地悪く笑う。

「時が人を変えるってわけだ」

ゼジムはふんぞり返って答えた。

「嘘つけ。どうせレイサンってやつに何か注意されただろうが」  
どきりと胸が鳴る。

「なぜわかる」

「教えねえよ」

さっきまでとは違い、自然と会話ができるのも二人だけにいるからだろうか。

彼女と話していると、昔の思い出が呼び起されている気がした。

「じゃあな」

懐かしい感覚に身を委ねようかと考えていた時、クレスはぶつきらぼつに言った。

ゼジムは我に返り、クレスを見た。

今を大事にするんだろ？

大きな瞳にそう言われている気がした。

自分は何故これ程までに、人に気持ちを見破られてしまうのだろうか。

ゼジムは溜息を吐いて、気を引き締めた。

「ああ。気をつけてな……ああ、そうだ」

ゼジムは手を上げかけて、思いだした。

「あのガントって豪気師はまだ慣れてないのか？」

クレスとウエディが激突寸前になっても<sup>オーラ</sup>気を出さないガントが、心の隅で引っ掛かっていたのだ。

そして、それはゼジムの中で確信に近づいていた。

動こうとする姿勢なのに、<sup>オーラ</sup>気を出さない。いや、出せないのだ。

ゼジムの考えが当たっているなら、ガントは能力を自在に操れないはずなのだ。

「豪気師？」

しかし、クレスの答えはゼジムが求めていた答えとは全く違っていた。

「知らないのか？」

「知らねえ」

どうでもいい様に肩をすくめるクレスに溜息を吐くゼジム。

確かに、レイサンが教えてくれるまでゼジムも知らなかったし、なによりシェイビーがくれた古い書物にしか載っていない程、世界から遠い能力だ。

クレスが何らかの組織に入っているのはわかったが、その思想は異端者の安らぎの場所を作る事である。

能力を必死に分析するなんて事はしないだろう。

ゼジムは自分が知っている限りの豪気師の事を話した。

レイサンから聞いた事すら抜け落ちていたが、簡単な説明程度にはなってくれた。

「そうか。珍しい能力なんだな」

クレスは納得しながらもどこか府に落ちないようだった。

「俺もよく知らないんだがな。レイサンに聞けばもっとわかるんだが……」

「もう俺は部屋にいかねえからな」

苦虫を噛み潰したような渋い表情をクレスが浮かべる。

クレスにとっても居心地が悪かったようだ。

「ああ、今度会う時まで……まあ、気をつけてな」

その表情に苦笑しつつ、次会う約束をしようと言葉を出しかけ、クレスの後方のただならぬ視線を感じ取り、会話を打ち切る事にした。

良く見ると、扉の隙間からミアが鋭い目つきでゼジムを見ている。

「よくわかんねえな」

急に話を終わらせたゼジムに怪訝な表情を浮かべつつ、仲間を待たせている事に気付いたクレスは踵を返した。

「じゃあな」

こちらに背中を向けたままだるそうに手を振る。

その姿は昔、別れた時と何一つ変わらない姿だった。

クレスが宿を後にしたのを見届けると、ゼジムは大きく溜息をついた。

「あー、びつくりした」

ミアがいつから見ているかわからないが、親しげに話していたのを目撃したのは確実だろう。

もしかしたら、クレスは今頃ミアに色々尋ねられているかもしれない。

面倒くさそうにミアの質問から逃げようとする姿を想像すると、自然と笑みがこぼれた。

「異端者が静かに暮らせる為……か」

ゼジムが知らないクレスの笑顔も、その組織に入った事で生まれたものだろう。

彼女達が目指す道は、酷く困難な道はあるが、その先には自身の存在を主張し、自由に生きる事ができる場所を作られる事だろう。自己主張ができて、それが罰せられない世界。異端者にとっては理想の世界。

日々の生活で能力を使つたとしても、咎められる事はなく、こそこそと暮らす必要もない。

そんな世界……とまではいなくても、そんな街、そんな国があれば、異端者が己を隠して人間達と生活する日々を終止符が打たれる。

「そうさ……そうなんだ」

ゼジムはシェイビィを想い浮かべた。

恨みを集め、人間達に復讐しようとしている組織。しかし、諸刃の剣でもある。

うまく成功したとしても、人間達が異端者に服従するわけでもない。

失敗したら、それからの異端者の待遇はさらに悪くなるだろう。

それをするのならば、静かに異端者のみで暮らし、己たちの幸せを優先にしていく方が余程世界の異端者のためになるのではないだろうか。

自分達の代では、実現は難しいかもしれないが、それを続けて行く事で、いずれ、人間達からも認められる一つの国が作られるのではないか。

シェイビィ達がやろうとしている事はそれよりも時間がかからないかもしれないが、遺恨を後に残すだろう。

例え、彼らが勝利したからと言って、すぐに世界が安定するわけでもない。

それから長い時間をかけなければいけないし、その間に人間達が立ちあがってしまい、万が一負けてしまえば、また不毛な争いの繰り返しになってしまう。

いずれは互いに心身共に疲労し、世界は暗黒に囚われてしまうだろう。

クレス達が為そうとしている事は逃げに見えるかもしれない。

今は人間達に何を言っても聞いてくれないかもしれない。

しかし、彼女達が蒔いた種は大きくなり、いずれ人間達も無視できない程の立派な木に育つ。

人間達との交渉はそれから良いのだ。

人間達に恨みを持たず、必死に生きていく。一番難しい事だが、それこそが平和の道なのである。

長期的に見れば、どちらが異端者と呼ばれる者達にとって輝かしい未来となるかは一目瞭然だ。

「シェイビィに言ってみよう」

一回では受け入れられないだろう。

人間に恨みを抱いている者達は納得できるはずがないだろう。

しかし、言ってみる価値はある。

シェイビィは自分より遥かに頭が良い人間だ。

あの男ならきつと、この思想の素晴らしさ、いや、自分の思想の

愚かさに気付き、部下達を導く事ができるはずだ。

「クレス、本当に助かった」

ゼジムは既に宿の入口に向かって、感謝を口にした。

それは彼女に伝わらない事はわかっていたが、それでも言いたかった。

「早速ロンドに頼もう」

ゼジムは友への想いを胸に、二階へと駆けだした。

？

クレスから以前のからの悩みを解決できるかもしれない話を聞いたゼジムは急いで二階へ駆け上がり、部屋に帰った。

すぐにでも屋敷に戻りたかったが、部屋に入った瞬間、大事な事を思い出す。

ロンドに声をかけようとしたが、ただならぬ雰囲気を感じ、声を出す事を躊躇った。

(そうだった……)

先程まで、殺気が部屋を覆い尽くす程の修羅場だったのだ。

ウェディは勿論、ロンド、レイサンも表情が険しい。

いきなり、あの話はできない。そう感じて、ゼジムは別の話題を出す事にした。

「おう、腹減っているか？」

空しく響き渡るゼジムの声。

レイサンがおもむろに顔を上げ、ゼジ目を睨みつけた。

「そんな事より、あんな人が好きなんですか？」

そして、現状をさらに悪化させる一言を放った。

「おっ、おい！」

慌てて注意するゼジムだったが、既にウェディ、ロンドは驚きの表情でゼジ目を見ている。

「へー。そうだったんですか」

「それは聞いた事ない話だねえ」

二人とも目が座っていた。

「落ち着け。話を聞いてくれ」

今の彼女達に何を言っても無駄だ。

そう感じながらもなだめようとするも、レイサンがさらに続ける。

「この前の時といい、もしかして連絡でもとっているんじゃないんですか？」



レイサンの暴露は隠す気の無い悪意が込められていた。

「へー。前にも会っていたんですか。その好きな人と」

「どういう事か話してもらえるんだよねえ？」

見えない圧力に押されるゼジム。

初めから言っておけば良かった。

そう後悔しながらゼジムは話し始めた。

「そうだったんですか」

ロンドとウェディは話を聞いて、少しは落ち着いた。

レイサンの機嫌は変わらないが、それはクレスの態度の悪さに対してだろう。

「ああ、それでウェディが気にしていた事だが、彼女達は異端者達だけで暮らせる場所を作ろうとしていると、さっき言ってた」

本来なら、この事はもっと早く話し、ロンドにシエイビイの所へ送ってもらう予定だったのだが、レイサンの暴露により、随分時間が押していた。

「そうだったのかい」

表情には見せないが、少しは気が楽になったようだった。

彼女には年長者としての自覚があり過ぎるようだ。

自分がもっとしっかりしなければいけない。

ゼジムは気苦労しているウェディを見て、静かに誓った。

「そろそろお腹すきましたね」

話が一段落したのを見計らって、ロンドがお腹をさすりながら言った。

窓からは夕日がもう見えない。今だに明るいが、次第に暗くなっていくだろう。

「久しぶりにいっぱい食べたいねえ」

ウェディも同意した。レイサンは何も言わないが、お腹を気にする様な素振りを見せている。。

ゼジムは好機とばかりに言った。

「じゃあ、久しぶりに屋敷で食べるか」

どう切り出そうか悩んでいたが、ウェディの言葉を聞いて、不自然に見られないと思った。

シェイビの所に向かうにはロンドの力が必要不可欠だが、常に一緒にいる女性達の前で、ロンドだけに声をかけ、誰にも気づかれないで出て行くのは困難だ。

そこで、屋敷に戻り食事をとれば、居残り組との十日ぶりの再会で話が盛り上がる。

そうすれば、ゼジムとロンドが少しばかりその場から姿を消しても気づかれる可能性は少ないし、もし気付かれたとしても、久々にミリタリア城下に帰ってきた事を理由にすればなんとでもなる。

「確かにティナの豪快料理に敵う店はないしねえ」

ゼジムの提案に、ウェディもまんざらでもない。ロンドとレイサンも首肯している。

「十日ぶりだしな。積もる話もあるだろう」

「主に残った人達の愚痴になりそうな気もありますが」

レイサンの言葉を聞いて、ゼジムは己の浅はかさに気付いた。

十日間もほったらかしにされていたのである。屋敷に残っていた女性達の不満は計り知れない。

（今日中にシェイビの所へ向かえるか……？）

残してきた女性達の事を考えると、それは難しそうだった。

溜息を零し、ゼジムは屋敷に戻る準備を始めるのだった。

水操師が作り出す移動水は、一見すると水たまりにしか見えない。そんなものを宿屋の部屋に作れば、誰かに見つかる可能性もある。そして、もし触れられたりすれば、その水たまりが不可思議な物である事に気付かれてしまう。

ただの水たまりと違って、移動水は円の形で生みだされ、その形を崩す事はない。術者の意志が、異端者による気を<sup>オーラ</sup>使って壊す事しかできない。

普通の人間では絶対に片づけられないのだ。

そうになると、移動水が見つかる、余計な問題を起こしかねない。借りているとはいえ、絶対に部屋に誰かが入ってこない保障はない。故に、ゼジム達は以前ロンドと各地を旅していた時に作った、町はずれの移動水を使って屋敷に戻った。

突然の帰宅に、屋敷の女性達は目を丸くしたが、その表情はすぐさま変わり、女性達は自分流に四人を迎え入れた。

ウェディ達女性陣には旅を労い、優しく抱きしめる者もいたが、ゼジムは終始文句を言われるだけだった。

帰ってきた理由を話すと、ティナは張り切って料理を作ってくれた。

その頃にはゼジムへの文句は終わり、次にお供をする女性を誰にするかで盛り上がっていた。

食事が終わってもその論争は終わらず、大きな休憩室で女性達は思い思いに寛ぎながら、論争を続けている。

ゼジムが動こうが、誰も気にしなかった。

そこで、ゼジムは何気なくロンドに近づき、誰も見ていない事を確認してからロンドに耳元で囁いた。

「ロンド、ちよつと良いか」

二人で休憩室を出て行けば、さすがに怪しまれる。

不満を少しは解消されたといえ、大事な核、ゼジムとの二人きりの時間を過ごしたわけではない。

そんな時に、ゼジムが女性を一人だけ連れて部屋を出れば、彼女達の不満が再燃しかねない。

ゼジムはロンドの返事を待たずに部屋を出た。

そして、部屋から少し離れた壁に寄りかかる。

扉一枚を隔てた場所にいるだけなのに、廊下は静かだった。

その無音に浸り、周囲に目をやる。

かつて、この屋敷に住みだした頃は自分好みの装飾品を廊下に置いていたが、今ではその面影は無く、女性達が手掛けた装飾品しか

見る事ができない。

それに、不満は無かったし、むしろ嬉しかった。

自分の部屋以外に何か手を加えているのは、この屋敷自体を自分の住む家と思っているからだ。

カーナがとりつけた、やけに生々しい女性が描かれている絵画も、トウレネが作った乾燥した花を繋げた花飾りも、ティナが描いた、とても芸術性を感じられないが暖かい気持ちになれる屋敷に住む物の似顔絵も、その全てがゼジムにとって嬉しかった。

その装飾品達を微笑ましく眺めていると、廊下の先で扉が開く音がした。

その音は離れているとは言え、やけに小さく聞こえ、意図して扉の音になるべく出さない様に慎重に開けている様な音だった。

（エレナ……か？）

ゼジムは休憩室にいない、唯一の屋敷にいる女性の事を考えた。

王への進言で異例の上流貴族になったが、今は奴隷を隠し育てていた疑惑で取り調べを受けているフォッサの原因となった奴隷の女性。

旅を続けている時もフォッサの執事であるタキシムからの情報を聞く時にエレナの事も聞いていたが、食事はとるものの、部屋から出る事はなかったと聞いた。

もし、彼女が部屋から出てきたのであれば、彼女が少しは心を開いたと言ってもいい。

屋敷の女性達は、他の女性達を仲間でもあり、ライバルとも思っている。

全てを話す事ができる本当の友達にはなりたくてもなれない。

だが、エレナはフォッサを愛している。女性達の敵ではない。彼女が屋敷の女性達の友となってくれば良いと思っていたゼジムはエレナの下へ向かおうとした。

しかし、歩き出そうとしたその時、すぐ近くで扉が開く音がした。先程と同じ様に、音が出ない様に気を付けている音だ。

部屋からロンドが出てきたのだ。だが、その顔は険しかった。

いつもの顔で出てきたのならば、少し待ってもらってエレナの下へ向かおうと思っていたのだが、ロンドの表情の真剣さに、それをする事を諦めた。

「ゼジム様」

ロンドは大事な約束を破ってしまった子供の様に、弱弱い声だった。

「どうした？」

ゼジムの問いながらも、ロンドが扉を閉めない事に気がついた。そして、そこからもう一人女性が出てきて、ロンドから聞かなくとも答えが分かった。

「ウエディ……」

女性の名を呼ぶ。ウエディは笑顔で返したが、その瞳には揺るぎない何かを感じた。

ウエディは静かに扉を閉めた。そして声を潜めて言った。

「さて、全部話してもらおうかねえ」

言外に、ゼジムとロンドが隠れて何かをやっている事に気付いていると言われているようだった。

「何の事だ？」

ゼジムは惚けた。まだ、彼女は全てを知っているわけではないと判断した。

ウエディはロンドの肩に手を置き、微笑む。しかし、その笑顔に温かみを感じられなかった。

むしろ、その瞳から批難や、怒りが垣間見られる。

「ロンドにも何も教えてないんだって？ 何も知らせずに利用するのは感心できないわねえ」

「利用なんてしていない」

思いがけない自身の非難に、ゼジムは若干声が大きくなっていた。ウエディは人差し指だけを立たせ、唇に触れた。

ゼジムはその無言の指示を理解していたが、それでも納得できな

い。

「俺はロンドは勿論、皆の事も利用しているつもりはない」

だからこそ、愛し愛されるまで抱くつもりがなかった。お互いが必要だと感じられるまで待つのが、奴隷生活で傷ついた彼女達に対する自分の最低限の礼義だと思っていた。

それに、ゼジムは彼女達を大事にしている。

シェイビィに頼まれていた事は、不穏だったし、国を攻めると聞いて自分のその考えが正しかったと思っている。

彼女達に危険にさせない様に、自分なりに考えた結論の上でしてきた事を、利用と言う言葉で片づけられるのはどうしても納得できないのだ。

「そう思うなら、ちゃんと理由を話さないな」

「お前達を想つての事だ」

「理由が言えない程危険な事をしているのに、私達を想つての事？自分を正当化したいだけじゃないかい？」

ゼジムはここまで食ってかかるウエディを初めて見た。ロンドも同じ様で、ウエディを見たまま固まっている。

「それは……」

ウエディの迫力に負けて、ゼジムは言葉に詰まってしまった。

ウエディは小さく溜息をつき、流れるように手を出し、ゼジムの胸に触れた。

「あなたは知らない様だけど、私はあなたとロンドがコソコソ何かをやっている事を随分前から知っているんだよ」

ウエディの告白に、ゼジムの体が強張った。触れているウエディも感じられる程に。

ウエディはそれを気にも留めずに続ける。

「今までは知らないフリしていても問題なかったのだけど、最近物騒だからねえ。説明してもらいたいのよ」

ゼジムはウエディの事を甘く見ていたようだ。

そして、言われてみれば見破られているのも当然だった。

彼女は屋敷の中で一番ゼジムと接してきていたのである。

ゼジム自身も彼女に頼っていた。

彼女に言わなかった事が間違いだったのだ。

「私も聞きたいです」

ロンドも力強く言った。

直接ゼジムを助けていた分、ロンドの方が知りたい気持ちが強い  
のかもしれない。

「そうか……わかった」

ゼジムは彼女達に言う事にした。

詰め寄られているからではなく、自分がそれ程心配をかけている  
事に気付いたからだ。

「ここではなんだからな……地下室で話そう」

二人が無言で頷いたのを見届け、ゼジムはゆっくりと地下室へ向  
かった。

その一步一步に彼女達に心配させていた謝罪と、それに今まで気  
付けなかった自分への苛立ちを乗せて。

？

ミリタリアはザンガやオーコムとは違い、一年中安定した気候だ。昼間は心地よい暖かさで、夜は肌着一枚でも快適に過ごせる程だ。しかし、さすがに地下室はひんやりとしていた。

石の壁の近くにいと、冷気が体温を奪おうとしてきた。

いつもなら、その冷気に体を冷やされる事を嫌っていたが、彼女達に今まで隠してきた事を話そうとしている今は、熱くなるのを丁度良く冷ましてくれる壁がありがたかった。

彼女達も秘密を聞く身として同じなのか、一言も寒いとは言わない。

ゼジムは適当な場所に腰掛けた。

彼女達は汚れるのを嫌ったのか、立ったままゼジムの前にいる。

しばらく何も言わずにいたが、彼女達は一向に座る素振りを見せない。なので、ゼジムは話をする事にした。

彼女達に隠していたシェイビィの目的、フォッサ達との薄っぺらな信頼関係。

彼女達は息をする事も忘れてしまっているのではないかと思う程、熱心に聞いている。

ゼジムが話終えた後、彼女達はそれぞれ考え込んでいた。

地下室に、沈黙が訪れる。

ゼジムは、考えがまとまるのを待つ間、壁に取り付けられた職台の灯りに照らされた二人をじっと見ていた。

「そう言う事だったのねえ」

しばらくして、ようやくウェディが口を開いた。

「あの方が、まさかそんな事を考えている人だったなんて……」

ロンドはシェイビィとの面識がある。

彼女にシェイビィのアジトに移動水を作ってもらったために、一度会った事があるのだ。



永久に使う事ができる移動水を作成する為には一日がかりで気を  
練らなければいけない。

つまり、一日中アジトの、それもシェイビイの部屋にいたのだから、シェイビイと面識があるのは当然の話だった。

ゼジムはロンドの横にずっといたから、シェイビイとロンドが会話すらしていない事を知っている。

それでもロンドが驚きの表情なのは、ゼジムとの古くからの友人だと言う事で、無条件に信頼していたからだ。

「それで、今からその男を説得してみよう……と」  
ウェディはしゃがみ込み、ゼジムと同じ目線に合わせた。

その瞳はゼジムの捉えて離さず、ただ一点だけ、ゼジムの目だけを見ている。

「ああ。うまくいくかはわからないが。だが、これで決心した」  
ゼジムはウェディの気持ちを受け止め、精一杯の心で返す事に決めた。

「今回話して、駄目だったらあの男とは縁を切るさ」

「良いのですか？」

声を上げたのはロンドだった。

何年もシェイビイの下へ送り届けた彼女は、ゼジムとシェイビイの関係が只の友だとは思っていなかった。

シェイビイが戦争をするという言葉聞いても関係を断っていない事からも、ゼジムにとって大切な存在である事は明らかだった。

「良い。最近、俺は考えるようになったんだ。自分に一番大事な物は何かって」

彼女達に話すのはなんだか照れくさかったので、ゼジムは立ち上がり、彼女達に背を向けた。

「考えるまでもない。お前達だ。だが、俺は大事にしていると勝手に思い込んで、お前達を守っている気でいた」

彼女達に何も告げずに、自分を危険にさらす事が、彼女達にとって最善なのだろうか。

そんなわけがなかった。彼女達もゼジム同様愛する人を大事に思っているのだ。

そんな大切な事を、ウェディやロンドに気付かされるまで忘れていたのだ。

「俺が思う様に、お前達もそう思うんだよな」

「当たり前です」

ロンドが顔を膨らませ、そんな事も知らなかったのか、と言葉に出さず抗議する。

それも束の間、すぐにいつもの優しい笑みを浮かべた。

ロンドの優しい微笑みがこれ程愛おしく思った事があっただろうか。

ウェディの気遣いを身に染みて感じた事が今までであっただろうか。彼女達が何故そうするか、知ったからこそわかる。

それは自分の過ちに気付かない限り、決して感じる事ができなかつただろう。

「ああ、俺は大馬鹿者だったんだな」

「そんな事を今更気付かれてもねえ」

呆れたように溜息と共にウェディが言う。

「私より二つも上なのに、全然周りが見えていないし、自分でも考える事ができず、人に言われないと気付かない」

ウェディの言葉がゼジムの胸に突き刺さった。

ゼジムは苦笑を浮かべる事しかできない。

「だけど、あなたは一人じゃない。私達に求めるのは体だけなのかねえ？」

「そんな事はないっ」

急に男女の話を出され、ゼジムは慌てて反論した。

その様子を見て、ウェディとロンドは声を上げて笑う。

「笑うなよ。……これからは頼るから」

二人は笑う事を止めて、嬉しそうに微笑んだ。

物を買ってあげた時よりも、二人で出掛ける時よりも良い笑顔だ

った。

「じゃあ、単独行動は今日で終わりだよ？ さっさと行って話をし  
てきなよ」

そう言って、手を払うウェディを見てゼジムも笑った。

彼女はもう元に戻っている。むしろ、いつもより生き生きとして  
いる様に見えた。

ゼジムが想像出来ない程、ウェディは色々悩んでいたのだろう。  
シェイビーが話を受け入れる可能性は低い。

その姿を見て、縁を切れるかどうか、ゼジムはわからなかった。

だが、今なら大丈夫。彼女達よりも大事な存在はない。

「じゃあ、行ってくる」

「早く帰ってくるんだよ。今ならロンドを寒い地下室にいつまでも  
待たせる愚行をしないよねえ？」

「大丈夫だ」

そう言いつつも、ロンドの事を考えていなかった自分を内心恥じ  
た。

被害者のロンドは、ウェディの言葉に苦笑しつつ、隠し部屋に入  
っていった。

しばらくすると、隠し部屋の隙間から光が差し込んでくる。

「ちゃんと伝えるんだよ」

「わかってる」

ゼジムはウェディを抱きしめた。

心持ちが違つと、こうまで感じ方が違つのか。

彼女の応援する気持ち、ゼジムの心の奥底にまで暖かく広がっ  
ていく。

「ありがとう」

それは、心からの言葉。彼女の様に、心の奥底で響きわたる感謝  
の気持ち。

「お楽しみは後にとっておくとして、早く行つてきなよ」

ウェディにしては珍しく、強引にゼジムから離れ、そっぽを向い

た。

驚いたゼジムだったが、すぐに微笑む。

ゼジムと同じで、ウェディも心からの言葉を受け取る事に慣れてはいない。

ゼジムは気を引き締め、隠し部屋に入っていった。

用意を済ませたロンドは、両手を広げていた。

どうやら二人の様子を隙間から見えていたらしい。

次は私でしょうか？ と、問いかける顔は、抱きしめられる事が当たり前だと言っている。

ゼジムはそんなロンドが可愛く思えて、笑いそうになったが、なんとか顔に出さずにロンドを抱きしめた。

ウェディと同じ様に、ロンドからも愛が伝わってきた。

「ロンドもありがとうな」

ロンドも心からの言葉に慣れていないが、様子はいつもと変わらず、目を潤ませ、とろんとした表情を浮かべていた。

ゼジムは今度こそ笑ってしまったが、ロンドは気にする素振りがない。

ぼん、とロンドの頭に手をやり、それからシェイビィの下へ向かうため、移動水の中に身を委ねた。

男は苛立たしげに部屋のベッドに座り込んだ。ベッドが耐えきれずに、若干動いた。

男は気にする素振りもなく、乱暴に外套を脱ぎ、それを投げ捨てた。

「くそつ、どこにある。あれがなければ……」

蒼い髪の毛をくしゃくしゃと掻き乱した。

闇よりも濃い瞳からは隠しようがない怒りが感じられる。

「あいつらはいつ来るのだ……」

蒼い髪の毛の男、シェイビィは吐き捨てるように呟いた。

順調に行くはずだった。何年も前から調べ、一つずつとりこぼし

が無い様に慎重に探してきた。

しかし、それはまったく見つからず、外ればかりを引かされていた。

ミリタリア領土にはなかった。ザンガ領土にもなかった。

他の三領土は情報を集めさせている。その報告に来るのが今日なのだが、その者達が一向に現れる気配がしないのも、シェイビィを苛立たせる一因だった。

だが、腹を立てるだけではどうしようもない。

シェイビィは彼らが来るまで睡眠をとる事にした。

上衣を脱ぎ、シャツ一枚になり、ベッドに横たわろうとした時、突然水たまりが光り出した。

それは、ここに直通の唯一の水たまり。友が来る事を告げる合図であった。

「特に報告はなかったが……」

怪訝に思いながらも、シェイビィはベッドに腰を下ろし、友の来訪を待った。

しばらくして、銀髪の男が勢いよく水たまりから飛び出してきた。目が合うと、銀髪の男は再会を喜ぶ様に笑みを浮かべる。

「久しぶりだな」

シェイビィは先程の怒りをどこかに捨て去ったかのように微笑んだ。

シェイビィにとって、銀髪の男、ゼジムは昔からの友であり、気が許せる仲間でもあった。

当のゼジムはそれに気付いていないが。

だから、中々思い通りにいけない現状を忘れ、本当に友の来訪を喜んでいた。

「夜に悪いな。ちょっと話があつてな」

ゼジムは申し訳なさそうな顔だったが、その瞳からは今までに感じた事がない迫力があつた。

「なんだ？　どうかしたのか」

平常を務めたが、心の動揺は収まる様子はない。

彼がここまで真剣な表情を見せる事は珍しいのだ。

「シェイビィ、戦争は止めないか？」

シェイビィの予想通り、ゼジムは突然言い出した事は、思わずシェイビィの目を大きくさせた。

「急な話だな」

「悪いな。けど、本気で思っているんだ」

その眼差しに偽りを感じられない。

シェイビィは内心驚いていた。

ゼジムと言う男は、他の人間に執着はするが、相手を理解しようとは思わない男だ。

相手を尊重すると言えば聞こえはいいが、自分の想いを相手にぶつける事を好まないのだ。

そんな男が、シェイビィの想いを知っているのにも関わらず、止めようとしている。

しばらく見ない間に、ゼジムは一つ成長していたのだ。

しかし、それもシェイビィにとっては気にならなかった。

「無理を言っな。どれだけ人間に恨みを持っている部下を抱えていると思っっているんだ」

少しばかりの反論でゼジムは納得するはず。

そうでなくても、シェイビィには彼を納得させる術があった。

「それはわかってる。だが、考えてみてくれ。それを成し遂げて本当に幸せな世の中を作れるのか？」

ゼジムの思わぬ返しに、シェイビィは若干苛立つ。

「幸せなど求めていない。俺達が目指すのは人間の殲滅だ」  
自分達がどうなるうが良いのだ。

異端者に酷い仕打ちをしながら悠々と暮らしている人間達をこの世界から葬る事ができれば。

「駄目なんだそれじゃ。その先に待っているのは延々と繰り返される不毛な争いだけだ」

ゼジムが熱心に話すのを見て、シェイビィは彼が誰かに入れ知恵されたのだと気付いた。

今までのゼジムが未来を語る事などあり得ない。

「異端者の中では、静かに暮らそうとしている者もいるんだ。彼らは自分達だけで事を為そうとしていない。輝かしい未来を作るために頑張っている人達なんだ！」

ゼジムの言葉は、シェイビィの心を少しも揺るがす事はなく、只苛立ちを募らせるだけだった。

シェイビィは冷静に頭の中に浮かんでいた数々の言い訳を消し飛ばし、単刀直入に切り出す。

「ゼジム、お前は例えば愛する者を殺されたとしても、そんなことを言えるか？」

「……何？」

怪訝な表情を浮かべたゼジム。

彼は何もわかっていない。

「俺が、昔愛する女を殺された恨みで人間を滅ぼそうとしていたとしても、お前は止める事ができるか？ 自分は愛する女性達と暮らしているのに」

ゼジムはついに何も言えなくなってしまった。

言えるわけがないのだ。

愛する女性に囲まれて暮らしている男が、最愛の女性を失った男を止めることなどできない。

「昔、俺を異端者と知った上で好きになった女がいた」

立ちつくすゼジムの尻目に、シェイビィは淡々と語り出した。

「荒んでいた心が、彼女に会ってから変わった。俺は、人間とも異端者とも分け隔てなく接する彼女に恋をしていた」

溢れだそうとする楽しかった思い出がシェイビィの心を暖かくする。

「しかし、殺された。異端者だと間違われてな」

天高くから一気に地に落ちた様に、シェイビィの心に憎悪が一瞬

で立ちこめる。

心は激しく斬りつけられ、奈落に落ちる。

そこから抜け出せるような思い出は無く、シェイビィの心は奈落をさ迷う。

そこで蓄えられる憎悪がシェイビィの生きる意味となるのだ。

何度味わったかわからない。

だが、恨みを持続させるには必要な事だった。

「わかるか？ 人間なんて、異端者の見分けもつかず、同じ人間を異端者として容赦なく殺すんだ。彼女は何一つ悪い事をしていないのに」

初めて人に話したからか、憎悪が外に溢れ出たかの様に、シェイビィの声は怒気を含んでいる。

「俺は絶対人間を許さない。この身が朽ちるまで、殺し続ける」

自分の気持ちを確認するように、新たに誓いを立てるように。

「お前は愛する人が殺されても俺の事を止めるか？」

返事は帰ってこない。

言えるかもしれない。言えないかもしれない。実際にその悲劇を味わっていないければ、容易に止める事はできる。

しかし、それが相手に届くかどうかは別だ。

事実、ゼジムの言葉は、シェイビィの心を突くことすらできずに霧散している。

「心配してくれるのは嬉しいが、前にも言ったが俺とお前では生きる世界が違いすぎる」

今はまだ

そう言いたくなるが、ぐっと堪える。

シェイビィは一度溜息を吐き、代わりの言葉を紡んだ。

「ありがとう」

ゼジムは悲しそうな、悔しそうな顔をしていた。

言葉にされずとも、ゼジムの気持ちはわかった。

愛する人を失ったシェイビィを哀れみ、シェイビィの気持ちを变



える事ができず、悔しがっている。

それはシェイビィが彼と出会って初めて目にした真つすぐな正直な気持ち。

変わらないゼジムを見て、シェイビィは微笑んだ。

「これから人と会う約束をしているんだ。悪いけど今日はもう帰ってくれないか」

ゼジムは何かを言いかけたが、諦めたような表情で俯いた。

そして、顔を上げた時に険しい顔つきになっていた。

「わかった。余計な事を言って悪かった。だが、俺はお前にも幸せになってほしい。そう思っている友がいる事だけ忘れないでくれ」  
真つすぐな、本当に真つすぐな彼の心。

シェイビィはなるべくそれを受けない様にゼジムから目を逸らし、天井を見つめた。

彼の心は大好きだったが、それを真正面から受ける事はシェイビィにはできなかった。

「ああ。元気だな」

「お前もな」

別れの挨拶を交わし、名残惜しそうにしながらもゼジムは黙って帰っていった。

輝いた移動水が収まると同時に、扉が開かれる。

？

「やっとか……」

友と話していた時とは違い、シェイビィは険しい顔つきで扉から入ってくる面々を睨んだ。

部屋に次々と入ってきた者は四人。最後尾にはグレンがいる。

「そんな睨まれてもな」

一番に入ってきた男が溜息を吐いた。

ゼジムを超える体躯を持っているが、その服装は法衣に包まれている。

そのギラギラと殺意を覗かせた瞳も、好き放題に伸ばしている黒髪も顎鬚も、とても僧の類には見えない。

髭に隠れた精悍な顔は浅黒く、それがさらに僧とかけ放している。

「ゲイツ、主君に向かって失礼な口のきき方を！」

後ろから理知的で凜とした声が響いた。女性だった。

ゲイツと呼ばれた男と同じ法衣を着ているが、ゲイツ同様僧の類には見れなかった。

淡い水色をした髪の毛は綺麗に腰辺りまで落ちており、胸元は大胆に開かれており、足もふとももまで露わにしている。

その露出度の高い服装は巫女というよりは踊り子に近いが、彼女の声同様の凜とした顔つきと美貌は巫女にふさわしい。

「エロ巫女の癖に何を。その姿でシェイビィをかどわかそうとしている事なんてお見通しなんだよ、サラ」

「今、なんと言った木偶の坊！」

サラと呼ばれた女性の目つきが厳しくなった途端、殺気が部屋に充満する。

「ちよつと、こんな所にきてまで喧嘩しないでくださいよ」

ゲイツと女に挟まれる格好の男が慌てて二人を叱った。

ゲイツよりも頭二つ程小さい小柄な男は、グレンを見て二人に注

意するように促した。

「はあ、二人とも何しに来たんですか」

呆れながらグレンは言った。

自らを含め、シェイビィ率いるシュピーゲルの幹部であるのに、仲が悪い。

誰もシェイビィに尊敬や恋慕の情を持っているが、それはシェイビィにだけ向けられるだけのものであり、幹部同士はそれ程親しくなく、たまに一同に会すると何かしらの言い合いが始まるのはいつもの事だった。

だから、シェイビィもそれには何も言わず、命令していた事の結果報告だけを求める。

「して、成果はあったのか」

「はい。ありましたか……」

小柄な男は間髪いれずに答えたが、次の句を出す事を躊躇っている。

「ガルス、何かあるのか？」

「いえ、ある事にはあったのですが、その、守護獣が強かったのです……」

「かあー！ 倒せずに逃げ帰って来たわけか？ 石も持たずに」  
ゲイツは根性なしめ、と言いたげにガルスを見下ろした。

ガルスはゲイツを無視して、顔を強張らせながらシェイビィを見た。

「恐ろしい程強いです」

「それでこそ、神の力を守る守護獣であろう」

ガルスとは違い、シェイビィは楽しそうに笑みを浮かべた。

「私が行こう。よくやったぞ、ガルス」

ガルスは深々と頭を下げた。続いてサラとグレンが跪く。

「ガルスですら手に負えなかった守護獣です。私達もついていきます」

サラの言葉にグレンも首肯した。

「そうか」

彼らは、シェイビーが負けると思っただけではない。それがわかっていたから、シェイビーも断らなかった。

「ガルスとゲイツはどうする？」

「お役に立てるかわかりませんが行きます」

ガルスも跪く。

「俺は遠慮しとくぜ」

ゲイツは当然とばかりに首を振った。

「そうか」

サラの瞳がまた鋭くなつたが、シェイビーは気にせず跪いた三人を見やった。

「明日、出る。明日に備えろ」

それは、厳しい戦いになる事を予想したものだ。

三人は気合のこもった掛け声で返し、早々に部屋を後にした。

主君の言葉通りに、時間を無駄にせず明日の用意をはじめに行ったのだろう。

残されたのはゲイツとシェイビーだけだった。

「まだゼジムの事を諦めていねえのか」

しんと静まり返った部屋の中、ゲイツは沈黙を破った。

「お前には関係ないだろう」

誰に何を言われ筋合いもない。

そう暗に示しているシェイビーの冷気のような言葉に、ゲイツは体が縮みあがる感覚を覚えた。

しかし、ここで引き返すわけにはいかない。

「別にお前がゼジムをどう思っただけでも構わないが、それに部下達を使うのは違くないか？」

ゲイツは嘘をついた。しかし、その本心に固く蓋をし、平静でシェイビーを問い詰める。

「だから、お前には関係ない」

一際に走る悪寒が増す。これ以上言えば殺す。そう言われてい

る様な気がした。

「わかったよ。好きにしろよ」

これ以上はまずいと思ったゲイツは降参を告げる様に両手を上げ、部屋を後にした。

誰もいない廊下の途中、ゲイツは壁を思い切り殴った。

あまりの衝撃に、壁はへこみ、亀裂が走っている。

「ゼジムが何だって言うんだよ！」

ゼジムより長く時を過ごしている。ゼジムよりも強い自負がある。組織の中ではシェイビィに次いだ力があるのは誰もが認めている。しかし、シェイビィはそれを認めても、信頼できる友として見てはくれない。

あの男と肩を並べる事ができる様に必死に頑張って修行をして、ここまで昇りつめたと言うのに。

その報いをシェイビィは何一つ帰してくれなかった。

「ゼジム……」

シェイビィの元にいた時間も少なく、離れている時間の方が多くなっている石破師の男。

シェイビィは今、ゼジムの仲間に取り込まれている。

ゲイツはそれが嫌でたまらなかった。

同時に、ゼジムが仲間になる事に期待もしていた。今までは。

ゼジムよりも強い所をシェイビィに見せて、自分がシェイビィの一番になるために。

そう思っていたが、今日のシェイビィを見れば、それは叶う事がない様に思えた。

「くそっ！」

もう一度壁を殴る。亀裂がさらに走り、蜘蛛の巣のようになってしまっている。

今更気付いても遅い。今邪魔をすれば、殺されてもおかしくない。ゼジムが組織に来るのをのうのうと待つしか残されていない。

それが、ゲイツをさらに苛立たせた。

再度、壁を殴ろうとして、ふと面白い考えがひらめいた。

「こりゃあ、良い」

ゼジムを殺せば、自分もシェイビィに殺されてしまう。故にそれ  
はできない。

しかし、この思い付いた考えならば、シェイビィに多少反感を  
買いかもしれないが、計画（、、）に支障はない。

そして、ゲイツの鬱憤は限りなく晴れる事だろう。

「あいつがノーンに来るのは二十日後か」

その間、ここにいれば他の命令を出されたり、あの日（、、）  
に任務を放棄する事を疑われてしまう。

ならば、今日の言い合いを引き合いにしばらく姿を消す方が  
良い。シェイビィも、ゲイツが異常にゼジムを嫌っている事を知っ  
てる。

姿を消しても探す事はしないだろう。任務も、しばらく前から  
居ない事で放棄したのだと考えてくれる。

「そうと決まれば」

ゲイツは踵を返し、外へ向かった。

普段なら水操師に頼んでノーンに送ってもらうのだが、そうす  
ればシェイビィに気付かれてしまう。

幸い、自分の能力は移動にも優れている。

余った時間は適当に潰せば良い。

「楽しくなりそうだ」

ゼジムの強張る顔、焦り、怒り、それを阻む自分を想像する。

なんと気持ちが良い事か。

狂気に満ちた顔で、ゲイツはノーンへと向かう。

ウェディに言われた通り、ゼジムはすぐに帰った。いや、帰され

たと言った方が正しかった。

ゼジムが言った言葉は、彼を少しも動かす事ができなかった。友として、何もできなかった。

悔しかった。悲しかった。

シェイビイの心に響く言葉を持っていない自分がとてつもなく苛立った。

だが、それで当然だった。

愛する者を失った事がないゼジムがシェイビイにかける言葉を持っているわけがない。

気の毒だったな。それでも生きていればいつか幸せになれるさ。

色々な言葉が頭の中に浮かび、すぐに消え去った。

どれも、未来に期待させる効果は無かった。

どれもが、そうなってほしいという願望に過ぎなかった。

シェイビイの心の闇の深さは、ゼジムが想像した以上のものだった。

激しく燃え盛る憎悪の感情は、時の流れで解決もしない。

人間がいなくなるまで、永遠と増大し続ける。

ゼジムは、シェイビイの説得を諦めるしかなかった。

屋敷に帰ってきて、目の前にロンドとウエディが居た。

いつもより明らかに早い帰宅にロンドは大層目を大きくさせていたが、ウエディは険しい顔つきで、元気のないゼジムを見ていた。

「駄目だったみたいだねえ」

「ああ、駄目だった」

ゼジムは苦笑した。すぎる事すらできなかった、完敗。

もし、自分の愛する女性達の内の一人でも死んでしまったら……

そう思うとシェイビイに何も言えなかった。

「そうかい。じゃあ、もう考えるのはやめな。何を言われたのか知らないが、ゼジムは頑張ったのだから、気にする事無いよ」

「そうだな」

ウェディの言った事はもつともなのだが、それでもゼジムは気持ちを切り替える事ができないでいた。

シェイビィは、女性を囲っている自分を見てどう思っていたのだろうか。

シェイビィは自分の事を恨んでいたのではないのだろうか。

自分だけ幸せになっている事が後ろめたくなった。

「相当こたえたみたいだねえ」

ウェディは大きく溜息を吐き、おもむろに小包を取り出した。それをゼジムに渡した。

「これでも食べて元気だしなよ」

ゼジムが小包を開けると、たくさんの小さな赤い実が姿を現した。そのどれも二個で一組になっており、赤い実から伸びた枝は中心で合わさっている。枝の中心を持てば、まるで恋人の様に実がくつつく。

「これは……チエイリ？」

呼び起される昔の記憶。

かつて、ウェディにたった一回だけ、チエイリの実が好きだと言った事があった。

「覚えていたのか？」

今までの陰鬱な気分が吹き飛んだ。

「あんなにロマンチックな事語られたらねえ」

照れながら答えるウェディを見て、ゼジムも照れた。

「ロマンチックな話って何ですか？」

ロンドは興味津津で二人の顔を交互に覗きこむ。

「いや、それはだな」

「俺はな、ウェディ。チエイリの実の様に離れる事のない愛を育みたいんだ。こいつらはたった一本の枝で繋がっているだけなのに、なかなかその枝が抜けない。まるで引き離される事を嫌うかのよう。なんて事を言ったのよ。ねえ」



若かりし頃の恥ずかしい話をされ、ゼジムの顔がチェイリの実の様に赤くなった。

「うわー良い話ですねえ」

ロンドはその時の二人を懂れているかのように瞳を輝かせた。

「それで、俺達もこのチェイリの実のように」

「だー！ わかったわかった。元気になった！」

慌ててゼジムはウエディの言葉を遮った。これ以上話されたら耳から火が出たとしても驚かないだろう。

「食べないのかい？」

意地悪そうな笑みを浮かべながらウエディは言った。

促されて、ゼジムは赤い実がついた枝を一つ取り、二つの実をいっぺんに口に含んだ。

甘酸っぱさが口の中に広がる。

「うまいな」

そう言つて二人にも食べる様にチェイリの実を渡す。

「本当。おいしいねえ」

「甘酸っぱい恋の味ですね」

ロンドは自分の中の世界に旅立ったようで、意味不明な事を言っていた。

「さっ、元気出たなら上に戻ろう。皆にも食べてもらわなきゃねえ」

「そうだな」

「そうですよー。私が皆にゼジムのロマンチック譚をお聞かせしますー」

武勇譚ならゼジムも喜ぶ所だったが、さすがにそれは勘弁したかった。

しかし、流れる様な動きでゼジムの手からチェイリの実をさらい走り出して言つたロンドを見て、諦めた。

「ウエディ……恨むぞ」

あんな話を皆にされれば、明日からのゼジムの呼び名がロマンチック男爵とか、ロマンチック貴族などと呼ばれてしまいそうだ。

「感謝されることこそあれ、恨まれる事なんてした事ないねえ」

飄々とゼジムの言葉を流すウエディ。

「そつだな。ありがとう」

陰鬱な顔をして上にいる女性達に会うより、ロマンチック男爵と呼ばれた方が幸せな事は確かだ。行き過ぎは困るが。

「しかし、よく買えたな。中々売っていないって言うのに」

チエイリの実を好むのは何も人間だけではない。

中でも獰猛な森林狼の好物であり、チエイリの木の辺りを根城にしている群れもしばしばいる。

故に、商人達も命がけで、時には命を落とす場合もあり、その希少さから高価なのだが、店頭に残っている事は稀である。

「そりゃあ、愛する人のためだしねえ」

ウエディは言いながらゼジムの首に腕を回した。

地下室には蠟燭の灯りしかないからか、その明かりに照らされているウエディの肌をとて艶めかしく映った。

「今日の相手をウエディに変更しようかな」

「ちゃんと順番があるんだから駄目だよ」

厳しい顔で注意した後、すぐにウエディの顔は笑顔に変わり、そつと口付けされた。

「駄目と言いつつこんな事するなんて」

「男を手玉に取る方法の一つなのさ」

ゼジムは苦笑しながら、今度はこちらからウエディの唇を奪った。二人とも目を瞑っていたからか、蠟燭の灯が不自然に揺れた事に気付かなかった。

翌日から、ゼジムは仕事に追われた。

石破師が居なかった間、赤子が生まれていたからだ。

十日程、満足な休みもなく街を駆け回った。

ようやく落ち着いてきたが、その時を待っていたかのように領主

から王からの主命を聞かされた。

バルン死没。ノーンに向かわれたし。

ゼジム達は僅か十日間程でタナを後にする事になったのだった。

魔獸

ノーンはタナと同じく、国境付近にある。

ザンガ国の最北西に位置していて、その広さもタナに引けを取らない。

ザンガ国内でも有数の豊かな街であり、他の街、村とは生活の水  
準が違う。

良質の木で立てた家がほとんどであるが、都市をぐるりと囲った石壁付近には違ふ家もある。

そこは、ザンガの悪党が住んでいると言われている。

警備隊が来ない理由の一つは、周りに知られていないからである。国を総べる者達や、何十年もこの地で住む者達ですら、広大な都市の全てを知っている者はいない。

この場所も、数多いその一つである。

森の国、と呼ばれるだけあり、街や村の中でも自然は大事にされている。

そこは、一見小さな森の様に見える場所だ。

その森の奥に行くと見える小屋は、手入れが全然されていない。何十年も放置されてきたかの様に、ところどころ穴が空いていたりしている。

中でも屋根は酷く、雨が凌げるだけマシと言ったところだ。

例え誰かに小屋を発見されたとしても、中にまで入り込む者は好奇心の塊である子供と、その中に用事がある者（、、、、、、）だけだろう。

気配を消し、足音すら立てず、一直線に向かっているにも関わらず、周囲を警戒しながら中に入っていた女は、その用事がある者だった。

「何の用ですか……？」

女は幼さが残る顔とは反対に鋭い視線を部屋の奥に居るはずの男

に向けた。

男はいつも急だった。だが、女に、男の下に行かないという選択肢は初めからない。

「相変わらずだな」

部屋の奥から、嬉しさをかみ殺した声が聞こえる。女に嫌な予感が走った。

また新しい石破師が来たのだ。

「そう怖い顔をするな。今回で最後にする」

言われるまで自分の顔が強張っている事に気付かなかった女だったが、表情を変える事はしなかった。

「では『私達』を解放してくれるんですね？」

一つ一つの言葉に力を込めて女は言った。女は仕事の事より、そっちの事が遥かに気がかりなのだ。

「それは、石破師次第だ。俺もお前も、相手にならないからな」

男が立ちあがる気配がした。

「お前に出来る事は新しい石破師があのかけ物を倒してくれるよう祈る事と、俺がそう仕向けやすいように情報を集める事だけだ」

闇の中からうつすらと現れる男を見て、女は感情を出さない様にするために必死だった。

男の顔も、髪の毛も、その動作も、服ですら、女には憎しみの対象だった。

この男がいなければ、この男に自分の秘密（、、、、）が見つかっていなかったら、今頃静かに、何に怯える事なく暮らせていたのだ。

「いつまで『私達』を縛るつもりなの？　たくさんのお金を集めたでしょう」

「リヤナ、俺はこれぐらいでは満足できない」

強欲を微塵にも隠さず男は言った。

リヤナと呼ばれた女は、予想通りだった返事に、ただ俯いた。

男は整った顔から想像もつかない程の歪んだ笑みを浮かべて、綺

麗な手で女の顎を上にした。

「そんな事はお前も知っているはずだ。だから、お前の武器でもある顔と体を使わずに、俺の依頼のみに力を入れた。それが妹（、）を助ける事ができる最速の道だから」

リヤナはきつ、と男を睨みつけた。

「そうよ、わかってるわ。そして、あなたが私の情報のおかげで大金をせしめている事も、私達を解放する気が無い事も」

リヤナが珍しく反抗してきた事に、男は眉を上げた。

「どうした？ まさか妹を助ける気がなくなったのか？」

「そんなわけないでしょう。ただ……」

言いかけて、リヤナは溜息をついた。男に何を言ってもわかってもらえない事はリヤナが一番知っている。

男は、人が傷つこうが悲しもうが、それを見て何も感じないのだから。

「なんでもないわ。……本当に今回が最後なのね？」

「ああ、俺が怪しまれては何の意味もないからな」

強欲な癖に、どこまでも臆病者、それが目の前の男、ゴンドだった。

ゴンドは人を騙して金を奪い取る詐欺師だ。

リヤナの情報を元に、その獲物の弱みに付け込み、大金を騙し取る事で、莫大な財産を得ている。

ゴンドには友はいない。いるのは自分の手足の様に動くリヤナと、その人質である妹だけである。

ゴンドは誰も信用しない。リヤナも全面的に信用されている気はしていなかった。信用されているのは情報だけだ。

恐らく、ゴンドが信用しているのは、情報と金だけだろう。

今回ゴンドが目論んでいる事で、二人の死者が出ている。

ここノーンに常駐していた石破師と、他国であるミリタリアから派遣されてきた石破師。

どちらも、ゴンドがけしかけた事で命を落とす事になっている。

リヤナは心を痛めていた。今までの、人を騙す為の情報を得る仕事にも散々心を痛めてきたリヤナだったが、それでも騙された者が死ぬ事はなかった。

ゴンドが狙う相手は、盗まれたと堂々と言えない様な金を持っている貴族達だ。

不正や、賄賂で得た金は、莫大な物であり、上流貴族であればそうではないが、弱小貴族では城や憲兵に言えば不審がられる。

なので、ゴンドが騙した貴族達は誰一人他言できないでいる。リヤナが得た情報を元に動いているのだから当たり前だ。

だが、今回は違う。

相手は人間ではなくて、化け物なのである。

人生で一番恐怖を感じたのは、あの時だ。

ノーンの常駐石破師の死体の先にある、森林狼とは比べ物にならない程の何か（、、、）の足跡。

化け物の姿を見てはいない。しかし、その足音を見たら、その化け物と遭遇した時の自分の未来を想像するのは容易だった。

だから、今回で最後と聞いて、リヤナは内心ほっとしていた。

最悪、あと一人（、、、）の犠牲者が出るだけで、人を死なせるような仕事をしなくて済むのだ。

自分達が自由になる為に、他人を犠牲にするのは覚悟していたが、人が死ぬような仕事に加担するのは嫌だった。

ゴンドに見つかってから、人道とはかけ離れている仕事をしている自覚はあったから、なおさらその気持ちを大事にしたかった。

もし、それすらも何も感じなくなれば、恐らく目の前の男と同じになっってしまうだろう。

「どうした？ 怖気づいたわけではないだろうな」

中々口を開かないリヤナが仕事を断ろうと思っていると思ったのか、ゴンドは顎にかけていた手の力を強めた。

五指が柔らかいリヤナの肉に食い込んでいく。

「そんなわけないわ。やるわよ」

痛みを顔に出さずにリヤナは平然と答えた。

弱い所を見せれば、ゴンドを喜ばせてしまう。そんな事は死んでもこめんだった。

「良い子だ」

ゴンドは顎にかけている逆の手で、まるで大事な玩具を触るように優しくリヤナの頭を撫でる。

そしてゆっくりと顔を近づけていく。

ゴンドの行動に気付いたリヤナの体に嫌悪感が走り、頭で考えるより早く、体が反射的にゴンドを突き飛ばした。

「何すんのよ！」

距離を開けながら怒鳴る。ゴンドはにやりと嬉しそうに笑っていた。

「そんなに嫌か？」

「当たり前でしょう！」

どこの世界に妹を盾に取り、脅す男と口付けをしたいと思う人がいるだろうか。

触られるだけでも嫌なのだ。その証拠に、嫌悪感は一向に収まるうとしない。

「もし俺が、一晚を共にしてくれたらおまえ達を解放すると言ったらどうするんだ？」

「抱かれるに決まっているじゃない」

リヤナの言葉が予想外だったのか、ゴンドは怪訝な表情を浮かべた。

その無言の問いにリヤナは答える様に続けた。

「妹の為なら、抱かれてもいいわ。けど、対価がなければ触られる事すら虫酸が走る」

妹の為ならば本当にそうしても良いと思っている。

それは、愛や心を捨て去った取引である。むしろ、それで自由になれるのなら喜んで差し出す。

リヤナはゴンドに言い放ったのだ。



妹の為に抱かれる事は良いと。妹の為でもなければ触られる事すら嫌だと。

例えば体を傷つけられても、心は傷つかない。

妹の為ならばこの世で一番嫌いな男にでも喜んで体を差し出すと。そんな事をして、リヤナは傷つかないし、自由になった途端忘れてしまうような出来事だと。

その言葉の意味に気付いたゴンドは初めて苛立ちを露わにした。

「俺がお前を抱いたとしても、お前は何も感じないだろ？」

ゴンドは職業柄、人が嫌がる事を突くのが得意だ。

だから、今回もリヤナが苦悩に満ちた表情を浮かべる事を想像していたはずだ。

全て、自分の思い通りになると思っているゴンドらしい考えだったが、リヤナは真っ向から反論した。

「ええ。痛みとか、傷とか、そんなものはその先の未来を考えたら気にもなりません」

言いきった。それと同時に、リヤナは僅かだが手ごたえを感じていた。

今までゴンドに対して女という武器を使えるとは思っていなかったが、彼の思惑を外し、神経を逆なでしている今ならば、自分の体と引き換えに妹を助けられるかもしれない。

微かな希望がリヤナに決心させる。

「それでも抱きたければどうぞ。声を上げる事も、悦ぶこともありませんが、それでもよろしければ」

「ほざけ」

ゴンドが走り寄って来たかと思えば、次の瞬間リヤナは宙を舞っていた。

ゴンドに投げられたのだ。

受け身をとるうにも、天地がわからないので動きようがなかった。それでも勘で地の方向を決め、受け身の態勢に入ろうとしたが、それより早く、リヤナの体は舞う事を止めた。

軽い衝撃の後で、自分がどこに投げられたのか理解する。

（ベッド……）

ゴンドに目を向けようと体を起しかけたが、胸を抑えつけられ、リヤナは再びベッドに体を埋めた。

「そこまで言うなら、証明してやろうじゃねえか」

言葉よりも早く、服を破り捨てられる。

突然の事で声を上げそうになるが、なんとか踏みとどまる。

声を出さないと言ったのは自分だ。

あまりにも唐突で、心の準備ができていなかったが、この機を逃すわけにはいかない。

「どうぞご自由に。けど、一回きり、そして事が終われば私達を自由にするという約束を忘れないように。秘密を守る事も」

声が震える事なく、淡々と言えた。心のどこかで安らぎを感じた。これで今までの苦勞から解放される。

そう思うと、不思議と落ち着いてきた。

「わかってる」

ゴンドがリヤナの顎を強引に上げ、首筋に吐息をかけるように口付けを繰り返す。

身の毛がよだつ程の嫌悪感がリヤナを襲うが、それすらも表情を変えずに我慢できた。

それなのに

ゴンドはリヤナの異変に気付き、止めた。

整った顔立ちを限界まで嬉しそうに歪めて、リヤナを抱き起こす。

「その様で、よくあんな事を言えたもんだな」

リヤナの頬に、一筋の涙が落ちていた。

ゴンドはそれを指ですくい取り、舐めた。ハチミツを舐めたのかと思う程、とろける笑顔を浮かべる。

「お前には祈るか、情報を集める事しかできないと言っただろ」

最大の強敵手を負かす事ができた時の様な、勝ち誇る顔でゴンドは言った。

リヤナは呆然とゴンドを見つめることしかできなかった。

「次来る石破師はゼジムとか言うやつだ。確か、女を囲っているやつだな。大層女を大事にする男と聞いた事がある。もしそいつが化け物を倒す事ができたら、お前達も拾ってもらえばいい。俺も大金がもらえて、お前達も幸せに暮らせる。いいじゃねえか」

ゴンドの長々と続く話は、一つもリヤナの頭の中に入ってこなかった。

その姿を見て、ゴンド嬉しそうに頷いた。

「明日には来るって話だ。今までと同じ様に、あいつが化け物退治に出たくなるような情報を探せ。金、名誉、なんでも良い」

そう言い残し、ゴンドは小屋を出ていった。隠れ小屋にも関わらず、大きな笑い声を上げて。

残されたリヤナは無意識の内に流れた涙に、何も考える事ができずに、涙を流し続けた。

何故泣いているのかわからなかった。いや、わかりなくなかった。自由になれるのなら、大丈夫だったはずだった。だから、今まで仕事を続けてこれたと思っていた。

だが、違った。教えてくれたのは皮肉にもゴンドだった。心がゴンドを拒否してしまったのだ。

異端の力に目覚める前にいた村。両親が早くに死んでしまったりヤナ達姉妹は、村の人々の厚意で不自由無く育つ事ができた。

そして、そこにいた心優しき少年。心惹かれていたのはリヤナもわかっていた。彼と過ごした時間は今も色あせることなく輝き続けている。

村を出る前に別れを告げた時も、その少年はとても悲しんでくれた。少年の親達も別れを惜しんでくれた。

異端の能力に気付かなければ、いつまでも一緒に過ごしたかった。しかし、それは夢に終わった。

そう、終わったのだ。異端者として生きなければいけない。ただの人に戻る事は一生ないのだから。

色あせる事もなく、輝き続けているその思い出に蓋をして、誰にも見せる事なく、心の奥底で楽しむだけに留めていた。

それを、よりもよって一番知られたくない人間に見破られたのだ。

彼の思惑は、それではなかったけれど。そんな事は関係なかった。妹の為。覚悟。そのためなら体を傷つけられても心は傷つかない。そのつもりだった。だが、それはリヤナが無意識に言い聞かせた事だったのだ。

何年も毎日欠かさず言い聞かせ、心の表面をようやく納得させたのに、それをゴンドもいとも簡単に壊したのだ。

嗚咽が止まらない。心から、あの日の思い出が堰を切った様に涙として流れる。

愚かだった自分を、ぎりぎりの所で助けてくれた。だが、それは必死に押しこんできた想いを甦らせる諸刃の剣だった。

感情を抑え込める事だけを考えていたリヤナは、この涙を止める方法を知らなかった。

？

「それは、私にもわからないのです」

人の良さそうな男が困った様に言った。

ゼジムは怪訝な表情を浮かべるしかなかった。

ノーンに着き、領主の屋敷に向かう途中に民に話を聞いても、ろくな答えが返ってこなかった。

領主なら何か知っているかもしれないと思い、聞いたのだが、領主の反応は民と変わり無い。

黙秘をしている様子もなかったが、ゼジムは納得できなかった。

（じゃあ、なんだ？ 石破師が勝手に死んだとでも言うのか？）  
喉まで出かけるが、なんとか留める。

相手はミリタリア国の人間ではなく、ザンガ国の領主である。下手に深追いして、ミリタリアの評価を下げられても困る。

ゼジムはノーンに派遣した理由は、ザンガ国への貸しを作る為だとミリタリア王アグシューゼは言っていた。

目の前の領主が何かを隠していたとしても、それを追求する事はできない。証拠が揃ってでもない限りは、言いがかりととられてもしかたないのだ。

それでも、ゼジムは言ってしまった。

「本当ですか？ お言葉ですが、ザンガ国だけでなく、ミリタリアの石破師も死んでいるんです。我が王はその事について、ザンガ国を責めていませんが、理由が理由なら戦になってもおかしくない事だと思うのですが、わかっていますか？」

心中の苛立ちを抑え、なるべく穏やかに言えたのだが、領主は顔色が悪くなってしまった。

「ええ……それは承知しているのですが……私にも本当にわからないのです」

これ以上言うと、倒れてしまうのではないかと思う程、領主の顔

色は悪い。高級な布でしきりに汗を拭いているが、その傍からすぐに新しい汗が出てきてしまい、一向に領主の手が止まる事はない。

（これは、本当に困ったな……）

ゼジムはミリタリアで王にタナ行きを命じられた時から、気になっ  
っていた。

石破師が死んだ理由をなぜ教えてくれないのか。ミリタリアへ派遣を要請するのならば、その理由を言っているのが当然だ。

そして、要請したのは他でもない目の前の領主なのだ。

その領主が知らないなんて、ゼジムは考えもしなかった。しかも、領主が嘘を言っている気もしない。

全ての事が不明瞭だ。確かな事は石破師が二人も死んでいる事だけだ。

「死んだ理由はご存じないのですか？」

ゼジムは食い下がった。自分の身にも同様の事が起こるかもしれないと思うと、簡単に引き下がるわけにはいかない。

自分だけならまだいいが、女性達を危険な目に遭わせてしまう事はどうしても避けたかった。

「申し訳ありませんが」

しかし、領主の口から有益な情報を出てこない。

「では、二人ともどこで死んでいたのですか？」

何気なく聞いた事だった。

「それが……」

領主の様子が若干おかしくなった。言いにくそうにしている。

「教えてください」

ゼジムは強い眼差しで領主を見つめた。

領主は逃げる様に目を逸らした。それで何かを隠している事を確信した。

「何もわからず殺されるのはごめんなんです。お願いします」

ゼジムは深々と頭を下げた。

しばらくの沈黙の後、ゼジムの頭の上から溜息がこぼれた。

「……絶対に言わないでくださいね。あと、絶対に誰にも言わないでください。そして最後に、この話を聞いてもあなたはこの街から出ないで、選別師の仕事だけに専念してください」

やけに注文が多かった。中でも、最後の言葉がよくわからない。話を聞くと街の外に出なくなるのだろうか。

今分かった事は、二人の石破師は領主の話を聞いて街の外に出た事で殺されたのだと言う事だけ。

これだけの情報では安全を確保できない。

ゼジムは少し考えた後、頷いた。

領主はもう一度大きく溜息を吐き、流れ出る汗を拭いていた手を止め、ゆっくりと話し始めた。

「つい最近、北の森に化け物が現れました」

「化け物？ どういった意味のだ？」

化け物とは大型で、人間の戦士では手に負えない魔物を指す。

その基準は、人間が倒せるか倒せないかで変わり、大型の魔物であつても動きが遅く、弱点を知られているトロールなどはただの魔物と呼ばれる。

他には、その種族の珍種や異常種などに対して使われるが、それもやはり人間が手に負えない場合である。

「とても、とても大型の化け物です。足跡しか見ていませんが……石破師が二人も殺されていますから……」

確かに、異端者である石破師がもしもその魔物に殺されたのなら、人間である領主が化け物と断定しているのも頷けた。

「森にいる魔物と言ったら、森林狼や、トロール、ゴブリン等がおりますが、北の森には？」

大抵、森の中にいる魔物は決まっている。森を愛する魔物や、立ち入りにくく隠れやすい森を拠点にする魔物、果物が好きな魔物など様々な理由で森に生息している。

例外は通称魔の森と呼ばれる場所で、そこに関しては常識が通用しない。魔の気が集まる場所とされ、それに呼応した魔物達の巣窟

となっている。

「はい。森林狼やゴブリン、コボルト等もありますが、化け物はそれの異常種とは思えませんでした」

ゼジムは小さく唸った。異常種ではないのだとしたら。只の新種で、何匹もいるのだとしたら、その化け物は大変な脅威となる。

しかも、その化け物が街の近くの森にいるとなると、事態は深刻だ。

「では、討伐隊は出しているのですか？」

領主は力無く首を振った。

「いえ、準備はしておりますが、動いてはおりません。民にも余計な恐怖を与えないようにまだ言っております」

「では、何故本国と連携をとらないのですか？ 放っておいてなんとかなるものでもないでしょう」

「我が君は被害が出たのなら対処をする、と仰っております。今の所森からはでておりませんし……」

「被害が出てからだ」と！

自分を忘れ、ゼジムは憤慨した。

王と言う者は民に被害が出る前に事を収めるものだ。厳王アグシユーゼが良王と呼ばれる所以でもある。

彼は、異端者が何かを仕出かす前に、排除する事で何も起こらない様にしている。

異端者であるゼジムはアグシユーゼのやり方を認めてはいなかったが、ザンガ国王の被害が出てから動き出すやり方は、それより酷い。

被害が出てからでは、それでは何も守れない。

「もし、それが民に知られたら、支持が急落しかねない事ではないか。そんな愚王」

「ゼジム殿。私が誰かお忘れか？」

領主の目が急に厳しくなった。

ゼジムはハッと我にかえり、申し訳なさそうに頭を下げた。慌て



て言葉遣いを正した。

「すいません。頭に血が昇ってしまっ……」

言い訳以外の何物でもない。他国の王を侮辱するなど、剣を突き付けられてもおかしくない事だ。

しかし、領主はそれ以上何もいわず、大きく嘆息しただけだった。「あなたが言いたい事はわかっております。その思いはザンガ国に忠誠を誓う兵士達の誰もが思っている事でしよう。しかし、私達はその王の臣下なのです」

領主の気持ちはゼジムと同じようだった。そして、領主の言葉は、彼だけの不満ではなく、臣下達の不満となっているようだった。

ゼジムは何か言おうとしたが、領主の口の方が先に開いた。

「今は、国王の事は良いのです。問題は北の森にいる化け物。そしてゼジム殿の身分」

「私の身分？」

「あなたミリタリア国の、それもミリタリアーと言われている程の石破師です。ですから、あなたには絶対に北の森に行ってほしくないのです」

ゼジムは一瞬領主が何を言いたかったのかわからなかったが、領主の言葉を咀嚼していくうちに領主が言いたい事に気付いた。

ゼジムはそれを受け入れるわけにはいかなかった。

だが、ゼジム個人ではなく、ミリタリアの石破師という身分を持つ者としてならば、領主の言葉に従うのが一番だと言う事もわかっていていた。

「俺が死ぬ事で、ザンガ国に不利な状況になるんだな？」

領主は無言で頷いた。

ふと、ゼジムはミリタリア王のアグシューゼの意図はなんなのかと考えた。

ゼジムが死ぬ事により、ザンガに対して色々な面で優位に交渉ができるだろう。

だが、優秀な石破師が死ぬ事になる。

アグシューゼの言葉を思い出す。

ちょうど優秀な新人石破師が見つかったのだ。

突如として現れた、ゼジムに匹敵すると言われている石破師。

地方から定期的に送られてくる報告書を見ても、ゼジムと肩を並べられる程の前途有望な石破師は見つからなかった。

だから、ゼジムの代わりにミリタリアに常駐する石破師は優秀だとしても、自分より腕が落ちる石破師だと判断していた。

一人の死者も出さずに終われば我が国の石破師がいかに優秀か知らしめる事ができるし、ザンガに一つ貸しができるわけだが、逆に選別の失敗は我が国の評価を下げる事になり、ザンガへ借りを作る事になる。

本当にそうなのだろうか。目の前にいる領主の話を聞くと、ゼジムの死は、ザンガへの借りを作ると言うより、ザンガへ貸しができる気がした。

だが、もし新しい石破師がゼジムより優秀だとしたら。

ゼジムがいらないと判断されたのだとしたら。

（いや……それはないか）

ゼジムが国の中でも下位の石破師であれば、ザンガ国への貸し作りの為の捨て駒として派遣される可能性もあったが、国一番の石破師であつたゼジムを捨て駒にする可能性は無いに等しい。

それでも、ゼジムは自分の考えに納得ができなかった。

アグシューゼは確実に化け物の存在を知っている。それを知った上でゼジムを派遣した気がした。

そう思う理由は、アグシューゼと最後に会った時の、彼の変化だった。

いつも厳然とした王が、心を手放してしまったのでないかと思う

程、虚ろだった。

（わからない……何もわからない）

いつも通りだった。考えても、他人の意図する事などできやしない。

誰も皆、自分よりも頭が良い様に思えた。事実、そうなのだろう。でも、いや、だからこそゼジムは思った。

もし、自分が誰かが描いた道筋を歩いているのだとしたら。

その時々、自分が納得した行動をしよう、と。

納得できずに、誰かの思い通りになるのは耐えられなかった。

人形の様に操られていようと、自分の意志だけは守る。

例えそれが、後にどれだけ自分を苦しめてしまふ選択だったとしても、その選択は自分が納得してするものだ。後悔はないはずだ。

ゼジムは領主を真つすぐに見た。

今、自分が納得できる選択は

「化け物に会いにいけます」

他の国であろうと、民は守るべきものだ。それは、ゼジムの信念は、譲れない。

「なっ、何を言っておられるのですか！」

領主が目を一杯に開きながら、驚愕していた。少し、怒っている気がした。

それが、民を守るために出した領主の結論に従わなかったからだ。とゼジムは分かっていた。

目の前にいる領主は本当に民を大切にしている。ザンガ王よりもそんな領主を見て、少しでも力になりたいと思った。

彼が懸念している事にならずに済む様に。

「大丈夫です。死ぬ気はありません。それに化け物退治をしようというわけでもありません」

「ならば何故会いに」

領主は言いかけ、前のゼジムの言葉の違和感に気付いた。

そう、ゼジムは倒しに行くとは言っていない。

「はい。偵察、というやつです。相手がどんな化け物かわからない中、攻め込んでも全滅するのが目に見えています。相手はすでに石破師を二人も殺されていると思われるのですから」

「それは、確かにそうですが……」

「大丈夫です。相手を見極めに行くだけです。絶対に戦う事はしません」

今はまだ、とゼジムは心の中で付けくわえた。もしもの時は、自分もたたかわなければいけないと思っていた。

「ですが……」

「わかりました。もし仮に私が死んだ時の為に、一筆書いておきましょう。私の独断で化け物退治に出た事にしましょう。あなたは必死に止めようとしたが、私が強引に行ってしまった、と」

「何故……何故そこまで？」

「私がそうしたいからです」

ゼジムはきつぱりと言った。

「他国とはいえ、民は民です。今はまだ森の中に止まっています。冬になれば森の中で餌を見つける事も難しくなるでしょうから、化け物が街に来る可能性もあります。今回討伐ができなかったとしても、相手の事が少しはわかっていれば、対策の一つでも浮かんでくるかもしれませんから」

領主はハッと息を呑んだ。

「あなたはそこまで……」

領主は笑った。どこか吹っ切れたような、重い憑きものがとれたような、汗まみれのさつきまでとは違い、とても清々しい顔をしていた。

「頭の良い、民を想うあなたに負けました」

ゼジムは我が耳を疑った。

「頭が良い？」

「ええ。それに、私と違って現状に不安になる事もなく、先を見て考えている。もしかしたら、あなたは良き王になれるかもしれないませ

んね」

今までに聞いた事がない称賛の言葉に、ゼジムは背中がむずがゆくなる。

「そんな……私はいつも相手の考えが読めずに苛々とした毎日をごす程度の……馬鹿者ですよ」

「ふむ、騙し合いというやつですか。そんなものは、それが得意な人に任せればいいですよ」

「えっ？」

「あなたは、あなたが得意な事をやればいいのです。全て自分でやると思うから、迷い、悩んでしまうのですよ」

領主は、子供に向ける様な暖かい笑みを浮かべた。

ゼジムは、少し前に似たような言葉を女性達に言われた事を思い出す。

一方的に守るのではなく、助け合う。それは、自分の至らない所は頼っても良いと言う事だ。

彼女を守る責任はあるが、どうしようもない状況になるまでは、彼女達もただ守られているだけに納得はしないのだ。

ゼジムは、領主の言葉に心がふっと軽くなった気がした。

つい先日言われた事だったのに、もう記憶の片隅にまで追い詰められていたようだ。

「そうですね。頼ってみようかと思います」

ゼジムも笑った。前までは想像もつかなかったが、今なら、相談を持ちかければ、嬉しそうに話を聞く女性達が頭に浮かぶ。

「その方が良いでしょう」

言葉の終わりに、領主の顔つきが締まった。

「では、領主として要請できませんが……お願いします」

彼は領主としてではなく、一人の人間として頼んできた。

民を守ろうとするゼジムに敬意を表して。

「お任せを」

ゼジムは決意を露わにした表情で、彼の頼みを、自分の想いを、

聞き入れたのだった。

？

領主はそれから、ゼジムに幾つかの情報を与えてくれた。

ゼジムはそれを頭に叩き込み、すぐさま宿に帰った。

そして、思い思いに寛いでいた女性達に相談を持ちかけた。

今回の旅に同行したのはトウレネ、ミルファー、ロンドの三人だったが、何故か遊びに来ていたカーナもいた。

話し合いでは埒があかず、最終的にくじ引きで外れをしたのはカーナとティナであった。

しかし、それを不服とし、彼女の信条である、自分の気持ちに嘘をつかない、を実行して現在ここにいる。

ティナも同じ様に遊びにこようとしたのだが、レイサンに止められてしまい、泣く泣く屋敷に止まったのだった。

「では、裏で化け物退治をしようとしている一団がいるのですね」話を聞いて、ミルファーが簡潔にまとめた。

領主があれから話した事は、二つ。

一つは、化け物の第一発見者である男と一つの契約をしていた事。ザンガ金貨一万枚と引き換えに、化け物を退治すると言いだしたのだそうだ。

領主はそれに条件をつけた。民には一切化け物の話をするな、と。今でも民達が化け物の存在を知らない事から、領主の条件は守っているようだが、当の化け物退治に関してはまったく動いていないと言う事だった。

そして、もう一つ。石破師二人の死んでいた場所だ。

ザンガの石破師は、森の中で死んでいた。だが、バルンは街の近くの草原で死んでいた。

血跡がない事からその場で殺されたのだと思われ、化け物が殺したかどうかかわからないらしい。

化け物か、化け物を装って暗殺したのかはわからない。

「ああ、だから俺はまずその契約をした男に会いたいと思うのだが」大金を化け物を倒した報酬として求めた男と協力するのは少し嫌だったが、その男が魔物狩りでもやっているのならば仕方のない事なのだ。

魔物狩りは、人に危害を加える様な魔物を相手に生きている猛者達である。

自分の命を危険にさらしてまで、大金を手にしようとする無謀者と言われたり、魔物を倒す事が強き者の役目とされている国の兵士達と違って法外な報酬を望む魔物狩り達は悪者として蔑む人もいる。だが、彼らはもらった金で生きていくのだから、それも仕方がないとゼジムは思っている。

彼らは、普通の人間達ができるが出来ない代わりに、魔物を倒す事ができるのだ。

唯一の得意な仕事をこなしているだけである。それに、結局報酬を与えているのだから、誰にも文句は言えない。

それでも、魔物狩りと思われる男と協力するのは最終手段としたかった。

「それより先に、化け物とちょっと戦うつもりなのですね？」

トウレネは、普段通り物静かではあるが、緊張した面持ちで言った。

ゼジムは子供をあやすようにトウレネの頭を撫でる。

「そうだ。俺達でできる事なら俺達だけでやる方が良い」

そうすれば、お金はかからない。ただでさえ、ゼジムの派遣してもらっているせいで、金が動いているかもしれないのだ。

その上、ゼジムが、次のザンガの石破師が来るまで何事もなく無難に選別できれば、ザンガはミリタリアに対して大きな借りができる事にもなる。

さらに金貨一万枚を渡さなければいけないとなると、化け物の脅威を取り除けたとしても、ノーンの情勢は暫く悪化するだろう。

「そもそも、見た事もない化け物に金貨一万枚って多すぎないかい



？」

カーナは納得いかないのか、ぶつぶつと愚痴っていた。一万枚もあれば、一生贅沢しても暮らせる。

上流貴族の様に湯水の如く金を浪費しなければ、の話だが。

カーナの不満に、ゼジムは力無く笑って答えた。

「なんでも、領主殿も腕の立つ魔物狩りに何回か頼んだようなのだが、倒せた者がいないらしい」

その噂をどこから嗅ぎつけ、法外な報酬を要求したのだろう、と領主は言っていた。

「それにしても、折角遊びに来たのに、ゼジムが暇じゃないなんてカーナががつくりとうなだれた。

「仕事に来てるんだから当たり前だろう」

ゼジムはしよげているカーナに呆れた。まさか本気で遊びにきただけなのかもしれない、という思いが頭を過ったが、頭を振ってかき消した。

「多分、ゼジム様が考えた通りだと思われそうですわ」

トウレネが溜息を吐いて、ゼジムの思いを肯定した。

「二人とも、私がただ遊びに来ただけだと思ってるね？」

カーナはうなだれたままだったが、その声音と、危険な匂いがゼジムとトウレネの体を強張らせた。

美しく長い金髪のせいで、カーナの表情は確認できないが、それで逆に良かったのかもしれない。

「い、いや、そんなわけないじゃないか」

「え、ええ。勿論そんな事ありませんわ」

ゼジムとトウレネが口を揃えて言ったが、白々しいにも程があった。

それを察したカーナはおもむろに立ち上がった。

その異様な雰囲気にも呑まれながらも、ゼジムはカーナを落ち着かせようと取り繕う。

「いや、本当カーナと一緒にいる事ができて嬉しいなあって考えて

いたんだ」

「問答無用！」

「はい、そこまでにして」

カーナが飛びかかろうとした瞬間、三人の間、丁度中心となる所に、ミルファアが当然のごとく割って入った。

「ミルファア！　そこをおどき！　その二人にお仕置きをしないといけないのよ！」

「はい、カーナ、座ってください」

三人が繰り広げていたドタバタ劇に興味も示さず、ミルファアは淡々と言った。

カーナは諦めきれなかったが、ミルファアの目を見て、渋々その場に座った。

彼女を怒らせる事は、レイサンの前で彼女が知らない事を話す事と同様、ゼジム家にしてはいけない決まりだった。

それは不文律とされ、当人であるミルファアとレイサンは知るよしもない。

沈黙に落ちた部屋の中、ミルファアは一つ咳払いをした。

「では、まずどちらからやるのですか？　その方を探すのも結構大変だと思われますが……」

ミルファアは凜とした声で言った。常に毅然としている彼女は癖のあるゼジム家の中で、ウエディと並んで、本筋を外れる事なく話ができる貴重な存在だった。

物静かなトウレネだが、その思考は常にゼジムを中心としているし、ロンドも右に同じ。

レイサンは途中で気になった事を全力で聞いてしまっし、カーナとティナは面白い話に転がってしまう。

ミルファアとウエディはゼジムの大切にしていながらも、中立的な意見ができる。

誰もゼジムの言葉に賛同しては、いずれとんでもないミスをしかねない。

全員、間違いだと気付いてそれを言えるが、ゼジムが強く言えば、願えばそれを受け入れてしまう。

ミルフアーとウェディは絶対負けることなく、諫める事ができるのだ。

だから、二手に分かれた時はウェディとミルフアーが同じ場所にいる事はない。

ウェディが女性達をまとめる主宰としたら、ミルフアーは参謀である。

そのずば抜けて冷静な思考と、頭の良さ、中立さで公平に判断するのがミルフアーだ。

「そうだな。どっちも大事だが……」

先程までのドタバタ劇とは一転、ゼジムは真面目な顔で唸っていた。

ミルフアーが中心にいただけで、まるで国家機密に関する会議の様な雰囲気になる。

「私は二手に別れた方が良いと思いますわ」

トウレネも同様に、真剣な表情で進言している。

ミルフアーは静かにトウレネを見つめ、「よろしい」と言った。

ゼジムはミルフアーが段々参謀と言うよりも、学校の先生の様になるのではないかと危惧した。

そのうち、一日の予定計画まで練られそうである。

「今、現在五人います。ロンドは化け物に敵いそうになかった時の保険の為にゼジム様と一緒に森へ行く偵察班へ」

今までただ楽しそうに眺めていただけだったロンドは、突然名前を呼ばれ、少し跳ね上がった。

ロンドは大勢でいる時は、会話に入らずに、眺めている事が多い仲間に入れないのではなく、入らない。ロンドは皆のドタバタ劇を見るのが幸せだといわんばかりの笑みで見ているだけなのだ。

だから、それを知っている皆はあえてロンドを会話に入れようとはしない。どうしても意見が必要な時を除いて。

たまに、悪ふざけが過ぎるカーナやティナに遊ばれている時もあるが。

「はっ、はい。わかりました」

「よろしい。後は」

「ちよちよちよ、ちよつと待って！」

ミルファアの言葉を遮り、カーナが慌てて口を出した。

ゼジムはカーナが言いたい事がわかったので、ご愁傷さま、と心の中で呟いた。

「何でしょうか？」

「いや、五人つて完全に私も頭数に入っていない？」

「当たり前でしょう。折角居るのだから、使わないでどうします。

もしや、本当に遊びに来ただけとは言いませんよね？」

ミルファアはさっきのドタバタ劇の間、思案していたのだが、周りもちゃんと見ている。

人を見抜く事も得意であり、カーナの考えなど既に知られていて当然だった。

「そ、そんなわけないわよ。嫌ねえミルファアったら、あっはっは」  
乾いた笑いが部屋に響く。

誰もが、カーナが本当に遊びに来ただけなのだと気付いたが、口にはしなかった。

「では、お座りください」

ミルファアの無駄に凜とした声音の圧力に、カーナは諦めて腰をおとした。

可愛そうに、とは思ったが、同情はしなかった。

ただ遊びに来たカーナが全面的に悪い。

「それで、偵察班はあとはカーナです」

カーナはうなだれたまま手を上げ、ミルファアに答えた。

「直接的な攻撃能力のあるゼジム様とカーナで行ってもらう事で、相手の実力を分析します。今いる五人で、最高の攻撃力を誇る二人で駄目な場合、結構厳しいですが……」

カーナは斬風師と呼ばれる、二文字師である。一文字師が多い中、ゼジムを除いて二文字師カーナとロンドだけだ。

水操師であるロンドは異能によつての攻撃はできない。対する斬風師であるカーナは、風を集約させて刃と化す事ができる。

カーナ自身も、丸太も一刀両断できる程の術師であり、切り裂く事に関しては右に出る者はいない。

ミルファアの人選は確かに現状の最善だった。

「では私とミルファアさんで魔物狩りの方を探すですね」

「そうです。私は愛想もないし、大して役に立つとは思えませんが、麗しき貴婦人を一人で街に出しては何があるかわかりませんし……」

ミルファアは自身さえ冷静に分析する。

それが、最善を選択できる最大の理由だ。自分も相手も、過大も過少にも評価しない。

だが、それだけではあまりにも悲しすぎるので、ゼジムはすかさず言った。

「ミルファアも綺麗だろ」

「ええ、わかつてはいますが、私は言うなれば地味な美人。その他大勢の中では大層目を引く麗人となりますが、我が屋敷にいる女性陣の中では霞んでしまいますから」

ミルファアの言葉に、ゼジムは何も返せなかった。確かに、ミルファアの言う事も一理ある。誰もが振り向く美貌なのだが、他の面々に比べると、どうしても地味な印象になってしまう。

言い方を変えれば、固い印象だ。男性が気軽に話しかけづらい雰囲気醸し出しているのだ。

ゼジムからしてみたら、変な虫が寄り付かないのはとてもありがたい事であるし、勿論彼女の魅力はそれだけではないので気にしていないのだが。

ゼジムが何も言わないので、ミルファアはさらに持論を展開する。「例えば、トウレネはおしとやかなで殿方に安らぎを与えられる美人、ロンドさんは子供っぽく甘えん坊な、殿方の心をくすぐる幼美

人、カーナは魅せる妖艶美人、ティナは殿方に元気を与えるさわやか美人、ウエディさんは安心して頼れる姉美人、レイサンは金髪美人」

金髪美人！？ と突っ込みたくなつたのはゼジムだけではないだろう。

「そういうわけで、地味美人である私はトウレネと一緒にいれば、それほど注目されません。間違つてもトウレネと注目が二分する事はありません」

冷静で中立な評価ができるミルフアーが言っているので、それは確かに正しいのかもしれないが、その本人が言つと、とても気まずい。

おしとやかと言われたトウレネは表情を変えていないが、ロンド、カーナ共に、何と言えは良いのかわからない、といった気まずそうな、呆れているような顔をしている。

ゼジムも勿論何と言えは良いかわからない。

ミルフアーも綺麗だって、と彼女の意見を否定すれば、その何倍もの反論が待ち構えている事は知っている。

かと言つて、そうだな、と言えは、本人は納得するかもしれないが、それはこちらの本心ではない。

自分の意見を曲げたくはないが、彼女の長談義を聞いている時間が今は無い。

ならば、この状況を打開する方法は一つ

「よし、行くぞ！」

否定も肯定もせず、部屋から出ていく。

ゼジムは、強引な逃げの一手を選択したのだった。

？

レイサンは呆氣にとられていた。  
ゼジムが所有しているこの屋敷には、能力の修行をする道場がある。

ウェディが、ゼジムに守られるのも良いけど、もしもの時の為にも自分で身を守る術ぐらいは身につけておいた方が良いと言う事で用意された場所と聞いてから、レイサンも自身の能力を使いこなす為に頻繁に来ていた。

旅をしている最中は周りに見られる危険があるので、どうしても修行ができなかったので、怠けていた分を取り返す為に勢い込んで足を踏み入れたのだが。

修行場の一角にただならぬ雰囲気を感じ、目を向けるとそこには、壁に立てかけられた、ぐるぐるに巻かれた布団を力いっぱい殴っているティナの姿があったのだ。

その勢いは正に神話に出てくる悪鬼の如し。

布団の上部には紙が張り付けられており、なにやら女性らしき似顔絵が描かれている。

「どうしたのかしら……」

今まで暮らしてきて、見たこともないティナの姿を、レイサンは呆然と見る事しかできなかった。

しばらくすると、後ろに人の気配がした。振り向くと、ウェディがいた。若干困った顔をしながら、頭を掻いている。

「ウェディさん、あれは……？」

「ああ、あれは、ただのストレス発散だねえ」

「はあ、そうですか……」

そうは言ったものの、ただの（、、）ストレス発散には見えな  
い。

その様子を察して、ウェディは苦笑を洩らした。

「本当に、ただのストレス発散だよ。ティナはいつもあんな感じだよ」

「いつも?」

今まで一緒に過ごしてきて、彼女のあれほど激しい修行風景など見た事がない。

一番話をして、一番一緒に過ごしてきたのだ。

その自分が見た事がないティナの姿がいつもの事なんて信じられない。

「そう。いつもの事。レイサンはまだ、ゼジムが好きなわけではな  
いからわからないだろうけど、カーナが抜け駆けした事に腹が立つ  
てるんだよ」

「どういう事ですか?」

まるで理解できないレイサンに、ウエディは優しく諭してくれた。  
「カーナは今回同行できないはずだっただろう? それを無視して  
彼女はゼジムに同行した。私達がゼジムと一緒にいる事ができる時  
間は、実は細かく決まっているんだよ」

初めて聞かされた事に、レイサンは目を丸くした。レイサンから  
見たら、誰もが好き勝手にゼジムに近づいている様にしか見えな  
かったのだ。

「誰もがゼジムを愛してるし、他の女性達の事も好きだけど、それ  
はルールを守ってこそなんだねえ」

「ルール? 好きな人と一緒にいる時間もルールに縛られているの  
ですか?」

レイサンの、包み隠さない真つすぐな言葉に、ウエディは再び苦  
笑した。

「そうだよ。だって、ゼジムが皆を等しく愛しているのだからねえ。  
だからと言って、一人が好き勝手にゼジムの時間を奪っていたら、  
この関係は成り立たないからねえ」

「それは何か……おかしくないですか? その、女性達の気持ちを  
蔑ろにしている様な気がします」



レイサンは、ゼジムがそのルールを作ったのだと思いこんでいた。実際、彼なら作りかねないのだ。

ゼジムという男は、問題を解決するタイプではなく、問題をうやむやにするタイプだとレイサンは思っている。

うやむやにして、先延ばしにする事で、いつも痛い目を見ているはずだ。

ウェディはレイサンの言葉に笑った。苦笑ではなかった。

「ふふ。ルールを作ったのは私達だよ。ゼジムが誰ひとり特別扱いしないなら……いや、誰もを特別扱いするなら、私達もそれに従う事にしたのさ」

まるで、レイサンの心中を盗み見た様な言葉だった。レイサンは一際大きく目を開いたが、自身の心を見透かされた事を隠す様に咳払いした。

「では、カーナさんは自分で作ったルールを自ら破ったのですか？」  
「あの子は激情型だからねえ。我慢できなくなると暴走してしまうのさ」

確かに、カーナを見る限り、我慢できそうになかった。その全てが大胆で、彼女が我慢していたなんて想像もできない。

「と、言う事はカーナさんが暴走する度に、ティナさんはああなるのですか？」

「そう。私達が作ったルールの中に、他の女性に嫌がらせをしない、危害を加えないってルールもあるからねえ。まあ、そんなルールを作らなくても、誰もそんな事をしないのはわかってるんだけど、ルールにしていた方が、一時の感情を抑える事ができると考えてねえ」

ウェディは最後に困った様な顔をして、カーナにはまるで意味がなかったけど、と付け加えた。

ウェディの話を聞いて、レイサンは大体の事を把握できた。

今まで、女性達の仲の良さを疑った事もないし、今回の話を聞いてその考えを変える事は無かったが、普段接している時には決して

浮き上がってこない女性達の一面を知る事ができた気がした。

「色々教えてくださってありがとうございました」

深々と頭を下げるレイサンに、ウエディは笑みを浮かべて、いいよ、と返した。

レイサンはその時のウエディに何か引つかかるものを感じた。

それは、答えが出ない問題だと思ったが、ティナの姿を再度見て、ピンときた。

「ウエディさんはどうしてあならないのですか？」

一瞬、ウエディが痛い所を突かれた顔をした事をレイサンは見逃さなかった。

「ふふふ。私は誰よりも大人だからねえ。じゃあ、後はよろしく」

しかし、レイサンが追求する前に、ウエディは別れの言葉を残し、そそくさと修行場から出て行った。

レイサンは追いかけようか迷ったが、ウエディの最後の言葉が気になって、その場を動けなかった。

「後はよろしく……？」

呟いて反芻していたその時、不意に異様な雰囲気近づいた気がした。

背筋にぞくりと悪寒が走る。恐る恐る首を回すと、先程まで隅で布団を殴打していたティナが目の前にいた。

完全に目が座り、いつもの明るさ、爽やかさは微塵も感じられない。

「レイサン、ちょっと聞いてくれる？」

一文字一文字に言い様のない怒りを感じ、レイサンは黙って何度も頷く。

今、彼女の意に反したら、恐ろしい事が起きるかもしれないと、レイサンは本能で察した。

その後、レイサンはティナにお手洗いに逃げる事も許されずに延々と愚痴を零され、事あるごとに質問攻めをしてきたレイサンは、相手の気持ちにちよっぴり気付いたのだった。

ティナから解放された時には、外は真っ暗となっていた。

長い時間同じ態勢でいたせいか、体が痛い。

このまま、寝てしまおうかと思っていたが、どこから良い匂いがしたので、思わずそちらに足が向いてしまう。

匂いの出所は厨房だった。中に入ると、ウエディが上機嫌で料理を作っていた。

「ウエディさん？」

声をかけると、ウエディは柔らかい笑みを浮かべた。

「御苦労様。ティナとエレナも呼んできてくれるかねえ？ ご飯にしよう」

レイサンは、彼女が修行場の時から、やけに機嫌が良い様に思えた。

そもそも、普段滅多な事では怒らないティナがあればどこまでに機嫌を悪くしているのだから、いくら年をティナより少しばかり重ねているとはいえ、全く怒らず、逆に上機嫌なのはよくよく考えてみるとおかしかった。

そう思ったら、調べずにいられないのがレイサンだ。注意深くウエディを観察する。

「あつ、その耳飾り……？」

ウエディの体をくまなく観察し、耳の辺りに目を移した時、視線がそこに集中する。

長い旅をしている最中も、ウエディは耳飾りをしていたが、今彼女がしている耳飾りは見た事が無い。

ミリタリアでは中々お目にかかれない、チエイリを模したガラス細工の耳飾り。

レイサンはパツと閃いた。

「もしかして、ゼジムさんに買ってもらったのですか？」

レイサンの問いに弾かれた様に顔を上げたウエディは、照れくさそうに頭を掻いた。

「本当に鋭いねえ」

その答えで、レイサンの頭の中に漂っていたウエディに対する疑問の欠片達は、次々と組み合わさっていく。

「だから、ティナさんの様にはならなかったわけですか」

思慮深いウエディが暴れる様は想像できないが、ティナも暴れる様には見えない。

ウエディにだってそうなる可能性はある。しかし、ウエディはティナとは逆に上機嫌だったのだ。

それが、ゼジムから贈り物を貰っていたとなると、合点がいく。しかし、一つ納得したところで、更なる疑問が浮かんだ。

「ゼジムさんは誰か一人を特別扱いしないのではなかったですか？」  
ウエディは意味深な笑みを浮かべた。

「ルールの中でなら良いのさ」

レイサンは必死に考えた。贈り物をもらうのが合法だとウエディは言う。

「と、言う事は先にウエディさんがゼジムさんに何か贈り物をして、そのお返しはその耳飾り？」

ふわふわと漂う推測をうまくつなぎ合わせて言葉にする。

「さすがレイサンだねえ。その通りだよ」

素直に関心され、レイサンはちよつと照れた。

「でっ、でも、いつの間に」

口に出すより早く、タナで起きた事が頭に浮かんだ。

あの時、彼女が一人で出歩いた事があった。ロンドとレイサンも後を追ったが、すぐに彼女を見つけたわけではない。

ウエディが外に出た理由が、もしもゼジムへの贈り物を買う為なら。

「そう、それが外に出た理由だよ」

「けど、そうなると、ルールを破っていませんか？」

外出は常にゼジムが一緒になければいけない。ゼジムを好きではないレイサンですら知る、屋敷の女性達には当たり前前のルールだ。

「ああ、私だけは実は一人で外出しても良いし、私がいれば、あなたも外に出れるのよ」

「はあ!？」

レイサンは思わず、素っ頓狂な声を上げてしまった。そんな話は初耳だ。

「それじゃ、結局特別扱いじゃないですか!」

「それだけは特別だと認めなきゃいけないねえ」

ウェディの答えに、レイサンは不満を感じた。それでは結局、女性達は平等ではない。

「そんなのずるいです」

レイサンは明らかに不満を表情に出していたが、ウェディは静かに笑っただけだった。

「一人で外出して良いのにも理由があるんだよ」

「なんですか、その理由は？」

どんな理由でも許せる気はしなかった。理由を聞くのは納得する為ではない。誰が、そのルールを作ったのか聞きたいのだ。

「それは、言えない。レイサンは勿論、他の皆にも言えない事」

「けど、そんなのずるくないですか!」

「すまないねえ。これはゼジムと決めた事なのさ。言う事はできないよ」

レイサンはまじまじとウェディを見つめた。その瞳からは言い知れぬ威圧感を感じた。思わず震えあがりそうになる程に。

「ごめんねえ。怖がらせる気はなかったのだけど」

ウェディはにつこり微笑んだ。威圧感を感じる事は無くなったが、彼女の急激な変化のせいでレイサンも毒気を抜かれてしまった。

「いえ、そこまで拒否なさるなら聞かない事にします」

それでも、レイサンは皮肉を交えて言った。それがウェディに通じないのはわかってているが。

「助かるよ」

予想通り、ウェディはレイサンの思いなど気にする素振りもなか

った。

レイサンは内心愚痴だらけになっていたが、もうウェディに問い詰めても、答えは出てこないだろうと思ったので、仕方なく先程頼まれた、二人を呼ぶために厨房から出る事にした。

今だに狂う様に布団を殴り続けるティナに声をかける事を躊躇い、彼女の近くに書き置きし、レイサンはエレナを呼びに行った。

エレナが屋敷に来てから、レイサンはすぐにゼジムと共にタナへ向かってしまったので、彼女と共にした時間は僅かしかない。

それでも、タナへ向かう前の時間や、帰って来たらティナに捕まるまでの時間をエレナの為に割いて、積極的に話していた。

エレナの様子はタナへ向かう前と特に変わらなく、部屋にこもって、彼女の主人　フォッサという貴族　の身を案じている。

彼女の主人であるフォッサは、異端者を隠していた事が発覚し、その尋問を受けている最中である。

エレナが屋敷に住むようになった理由もそれである。

尋問はまだ終わらないようで、そろそろ二週が経とうとしている。王国憲兵隊の尋問は地獄と遜色ないと言われており、それに二週近くも耐えているフォッサには脱帽だった。

早く、エレナがフォッサとまた一緒に過ごせる時がくれば良い、とレイサンは思っている。

それも、遠くない未来だろう。今まで耐えてこれたのだから、フォッサが口を割る事はないと確信できる。

会った事もない人だったが、その強固な意志は尊敬できた。自身の主人でもあるゼジムと比べればなおさらである。

思わず溜息がこぼれそうになるが、エレナの部屋の前に着いたので、なんとか気を取り直す。

「エレナさん、ご飯ですよ」

ドアを何度か叩き、中のエレナに呼びかける。少しすると、申し訳なさそうにゆっくりと、ドアが開き始める。

「エレナさん、一緒に行きましょうか？」

レイサンが微笑んで言うと、エレナも控えめに微笑んできた。本当に僅かだが、確実に心が近づいてきている、とレイサンは内心喜んだ。

「エレナさんは、どうしてフォッサさんが好きなんですか？」

食堂に向かう最中、レイサンは何気なく聞いた。

ゼジムの様な若者と違い、フォッサは初老まではいかないが、エレナとの年の差は十ではすまない。

恋愛事に疎いレイサンだったが、街で見かける男女は年が近そうに見えたので、エレナとフォッサの関係は気になっていた。

「どうしてって……」

か細い声に変わりが無いが、そこに不安や恐れはなかった。彼女は元々声が細いのだろう。

やはり、少しは仲良くなれた様で、レイサンは安心した。

エレナは暫く天井を見上げていた。

レイサンは、そこまで答えにくい質問だと思っていなかったのので、焦った。

「私を愛してくれたから……です」

レイサンが密かに話題を変えようか悩み始めた頃、エレナがようやく口を開いた。

顔はおろか、耳まで真っ赤なエレナを見て、レイサンも不思議と赤くなった。

「そうなんですか」

彼女の真つすぐな想いが伝わり、レイサンは、なんだか心が暖かくなっているのを感じた。

幸せそうな人を見ると、なんだか和んだ。

「あの方は、私を拾って、育てて、愛してくれました。だから、私もあの方のお役に立ちたいと思っています」

照れながら、それでもはつきりと言うエレナ。

ここまで来ると、完全に惚気だ。エレナの周囲が熱くなった気さ

えした。

「そつ、そうなんですか」

レイサンはどもりながら、気付かれないようにエレナとの距離を少しだけ開けた。

控えめな女性だと思って侮っていた。彼女のフォッサに対する愛も、屋敷にいる女性達に負けないぐらい凄かった。

「レイサンさんは、どうなのですか？」

「えっ？」

自分の事を聞かれるとは思っていなかったレイサンは驚いて聞き返してしまった。

彼女から質問された事など、今までになかった。

「ゼジム様……の事です」

落ち着いてエレナの言葉に耳を傾け、理解する。

「私は……わかりません」

好きではない、と言えなかった理由はわからない。しかし、それを口に出すのは何故か嫌だった。

エレナは微かに首を傾けた。

「どうして好きかわからないのですか？」

今度はレイサンが首を傾げる。何故ゼジムが好きだと言う前提で話が進んでいるのだろう。

「えっと……」

どう言えば良いのかわからず、言葉に詰まる。

レイサンは混乱していた。いつもなら、きつぱりと言えたはずだ。「何か悩みでもあるのですか？」

レイサンは弾かれたようにエレナを見た。急に動いたレイサンに、エレナも驚いていた。

自分の心を読み当てられたのかと思ったが、ただ純粹に質問しただけの様で、レイサンは安堵した。

「いえ、なんというか、ややこしいのですが、現在好きになる最中と言いますか、見定めの時期と言いますか」



安堵したおかげで、先程引つ掛かっていた言葉も出す事ができた。少し、強がった部分もあったが、これが本来の自分のはずだ。何故、言えなかったのか、本当に不思議でならない。

「はぁ」

エレナはおかしな話を聞いた様に、戸惑いを顔に出している。

この屋敷には、ゼジムを愛している者ばかりである。エレナは当然レイサンもゼジムを愛していると思っていたのだろう。

「私は、まだ入って間もないので、彼を愛するとか、そういう関係とかではないのですよ」

補足説明をして、ようやくエレナは納得した顔で頷いた。そして、羨望の眼差しを込めた様な笑顔を浮かべた。やはり、控えめだった。「相手の想いを大事にする、とても優しい方なのですね」

ゼジムの事を優しいと言われて、レイサンはその言葉をそのまま受け取る事を躊躇ったが、彼が褒められて悪い気はしなかった。

「だって、石破師の方々は、大層傲慢な方が多いと聞きます。反動が性欲だから、能力を使いすぎると理性が飛んでしまうみたいなのです」

石破師が傲慢な者だとはレイサンは知らなかった。近くにいる石破師がゼジムしかいないし、石破師という能力が、性格にまで及ぶとは思ってもいなかったのだ。

だから、この言葉にレイサンは素直に嬉しくなった。

（ただの悪い人ではなかったんですね）

嘘をつくし、適当だし、女性を何人も抱いているし、それでも飽き足らず新しい女性を愛そうとしているしで、落ちる一方で上がる事を知らなかったゼジムの評価が初めて上がった。

「私はただの女性好きだとばかり思っていました」

しかし、初めて評価を上げた自分がなんだか恥ずかしくなり、それを隠す様に口から出たのは貶めるような言葉だった。

「それは……その、石破師の場合は一回で終わる事が稀な様ですし、一人では相手にできないとも言われておりますし……」

エレナは先程よりも顔を赤くし、ぼそぼそと話にくそうに言った。

「うーん……どういう意味でしょうか？」

レイサンにはさっぱりわからなかった。彼女の話した内容も、顔を赤くする意味も。

「いやっ、わからなければ良いのです。あつ、食堂に着きましたね。入りましょうか」

エレナは今までの遠慮がちな言葉と違い、はっきりと話を終わらせた。それどころか、率先して食堂に入ろうとしている。

今まででは考えられない行動だ。それが、質問に答えたくないからだとは思わなかったレイサンは、嬉しそうに彼女の後を追ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9991s/>

---

悲しみの果てに

2011年10月7日03時21分発行